

---

# 春の訪れ

JUN

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

春の訪れ

### 【Nコード】

N7934A

### 【作者名】

JUN

### 【あらすじ】

一年前のある夏の日。俺は一人の女の子と出会った。俺はその子とある約束を交わしそれから七ヶ月、一向に答えを出さない我慢出来なくなったのか突然その子がやって来た！更にこの春、俺は色々な女の子に出会う。男勝りのケンカ友達、いつもニコニコしている学園の理事長の孫、不良に絡まれていたところを助け一目惚れされた後輩、俺の昔の大切な人によく似ている女の子。俺は一体全体どうすりゃいいんだあ！？

## 人物紹介（前書き）

この作品は前作「孤独からの救い」の続編です。新キャラとかいっぱい出したかったんで、田舎の舞台から学園に舞台に思いっきり変えて主人公の恋愛模様を書いていきたいと思います。あしからず。とりあえず人物紹介ッス。

## 人物紹介

もりがみじゅん  
森神潤

本作の主人公。正義感が強く、1度約束したことは死んでも守り通すをモットーにしている。過去に大切な人を守りきれなかったことを悔いている。

くしろはるな  
久代春奈

本作のヒロイン。天然ボケボケの少女。しかし、幼い頃に両親をなくし、引き取った叔母にもあまりよく思われてなく、ずっと1人きりの孤独に耐えていたが、去年の夏に潤に救われた。

しのはらしんいち  
篠原信一

潤の小さい頃からの親友。喋り方は少しじじくさいが、容姿端麗、頭脳明晰、運動神経抜群の完璧男。潤と美咲に何があったかを知る人物。

きりおかあやの  
霧丘綾乃

ボーイッシュでさっぱりとした性格でバスケット部に所属している。4人組のなかで唯一部活に精を出している。潤と美咲の事を知る人物。密かに潤に思いを寄せている。

てんじんみひめ  
天神美姫

私立天神学園高等部理事長の孫。潤と美咲の事を知る人物。理事長

の孫ということで、初等部の頃から周りから敬遠されていたが、分け隔てなく接する潤達と出会い美姫自身も変わっていった。綾乃と同様潤に思いを寄せている。

みなせ ゆきか  
水無瀬雪華

天神学園高等部2年生。不良に絡まれていたところを潤が偶然助け出した少女。潤を運命の人と信じてやまない。

ふじ もりみさき  
藤森美咲

潤と信一の共通の幼なじみで潤の恋人だった少女。昔ある事件に巻き込まれて命を落とした。

やえの さくら  
八重野桜

突然潤達のクラスに転校生として入ってきた謎の少女。美咲と瓜二つの顔をしている。

## 第一話

私は走る

あの人の元へ

この一年、ずっと待ち望んでいたその人の隣

私は走る

春の訪れと共に

・・・。

四月のある晴れた登校風景。

二人の男が肩を並べて歩いていた。

「ふあゝあ。今日も暇だな。」

「ふつ、今から普通に学校だろう。」

私立天神学園てんじん に向かう通学路であくびをしている男子学生森神潤もりがみじゅん の呟きに、その親友篠原信一しのはらしんいち は冷静に突っ込む。

「俺は授業中は寝ることしか出来ねえ。」

「ふつ、まあお前らしいがな。」

信一は毎度の事に微笑を浮かべる。

この篠原信一という男は、容姿麗端、頭脳明晰、運動神経抜群。

そして、もてる。何故かもてる。

が、しかし、本人は全く気付かない。というより、興味がないらしい。

さらに、余談だが、この男は学園の裏情報に詳しい。

何やら、学園の裏のトップと知り合いらしいが詳しい事は分からない。

「そういえば、潤。明日、我がクラスに転校生が来るらしい。」

「それも、裏情報か？」

「そうだ。そして、女子で俺の情報だとなかなかの美貌らしい。」

「ふーん、ま、別に俺には関係ないな。」

潤は興味を失い、そのままスルーした。

（そう、本当にどうでもいい。）

潤は去年にあった出来事を思い出していた。

あの少女に答えを示すまで、潤はそういう事に興味を持てなかった。

あっちから帰ってきた時から、潤は物思いに耽る事が多くなった。

そのせいで、信一や綾乃あやのや美姫みひめに不審に思われていた。

期限は残り四ヶ月、潤はまだ答えを出せないでいた。

「はあー。」

「何だ今度は、溜め息なんかついて？」

「ん？ああ、すまん。ちょっと考え事してた。」

去年の事は潤はまだ誰にも話していない。

これは自分だけの問題、他の奴らに頼るわけにはいかないと潤は考えていた。

「何を悩んでいるのか知らんが相談くらいはのってやらんことない。」

どうにも回りくどい言い方だったがそれだけでも潤は胸がいっぱいになった。

「ああ、さんきゅ、でも大丈夫だ。」

「そうか。」

それっきり、信一はその話題には触れてこなかった。

.....

「あゝ、やっと終わったか。」

午前中の授業が終わり、あくびをしていると女生徒が二人、潤の所



にやって来た。

「何言ってるのよ、ずっと寝てるだけだったじゃない。」

そう言ってきたのは霧丘綾乃きりおかあやのという女の子。

潤の中等部時代からの友達。見た目は髪がショートカット、目は少し切れ目で身長が他の女子よりちょっと高め。

いつも潤と低レベルな言い争いをしている。

「あは、森神君つてよく寝てるよね。」

この女の子は天神美姫てんじんみひめ、綾乃と同じく潤の中等部からの友達。

容姿は綾乃と正反对で、腰まである長い髪をリボンでまとめてポニテールにしてある。目は少々垂れ目、身長は百五十センチ前後程。

そして、意外と腹黒い。

「いいんだよ、俺は学園では寝るのが仕事なんだよ。」

「うわー、何かふざけた言い訳ー。」

綾乃は呆れ顔で溜め息をついた。

「しょうがないよ、それが森神君だもん。」

「うわ、ひどい……。」

さらっと笑顔で毒を吐く美姫に潤は顔を引きつらせた。

「ところで今日のお昼はどこで食べる？」

「俺はどこでもいいぞ。」

「私も。」

俺と美姫の言葉にうーんと綾乃が唸りながら考えている。

「じゃあ、学食でいつか。」

学食に決まったらしいので潤が腰を上げた瞬間、

「ふむ、では俺も行くでしょう。」

「のわ!？」

いつの間にか背後に信一が立っていた。

「信!いきなり、背後から出てくるな、びびるわ!」

「ふっ、まだまだ修行が足りんなあ。」

「くっ!不覚……。」

「あんたら、いつまでやってんの?置いてくよ。」

潤と信一が不毛なやりとりをしていると綾乃と美姫は教室を出るところだった。

「ああ、今行く。ほら、信行くぞ。」

「ああ。」

潤と信一は小走りしながら二人を追いかけた。

……。

「そっいえば信君、うちのクラスに転校生が来るって本当?」

綾乃が格安きつねうどんをすすりながら信に尋ねる。

行儀悪いなこいつ、と潤が思っていると、

「お行儀悪いよ、綾ちゃん。」

美姫が潤の言葉を代弁した。

「いいの、いいの、気にしない。全く姫ちゃんは細かいんだから。」

綾乃の女とは思えない発言に美姫は呆れていた。

「美姫、諦めろ。こいつはこういうやつだ。」

「そだね。」

「ちよつと潤！それどういう意味よ！ていうか、姫ちゃんも同意しない！」

綾乃が食事中にも関わらず、怒鳴る。

「で、噂の真意はどうなの？」

だが、綾乃はすぐ元の話題に戻した。

「ああ、確かな筋からの情報だ。間違いあるまい。」

「あ、やっぱり本当だったんだ。」

美姫も気になっていたのか、紙パック紅茶を飲みながら聞いていた。

「やれやれ、そんなに騒ぐ事かね？」

「え？森神君、気にならないの？」

潤がそう呟くと美姫が首を傾げた。

「いや、まあ別に興味ないしな。」

「あんた、そんな事言つて、転校生いじめないでよね。」

綾乃がじと目でそんな事を言つてきた。

「失礼な、俺はそんな事しねえよ。」

潤はそう言つてカツ丼の残りを掻き込んだ。

.....

「ただいま。」

潤が学園から帰つて来ると家には誰もいないようだった。

「あれ？誰もいないのか？」

ふと、テーブルの上にある紙が目に入った。

「なになに？」

『ハロー、マイサ・・・』

ビリ

潤は無言のまま紙を破り捨てた。

「つーか、出だして読む気無くした。」

とりあえず今のことは忘れて冷蔵庫に何かないか探してみる。

が、

『ひどいじゃないか、マイサン！紙を破るなんて！パパは悲しいぞ。』

「あ、あの親父、予知能力でもあんのか！？」

潤は仕方なくその手紙を読み始めた。

『さて、前置きはこの辺にしておいて、本題に入ろうか。』

「・・・最初から入れよ。」

『突然だが、パパはアメリカに転勤になった。』

「はあ！？」

『それでママも心配だからという事でついて来てくれることになった。では、強く生きるんだぞ、マイサン』

ブチ

「あのくそ親父いーーーー！！！！何が　だあああああ！！！！」

潤は怒りに任せて思い切り叫ぶ。

「ん？まだ続きがある。」

『P・S・明日から家族が増えるから。家事は主にその子がやってくれる事になってるYO!襲っちゃ駄目だぞ』  
「な、な、な、何だつてえーーーー!!!!!!?」

潤はその日二度目の雄叫びを上げた。

(第二話へ続く)

## 第二話

まったく、あのくそ親父はまた勝手に決めやがって。

カップラーメンをすすりながらぶつくさと文句を言った。

つか、家族が増えるなんて事も聞いてねえつつの。

先程親父の携帯に電話し、事の経緯を聞いた。

どうやら、親父の転勤は本当に急だったらしい。

それで、親父だけでアメリカへ行くのは心配ということでも母さんもついて行くことになった。

その話を聞いたとき母さんの声が妙に弾んでいたのは気のせいかな？

家族の方も明日から家に来てくれることになっているらしい。

つか家族が増えるなんて聞いてねえよ！と言うと、

「だって反対されそうだったんだもん」

だもん　っじゃねー！！！！

普通は反対されそうだから相談するんだろうが！

ハア、もう何か全てがどうでもよくなってきた。

俺は全てに絶望し、涙を流しながら眠りについた。

.....。

次の日、俺をみた信が開口1番に言った。

「どうしたのだ？そんな全てに絶望したような顔は。」  
「うるせー。お前に俺の苦勞がわかるか。」

俺は沈んだまま信に言った。

「そっいえば、今日は転校生が来るんだっとな。」

「ん？ああ...。昨日お前が言ってたやつな。」

ん？待てよ。今日、うちのクラスに転校生が来る。  
今日、うちに家族が増える。

.....まさかな。冗談だよなあ.....。っーか冗談であって欲しい。  
いや、まちで.....。

「どうした？今度はものすごい冷や汗かいてるぞ。昨日はため息ついたり、今日は沈んだり、冷や汗かいたり忙しいやつだな。」  
「うっせ！ほっとけ！」

俺は神に祈るように登校した。

.....。



ふう、昨日で1年分の苦労をした気がする。

今日も今日でいろいろありそうな気がするしなあ……。

「ねえ。何であいつ真っ白に燃え尽きてんの？」

「さあ？俺にもわからん。朝からあの調子だからな。」

「誰か森神君に、立て！立つんだ！ジーって言ったらどうだろ？」

「姫ちゃん……。もうそれかなり古い。」

綾乃達が話していると担任の教師の安達祐介（45）が入ってきた。

「ほらほら。全員席につけ。」

と、間延びした声で言った。

「今日は、みんなに新しい仲間を紹介する。」

「先生！女の子ですか？」

突然、お決まりなセリフを吐く男子生徒A。

「男共。喜べ。女の子だ。しかも、かなりかわいいぞ。」

その一言で潤と信以外の男子のテンションが大幅にアップした。

そのとき、潤は窓の外を見ながら全く別のことを考えていた。

「ハア、今日来る子ってどんな子なんだろうなあ。仲良く出来ればいいけど。」

男子群が盛り上がっているときにボソツと呟いた。

「女の子と暮らす……か。春奈が知ったらなんて言うかな。」

春奈か……。元気にしてっかな。久しぶりに会いたくなっただな。

「それじゃ、自己紹介。」

「はい。」

潤が考えごとをしているうちに、転校生が自己紹介を始めた。

「久代<sup>くしろはるな</sup>春奈と言います。よろしくお願いします。」

久代…春奈ねえ。春奈と同じ名前だなあ。

……………久代春奈？

春奈あ！？

バツとその転校生を見た。

見回している。

あ、目があった。

あ、固まった。

と思ったら、口を押さえて、じわっと目に涙が溜まっていった。

「お、おい。どうした？」

安達祐介（45）が慌てているが春奈は聞いていない。

「潤君！！！」

突然春奈が走った。

飛んだ。

って！？

「なにいいー！！？」

ドスッ！

「ぐは！？」

ガン！

「ごは！？」

ものすごいスピードで飛んできた春奈をなんとかキャッチしたが勢い余って、床に頭をぶつけてしまった。

「潤くん……。ぐす、えぐ、やっと、ひっく、やっと会えた……。あいたかったよ〜。」

春奈は泣きながら俺に抱きついたままだった。

周りのやつらは呆然としていて、何故か信だけは納得したような顔

だった。

俺はというと、驚きと頭をぶつけたときの痛みと春奈をキャッチしたときにうまく鳩尾に入ったときの痛みがごっちゃになって押し寄せてきていた。

（第三話へ続く）

### 第三話

「あゝ、森神。感動のご対面は結構だが後にしろ。」

安達祐介（45）がはっとして注意した。

「お、おい春奈！聞きたいことは山ほどあるがとりあえず離れろ！」  
「やゝだ。久しぶりに会ったんだからエネルギーチャージ中。」

春奈は泣き止んだことは泣き止んだが、今度は抱きついて離れよう  
としない。

「あゝもゝ、しょうがないな。」

俺は抱きついて離れようとしないうちに春奈を横抱きにして逃げた。

「きゃー 潤君に連れ去られるー」

「勘違いされるようなことを言うな！」

俺は忘れようとした。

そう、忘れようとしたさ！

教室を出るときの男子の殺意に満ちた目と女子の汚物を見るような  
目なんて。

.....。

そして俺達はほとぼりがさめるまで屋上で過ごすことにした。

「んで？なんでお前がこっちに、しかも転校生として来たんだ？」

「んつとね、簡単に言つとね。捨てられちゃった。」

「…………へ？」

あまりに衝撃的な内容だったから一瞬訳が分からなかった。

「おま、なんでだ！？」

「んと、もう私を養うのが疲れたんだって。それで、家を追い出されちゃったんだ。」

まじかよ……。嘘だろ……。

「お前、何でそんなあつさりしてんだよ！」

そう言つと、春奈は悲しそうに笑つて、

「だって、多分いつかこうなるんだろうなあって思つてたから。」

そんな、今にも泣きそうな顔をして言うなよ……。

「それで、そのあとどうなつたんだ？」

俺は幾分冷静になって聞いた。

「それで、捨てられた後、幸さんに助けてもらつたの。」

「ばあちゃんに…………。」

「そのあと幸さんに頼んで潤君と同じ学園に編入させてもらったの。」

「

「そうだったのか……。クソッ！何で春奈ばかり不幸な目にあうんだ！」

「それは違うよ。潤君。私、不幸とは思ってないよ。」

「何でだよ。こんな目にあってんのに。」

「だって、そうじゃなかったら潤君に会えなかったもん。」

「春奈……。」

「確かに前の私だったら、何で私ばかり！って思うかもしれないかったけど、今はこれで良かったって思ってる。」

俺は嬉しそうに話す春奈を見つめた。

「潤君に出会えたんだもん。私、幸せだよ。」

「そうか……。春奈は強いな。」

「潤君が変えてくれたからだよ。」

「そっか。じゃあこの話はおしまいだ。」

「うん。あ、ねえ潤君。」

突然春奈が顔を赤らめながら聞いてきた。

「あのときの……。」「

キンコーンカーンコーン。

「あのときの？」「

「あ、ううん！やっぱり何でもない。」

「？」「

何だ？春奈のやつ。

「さってと、そろそろほとほりも冷めるころだろう。行くぞ、春奈。」

「うん！」

俺達は並んで教室に向かって行った。

.....。

キンコンカンコン。

「ふへー、ようやく昼休みだあ。」

あのあと春奈を教室に連れて帰って来たときから俺に視線が集中していた。

そのなかでも特に鋭い視線を放っている2人が近づいてきた。

「ちょっとツラ貸しな。」

「.....。」

綾乃と美姫だった。

「はあ？何で？」

「用があるからに決まってるでしょう！さっさとこっち来る！」

「.....。」

「は、はい！」

俺はそのまま空き教室へと連れて行かれた。

.....。

「で？あの久代春奈って子とはどういう関係なの？」



「正直に言った方が身のためだよ。」

綾乃は額に青筋を浮かべて、美姫は笑ってはいるが目が笑ってない。

「だから、さつきから言ってるようにただの友達だつて。」

「嘘つけ！」

「そうだよ。いくらなんでもただの友達ってことはないと思うよ。」

さつきからこの話題が10分ほど続いている。

「ったく、案外おまえ等もしつこいのな。」

「正直に言えばさつきと終わるのよ！」

「だから正直に言ってるだろ。」

俺がため息をつくと、教室がノックされた。

「潤くん。ここにいるのー？」

どうやら春奈が尋ねて来たようだ。

「ちょうどいいわ、あの子にも聞いてみましょう。姫ちゃん、連れて来て。」

「ラジャーです！」

美姫がぱつと敬礼して春奈を教室に招き入れられた。

「あ、潤君。何してるの？」

「ただいま尋問中。」

春奈はよくわからないといった表情をしていた。

「はいはい。久代さん、ここに座って下さい。」

綾乃は椅子をもってきて言った。

「え、あ、はい。」

春奈はちよつと戸惑いながら椅子に座った。

「単刀直入に聞くと、久代さんと潤ってどういう関係なの？」

おいおい、自己紹介もなしで聞くかそういうこと。

「え？関係って、それは……、」

「それは？」

綾乃と美姫が見事にハモって聞いた。

「えへへ……。」

「何故そこで顔を赤らめる。」

俺はすかさず春奈に突っ込みをいれた。

「やっぱりそういう関係なんじゃないのよ……！」

「うわーん、森神君が裏切ったー！」

綾乃は激怒し、美姫は号泣しだした。

「までまで。何を勘違いしてんのか知らんが俺達は別におまえ等が思ってるような関係じゃない。」

そう言ったら、春奈は少し悲しそうな顔をした。

「この期におよんでまだしらを切るき？」

「違うつつーに。春奈、話してもいいか？」

「え？あ、うん。」

春奈は悲しそうな顔から困ったような顔をして言った。

俺は去年あったおおまかな事を話した。

まあ、不意打ちのキスと捨てられた事は伏せておいたが。

……………。

「つとまあ、こんなところか。つて！？何おまえ等泣いてんだよ！俺が話し終えたら2人は少し泣いていた。」

「だって…、久代さん、子供るときから大変だったんだね…。」

と、綾乃が言った。

「私、ちょっと気持ち分かるかも、私も子供のころから周りから敬遠されてたから…。辛かったんだね…。」

美姫は声を震わせながら言った。

「うん。でも潤君が救ってくれたから。」

と、春奈が俺の方を向いて言った。

「ふーん、あんたもたまにはなかなかやるわねー。」

「うるせー、たまには余計だ。」

「それで、森神君は告白の返事は保留のままなの？」

美姫が突然そう聞いてきた。

「あ、ああ…。」

「あんた、そういうのは早く返事しなきゃダメでしょ。」

綾乃が俺を咎めるように言った。

「ああ、でもまだ答えが出せないんだ。おまえ等も知ってんだろ。美咲のこと……。」

そういうと、2人はしまったという表情をして俯いてしまった。

春奈が美咲さんって誰なんだろう？と思っていたら、

「ふむ。なるほどな。去年そういうことがあったのか。」

「ぬわー!!?」

「「「きゃあ!!?」」」

突然俺の背後に信が立っていた。

「お、おまえまた!どっから来たんだ!」

「ふ、企業秘密だ。」

おまえは忍者か！？

「去年、おまえが帰って来てから、物思いにふけることが多くなっていたから、何事かと思ったがそういうことがあったとはな。」

信は納得したように言った。

「自己紹介が遅れたな。俺は篠原信一という。この男の友人をしている。以後お見知りおきを。」

と、信がじじくさい自己紹介をした。

「あ！あたしも自己紹介忘れてた！あたしは霧丘綾乃。よろしくね！」

「あ、私も。私は天神美姫です。よろしくお願いします。」

「あ、久代春奈です。よろしくお願いします。」

と、全員の自己紹介が終わった。

「あ、そうそう。あたしのことは名前で呼んでね。」

「あ、じゃあ私も。」

「ふ、俺もそれでかまわない。」

と、3人は言った。

「うん！私も名前でいいよ。えっと、綾ちゃんに姬ちゃんに信君！」

どうやら春奈はうまくとけ込めそうだな。

俺が一安心していると、信がこっちに来て言った。

「で？誰を攻略するのだ？」

「アホか——！！！」

俺はその日1番の雄叫びをあげた。

（第四話へ続く）

## 第四話

キンコーンカーンコーン。

「はー、地獄の1日がようやく終わった。」

そう！まさに地獄だったのだ。

男子には嫌がらせをうけるわ、女子には避けられるわでほんと辛かった……。

「潤くん！一緒に帰ろー！」

「おお。そうだな。」

俺は春奈と一緒に帰る事にした。

……。

「そつえば、春奈ってどこに住んでんだ。」

俺は帰り道の商店街に入ったところで聞いた。

「実は今日からお世話になることになってるの。」

「え？じゃあ昨日はどこで寝泊まりしたんだ？」

「昨日は夜遅くにこっちについたからホテルに泊まったの。」

まあ確かにばあちゃんがいる田舎からこっちまで相当時間かかるかなあ。

「何でも、幸さんが今日お世話になる人に話をつけてくれたみたい。」

「へえ、そうなのか。」

「ばあちゃんもなかいいところがあるもんだ。」

「でも、幸さん住所だけしか教えてくれなかったんだあ。」

「は？何で？」

「何でも、行ってみれば分かるって言ってた。」

「ふーん、その人に迷惑かけるなよ。」

「春奈は大丈夫だよ、と言った。」

「まあ、春奈なら誰とでも仲良く出きるだろう。」

「あ、そういえば今日うちにも家族が増えるって親父が言ってたなあ。」

「え？そうなの？」

「驚いたように春奈が聞いた。」

「ああ。勝手に親父が決めてな。女の子っていつてたな。でも、突然親父の転勤が決まって母さんもついていったからしばらくはその子と2人きりらしい。」

「俺はため息をつきながら言っと、」

「女の子……、しかも2人きり……！！！！？」

「突然耳をつんざくような声をあげた。」



「！？、おい突然叫ぶんじゃないよ。」

「だって、だって…、ふえーん、潤君、私をほったらかしにして、ひつく、うぐ、その子とラブラブしちゃうんだ……。」

今度は泣き出してしまった。

「おいおい、誰がんな事言ったよ。」

俺は呆れながら帰路についた。

……………。

「ここが俺の家。何かあったらいつでも来いよ。」

「うん……。」

なんとか泣き止んだものの、春奈はまだぐつついていた。

「そういえば、お前がお世話になる家ってどこなんだ。」

「一応知っておこうと思って俺は聞いてみた。」

「えっとこの辺のはずなんだけど……。」

そう言っ春奈は一枚の紙を取り出した。

「どれ、ちょっと貸してみ。」

はい、と春奈は俺に紙を渡した。

俺はそこに書かれていた住所を読んだ。

「・・・あはー、まじかよー。」

「なにになに？どこにあるの？」

俺はその家を指差した。

そう、俺の家に・・・。

「え？ここって潤君の家？ってことは・・・」

「どうやら今日来る女の子ってお前のことだったみたいだな。」

俺はなかばあきらめながら言った。

「え？え？えーーーー！！！！？」

本日2回目。

「お、お前また・・・」

「ほんとに？やった、やったー。」

春奈は嬉しそうにはしゃいでいた。

はあ、まあいいか。

「ま、とりあえず中に入れよ。」

「うん！」

・・・。。。

「おじゃまします。」

「まあ、適当に座ってくれ。」

「うん！」

とりあえず春奈をリビングに招きいれ座らせた。

「そういえば、春奈の荷物っていつ届くんだ？」

俺はキッチンで紅茶を入れながら聞いてみた。

「明日には、届くみたいだよ。」

「そうか。ほい、紅茶。」

「ありがとう。」

そう言って春奈は紅茶を少し飲んだ。

「あ、おいしー。」

「そうかい。そりゃよかった。」

俺も紅茶を飲みながら言った。

「そっぴゃ、春奈。お前、家事とかできんのか？」

昨日、親父が言っていたことを思い出し、聞いてみた。

「うん、昔から結構やってたから。」

昔からか・・・。

やらされていたのではないかと思ったが、今更言っことでもないの

で黙っていた。

「この家の家事は全部私がやるから任せといてね。」

俺が黙っていると急に春奈がそんなことを言い出した。

「いやいや、全部はさせられん。俺も何かやるよ。」

「え？いいよ。私がこの家にお世話になるんだから。」

「いいんだよ。春奈だけに家のことはさせられないし。」

「でも……、」

ああーもう！恥ずいからあんまり言いたくはないんだが、

「あのな、お前は、その…、この家に住む以上家族なんだから。その家族に遠慮なんかするな。」

「家族…？私…が？」

「ああ…。」

恥ずかしいので俺は視線を逸らしながら答えた。

「う……、ぐす……、」

「な！？おい、春奈。またか！？」

視線を戻すとまた春奈が泣いていた。

「だって、だって嬉しいんだもん…、うぐ…、ひっく、いままで家族だって、胸張って言える人がいなかったから…。」

そっか、春奈は昔からずっと孤独だったから……。

「春奈……。」

「あ……。」

俺はそつと春奈を抱きしめた。

「俺はずつと春奈の家族だ。ばあちゃんだってそうだし、まだ会ってないけど、親父と母さんだって家族だ。」

「うん……。ありがとう……。」

春奈はさらにポロポロと泣き出してしまった。

「全く、春奈は泣き虫だな。」

「そんなの……、全部、潤君の前でただだよ……。」

「そっか……。」

俺は春奈が泣きやむまでずつと頭を撫でていた。

……………。

「落ち着いたか？」

「うん……。」

ひととおり落ち着いたところで春奈を離した。

「じゃ、家の案内でもするか！」

「うん！」

とりあえず、春奈に早く家のどこに何があるかを知ってもらったために案内をした。

「俺達がいるここがリビングで奥がキッチンになってる。」

「ふむふむ。」

「で、そっちの廊下を曲がったらトイレでトイレの横の扉の奥が風呂。」

「へえ。」

春奈はもの珍しそうに辺りをキョロキョロしている。

「じゃ、次は二階な。」

「うん。」

俺は二階に登って説明をした。

「階段上がってすぐ右が俺の部屋。」

「へえ、ここが潤君の部屋……。」

俺の部屋に入ると春奈が辺りを物色し始めた。

「おいコラ、何をやってる。」

「え？ いや、男の子だからHな本とか隠し持ってるかなと思って。」

「スパーン！！！」

俺はハリセンで春奈の頭を軽快に叩いた。

どっからだしたかは秘密だ。

「いったゝい！何するのゝ。」

春奈が涙目になって抗議してくる。

「んなもん、あるわけねえだろ。ほら、次行くぞ。」

「はい……。」

春奈はまだ物足りなさそうだったが次にいくことにした。

「そっちの部屋が親父達の部屋。で、最後が春奈の部屋だ。」

「私の部屋？入っていい？」

「ああ。」

新しく春奈の部屋となる部屋は、ベッドと机しかない部屋だった。

「何もないね……。」

「当たり前だろ。もともと使ってない部屋だったし。」

「そっか。そうだね。」

そう言つて春奈はベッドに腰を下ろした。

「あ、そうだ。まだ、言つてなかった事があった。」

突然春奈がそう言い出した。

「何を？」

俺が聞くと、コホン、と春奈が言って、

「今日からお世話になります、久代春奈です。よろしく願いします。」

この挨拶は春奈なりのけじめなのだろう。

なら、俺もけじめをつけよう。

「ああ！こちらこそ！」

「じゃあ、今日は私が晚ご飯作るから買い物行こ！」

そう言つて春奈は俺の手を取り走り出した。

「お、おい。春奈！」

「いいでしょ？家族なんだから遠慮はなし、でしょ！」

「こ、これは家族のすることちゃう！」

気にしない、気にしない、そう言つて春奈は聞く耳もたなかった。

ハア、これから忙しくなりそうだなあ。

そう思いながらも俺はこれからを楽しみにしていた。

（第五話へ続く）



## 第五話（前書き）

最近更新が遅れ気味でしたが次からはガシガシいっちゃいますので。

## 第五話

チュンチュン

どこからか小鳥のさえずりが聞こえてくる。

「うーん……。ん？」

俺はゆっくりと目を覚ましたが、腕の中に抱き枕のような物があることに気づいた。

「お、おはよー、潤君……。やっぱり大胆だね……。」

「あ？あああああああ！！！？」

ドンガラガッシャーン！！！！

目を開けたら腕の中に春奈がいた。

俺は驚いた拍子にベッドから転げ落ちてしまった。

「お前！？何で！？デジャウゝか！？」

去年も同じようなことがあったぞ！

「うーん、ほとんど前と同じ。」

10分前

「ふんふん」

この家での初めての朝、私は早起きをしたので朝ご飯を作っていた。

「よし あとは潤君を起こすだけ。」

なんだかこうしてると、新婚さんみたい

いゃん 私ったら新婚さんだなんて

さつと、潤君起こしに行こーつと。

私は潤君の部屋の前まで来てドアをノックした。

コンコン。

「潤くん。起きてるー？」

どうやらまだ寝てるみたい。

ガチャ。

「失礼しまーす……。」

私はまだ寝てる潤君に抜き足差し足で近づいた。

「潤くん。起きてー。」

潤君の体をゆらゆら揺らしてみるのが起きる気配がない。

「起きないとちゅーしちゃうぞ」

んー、と目を瞑って顔を近づけると、

「え？きやあ！？」

突然手が伸びてきてそのまま抱き枕状態にされてしまった。

「えーっと、去年も同じようなことがあった気がする……。」

でも、ちよつと嬉しい……。

私はそのまま潤君の寝顔を見続けていた。

……。

「っという事なのです。」

「なのですっじゃねえだろ！起こせよ！」

「えー。だって寝顔見てたかったんだもん。」

「ったく、趣味悪いぞ。お前。」

見られるこっちは恥ずかしいんだっつの……。 「えー、そんなことないよー。 あ、そんなことより朝ご飯できてるから早く降りてきてね。」

「あー、ハイハイ。」

そう言つて春奈は下に降りていってしまった。

「……ふう、さてと、さつさと着替えて飯にするか。」

……。

「いただきます。」

「はい。召し上げね。」

春奈が作った朝飯はご飯や味噌汁などといったごく普通のラインナップだった。

まずは味噌汁から……。

ズズー、

「どう？どう？おいしい？」

春奈がわくわくした目で問いかけてきた。

ふむ。そうだな…。

「まあ、うまい。高得点だな。」

「やた〜〜！！」

誉められたのがそこまで嬉しいのか春奈は両手を広げて喜んでいた。

「じゃあ、じゃあ、次はね。」

「おいおい、あんまり時間ないんだからお前も早く食えよ。」  
「はい。」

ふう、こんなに騒がしい朝は初めてだぞ。

でも、こういう朝もいいもんだな。

.....。

「行ってきます。」

「行ってきました！」

2人して誰もいない家に挨拶し、一緒に家を出る。

「あ、そうそう、春奈に言っておくことがある。」

「なに？」

俺はあることを思い出し、春奈に言った。

「俺らが同棲してることは他言無用だ。」

「同棲.....。」

春奈は同棲というところに反応して、妄想の世界に旅立った。

「お、おい、春奈。戻ってこい。」

「ハッ！え、えっとつまり同棲してることを自慢していいんだね」

全然違う！真逆じゃん！？

「違っつつつに。誰にも言っちゃだめ、な。」

「え、どうして？」

明らかに春奈は不満顔だ。

「簡潔に言つと俺の寿命が縮まるからだ。とにかく言っちゃだめ。」

それがばれてうちのクラスの男子群の連携コンボが俺に炸裂すると思つと恐怖が体を支配する。

おーやだやだ。それだけは確実に阻止しなければ！

「うーん…、わかった〜。」

まだ不服そうにしていたがしぶしぶ承諾したみたいだ。

「それじゃ、急ぐぞ。」

「うん。」

話もまとまったところで俺達は学校へと急いだ。

……………。

教室に入るなり、おなじみの綾乃と美姫が寄ってきた。

「おはよー、潤と春ちゃん。」

「おはよう、森神君に春ちゃん。」

「おう、はよつす。」

「おはよう、綾ちゃん、姫ちゃん。」

朝の挨拶を済ませた後、美姫が唐突に切り出した。

「あ、そういえば今日のホームルームに春ちゃんの質問会みたいのがあるそうだよ。」

「「質問会？」」

俺と春奈は揃って首を傾げた。

「そうそう、昨日あんなことがあったからしきり直らしいわよ。」

今度は綾乃が説明してくれた。

あんなこととはおそらく春奈がいきなり俺に抱きついて、そのままの状態で俺が逃げたことだろう。

「あ、あははは、まあ頑張れよ、春奈。」

「えゝ私緊張するなあ。」

俺はかわいた笑いしか出てこなかったが春奈は素で緊張しているみたいだ。

「まあ普通に答えていけば大丈夫だと思うよ。」

「そうそう、なんとかなるわよ。」

緊張している春奈に2人がフォローをいれる。

ふむふむ、この2人は春奈のいい友達になれそうだな。

まあ大丈夫だと思っただけだが。

キンコーンカーンコーン。

「おっと、チャイムか。さっさと席に着くか。」



そう言つて俺達は自分達の席に着いた。

.....。

「では、これより質問会を始めろ。」

間延びした声をだして仕切る我ら3年1組の担任安達祐介（45）。

「では、久代く、前へ。」

「は、はい！」

春奈はまだ緊張した面もちで前へ向かつていった。

「んじやく質問したいやつは挙手。」

ハイ、ハイ、と結構な数の手が上がる。

「では、倉野。」

最初に質問するのは倉野と呼ばれた男子生徒A。

「久代さんの好きな食べ物は何ですか？」

うわ、またベタな質問きたなー。

「え、えつと潤君の作ってくれたエビフライです。」

「ブツ！！！？」

あいつ！！！よけいなことを付け加えやがった！！

ギロー！！

うつ！？男子群の殺意を帯びた目が俺に突き刺さる。

や、ヤバい。このままでは男子群の必殺コンボが俺に炸裂してしまうー！！

「え、えーと次の質問があるやつ手を上げろ。」

ナイス！先生！

まじちょっとだけ見直したツスよ！

今ので、7割の視線は元に戻った。

ふう、危なかった……。

……………。

次からは普通の質問が続いていき俺は安心して傍観していた。

そして、次の質問がきた。

「ズバリ！久代さんは付き合っている人はいいますか？」

うわ、ズバリ聞きやがった。つか嫌な予感がする……。

春奈はその質問で頬を赤らめて言いづらそうに答えた。

「え、えっと……付き合っている人はいませんが……好きな人はいます……。」

「ず、ズバリその人の名前は？」

男子群の目がいつも以上に真剣になっている。

自惚れかもしれないが多分俺なのだろう。

なので、俺は首を思いっきり振りつつ願った。

ダメだ！言うな！殺される！

「え、えっとその人は……、」

しかし、春奈は気づいてくれていない。

くっそう、このままでは……。

キンコーンカーンコーン。

そこで俺の願いが通じたのか授業終了の鐘が鳴った。

「いいところだが、これで終了だ。」

えー、とクラスのやつら（主に男）がブーイングを上げている。

おお、神よ！感謝致します！アーメン。

俺はその日その瞬間だけ神を信じ祈りを捧げたのだった。

（第六話へ続く）

## 第六話（前書き）

今回は潤と綾乃が出会ったいきさつを書いたっすよ。では、どうぞ。

## 第六話

「くはっ、疲れた……。」

地獄のホームルームが終わって今は昼休みの学食。

「何であんたが疲れるのよ？」

「うっせ、ほっとけ。」

俺は俺の苦勞を分かっている綾乃に言った。

「まあまあ、森神君も綾ちゃんも落ち着いて。」

俺と綾乃がいがみ合っていたのを見て美姫がなだめるすでにおなじみのパターン。

「ふっ、お前らも相変わらずだな。」

そして、信が鼻で笑う。

「ほへへ、みんなってチームワークとれてるね。」

「まあこの4人で一緒にいるのも長いからね。」

感心したように言った春奈に美姫が答えた。

「そういえば、潤君と信君は昔から一緒にいる幼なじみってことは聞いたけど、綾ちゃんと姫ちゃんっていつから2人と一緒にいるの？」

ふと春奈が思い出したように聞いてきた。

「そうだな……、もう昼休みの時間も少ないし、綾乃の話が美姫の話のどっちが聞きたい。」

残りの時間を考えると1人分の話くらいしか出来なかった。

「じゃあ……、綾ちゃんの話から！」

「お！あたしか。あんまり思い出したくないんだけどね。」

選ばれた綾乃は少し苦笑して言った。

「綾乃がバスケット部だったのはもう知ってるよな？」

「うん。」

「あれはこの中等部の1年の時だったか……。」

俺はおもむろに話し始めた。

5年前

「おい、信！ここでいいんだよな？」「ああ、そうだ。」

この日、暇つぶしの為に俺と信は部活見学をしていた。

あくまで暇つぶしなので入るつもりはなかったが……。

「ここではバスケット部が部員勧誘も兼ねて他校と練習試合をしているはずだ。」

「ふん。」

コートでは今は女子バスケ部が試合をしていた。

「おっ！あの女子強いな。」

ボールを持った1人の女子が相手ディフェンダーを次々とかわしていった。

そして、シュートを放ったが惜しくも外してしまった。

「ああ、惜しかったな、今の。」

俺は初めて生で見るバスケの試合に少し興奮気味だった。

「あれ？いまの女子交代されちった。」

「仕方あるまい。さっきからシュートは放っているがほとんど入っていないからな。」

「ほゝそうだったのか。」

ドリブルはかなりうまいのにシュートは入らないのか……。

「ふむ、いま交代された女子は俺達と同年のはずだ。」

「へゝ、そうなんだ。って！？何でそんなこと知ってんだ！？」

「ふつ、俺の情報網を甘く見てもらっては困る。」

こ、この男は……。

頼もしくもあり恐ろしくもあるこやつの情報網。

敵に回したくないな……。



「あ、ちっと、俺トイレ行ってくるわ。」  
「うむ。」

俺は信が頷いたのを確認してからトイレに急いだ。

.....。

「あれー？トイレってどこだっけな。」

まだこの辺は慣れていないせいか道に迷ってしまった。

道を聞こうにも周りには誰もいない。

参ったなあ。

しばらく見回していると、

お！人発見！

さっそく道を聞いてみよう。

「あのー、すみません。」

見た目からして女の子のようだ。

「.....。」

しかし、その女の子は俯いて黙ったままだ。

聞こえてねえのか？

「あのーすいませーん！」

今度は大きめの声で言ってみる。

「うるさいわね！！！どっか行つててよ！！！！」

何もしてないのに怒鳴られてしまった。

その言い方にカチンときてしまった。

「おい、その言い方はねえだろ。こっちは道を聞きたいだけだつーの！」

「うるさい！！！もうほつといてよ！！！！」

そこで初めて女の子が顔を上げる。

その女の子は髪がショートカットで少し目つきがきつかったが目を涙で赤く腫らしていた。

「あ、さっきのドリブルはうまいけどシュートが入らない人。」

ユニフォームを着ていたから選手だとは思ったがさっきの子だったとは。

しかし、その言葉が逆鱗に触れてしまった。

「何ですって！！！！」

や、ヤバッ！！目がマジだ。

「私だって好きでミスしてる訳じゃないわよ！あんたに何が分かるっていうのよ！！」

「……………」

怒鳴るその女の子を俺は黙って見ている。

そして、少し冷静になってペタンと椅子に座った。

「私だって、努力してるんだから……………」

「それで？お前は どうしたいんだ？」

俺は少しこの女の子のことが気になり聞いてみた。

「私は……………わからないよ。これからどうしたいのかなんて……………」

「じゃあお前はバスケットは好きなのか？」

「うん。」

「ならいいじゃねえか、バスケットが好きなら。部活以外でもバスケットができる。いつだってな。」

「……………」

その女の子はゆっくりと俺の方を見て言った。

「うん。そうだよ……………、その通りだよ……………。もう少し考えてみる。」

ハア、一段落か。

「で、さっきから聞いているんだがトイレどこ？」

「は？本当に道聞いているの？」

「さっきから言っただろ。んで、どこ？」

「その階段降りて右だけど……。」

階段降りて右だな、よし！

「そっか、ありがとう。じゃな。」

「あ、待って！」

階段を降りようとしたところで呼び止められた。  
くっ！そろそろヤバいことになりそうなんだが……。

「な、何だ？」

「ありがとね！少し吹っ切れた。私、霧丘綾乃。あんたは？」

「俺は森神潤。頑張れよ。」

「うん！ありがとう！」

そして、俺はトイレへダッシュした。

「森神潤……。潤か。けっこういいかも……。好きになっちゃったかも……。」

その一言は誰にも聞かれることはなかった。

……。

「つまあ、こんなところかなあ。なあ綾乃。」

「まあそうね。」

「へーそんなことがあったんだ。」

「ふむ。女子に奥手だった潤がいつの間にか霧丘と話すようになったのはそういうことがあったからなのか。」

ああ、そういえば信にこの話をしたことはなかったな。

「それで、それで？その後綾ちゃんはどうしたの？」

春奈はその後が気になっているようだ。

「その後は必死に練習してレギュラーになれたのでしたー。」

そう綾乃が言った後、春奈はすごい、すごいと感心していた。

「さて、そろそろ昼休みが終わるから教室帰るか。」

「そうだね。」

俺の言葉に美姫だけ反応してくれた。

春奈と綾乃はまだじゃれついていて、信はいつの間にかいなくなっていた。

「さて、次は美姫の話だが、本当に話してもいいのか？あんまり思っ出したくないだろ？」

「うーん。思っ出したくはないけど、もう平気。それに春奈ちゃんの話も聞いちゃったしね。」

「そうか……。美姫がそう言うならいいけど。」

「うん。」

思い出ただけで腹が立ってくる。

あの男は絶対に許せそうにない。

「潤君。そろそろ戻ろう。」

「ああ、そうだな。」

そう言って俺達は学食をあとにした。

（第七話へ続く）

## 第六話（後書き）

は、いい、どうも。次は次はいよいよ雪華の登場です。乞うご期待！

## 第七話（前書き）

いよいよ雪華登場！（名前は出てこないけどね）それではどうぞ。



## 第七話

キンコーンカーンコーン。

「ふう、今日も1日お疲れ、俺。」

「何言ってるのよ。やっぱり今日も寝てただけじゃない。」

綾乃が俺の1人言に突っ込みを入れた。

「いいんだよ。それよりお前、今から部活だろ。早く行かなくていいのか？」

「あ！ヤバ！」

慌てて綾乃が用意をし始めた。

「あんまり、無理はすんじゃねえぞ。」

「分かってる。ありがと、じゃね。」

「ああ。」

そう言っただけで綾乃は走っていった。

「さて、俺も帰るか。」

俺が帰ろうとすると、

「あ、潤君。帰るの？」

どこかに行っていた春奈が戻ってきた。

「ああ。一緒に帰るか？」

「うん！ちよっと待ってて。」

そう言って春奈は帰り支度を始めた。

.....。

他愛もない話をしながら商店街に来たときに思い出した。

「そついや晩飯の材料買って来なきゃな。」

「あ、じゃあスーパー行かなきゃ。」

「ああ、そうだな。」

俺達は連れ添ってスーパーに行った。

.....。

「んふふ」

「.....。」

「んふふふふ」

「いつまで笑ってるつもりだ？」

俺はいい加減しびれを切らして言った。

「えゝ、だってゝ かわいい彼女ですねだつてゝ」

さつき行ったスーパーの中にあるパン屋で春奈と一緒にレジに並んでいたら、レジ係りの人に、

「かわいい彼女ですね。」

と言われてしまった。

「彼女じゃないが……。」

「む、絶対振り向かせて見せるもん。」

ふう、やれやれ……。

「それにしても、そんなに量はなかったな。」

「うん。とりあえず家にどんな材料があるかを調べてから買いためしようと思って。」

今日買ってきた晩飯の材料は今日と明日の分しかなかった。

「さって、今日も腕をふるうぞー。」

「ん、俺も手伝うぞ。」

春奈はありがと、と言い俺の前を歩いてクルッと回って俺に言った。

「?どうした。」

「潤君。私の好きな人は後にも先にも潤君しかいないから、ずっと待ってるからね。」

春奈……。

「どうした、突然。」

「ん、何か潤君の周りって魅力的な女の子がけっこういるんだもん。」

は？それは綾乃と美姫の事か？

「それはないない。あいつらは単なる腐れ縁。」

「潤君、鈍感だから気づかないだけだよ、あゝあライバルが2人もいる。」

何を言っただか。

「ほら。早くしないとおいでくぞ。」

「あ！待って待って！」

俺はスタスタと先に進み始めた。

.....。

しばらく歩いていると、

「ん？」

ドカ！！！

「いったゝい！急に止まらないでよ。鼻ぶつけた。」

どうやら後ろを歩いていた春奈が俺の背中に鼻をぶつけたようだ。

「.....。」

当の俺は違うことを考えていた。

「どうしたの？潤く！？」

春奈は俺の顔を見たとき驚いた表情をしていた。

「どうしたの？……潤君……。去年の夏祭りの時みたいな顔してるよ？」

春奈はビクビクしながら聞いてきた。

「厄介事だ、春奈。先に帰ってる。」

「う、うん……。それはいいけど、危ないことはしちゃダメだよ。潤君がいなくなったら私、生きていけない。」

そう言う春奈に俺は苦笑して春奈の頭を撫でた。

「大げさだな。大丈夫、すぐ帰る。」

「本当に？約束だよ。」

「ああ、分かってる。早く行け。」

俺は春奈を先に帰らせた後、その場所に向かった。

……。

「きゃあ！」

路地裏に1人の少女が連れ込まれいかにも不良の輩3人取り囲まれていた。

「おい、嬢ちゃん。どうしてくれんだよ！」

「こいつの腕、折れちまったかも知んねえぜ。慰謝料払えや！」

「何だったら、体で払ってくれてもいいんだぜ？」  
男達の下品な笑い声が路地裏にこだまする。

（やだあ。ちょっとぶつかっただけでどうしてこんなことになるの？）

その女の子はもうすでに泣きそうになっていた。

「さて、体で払ってくれるらしいからその邪魔な服をとらせてもらおうかねえ。」

1人の男の腕が女の子の制服に伸びる。

（やだあ！助けて！）

ビリ！ビリ！！

上半身の制服が破り捨てられ女の子の下着姿が露わになる。

「んー！？んんー！！？」

女の子が叫ぼうにもすでに口を押さえられている。

（誰か！！お願い！！助けて！！！！）

トントン。

その時、1人の男の肩が誰かに叩かれた。

……………。

俺がそこについたとき、すでに危ない状態までいつていたので、  
人の男の肩を叩いた。 1

「あん？誰だ、おめ、ぐふ！？」

肩を叩かれた男が殴り飛ばされた。

「て、てめえ！何しやがる！？」

2人目の男が殴りかかってくるがそれをかわし、腹にボディープローを決めて頭が下がったところで地面に叩きつける。

3人目の男は驚いて腰を抜かしている。

「おい。」

「ひい！？」

とりあえず前と同じようにドスの利いた声で脅しをかけた。

「またこういうことをするんだったらぶっ殺してやんぞ！コラア！」  
「ひ、ひいー！？」

そう言つて男は逃げて行った。

ふう、一件落着。

「あ、あの！」

と、思っていたら襲われていた女の子が話しかけてきた。

とりあえず俺は女の子の方を見ずに制服を脱ぎ差し出した。  
だってそりゃあねえ、上半身下着姿じゃ見たいけど見れないのよ!!

「あ、ありがとうございます……。」

女の子は素直にそれを受け取ってくれた。

「じゃ、俺急ぐから。帰り道、気をつけてな。」

「あ……。」

とりあえず終わったみたいなので、俺はすぐさま春奈の待つ家へと走っていった。

……………。

「行っちゃった……。」

ろくにお礼も出来ずにその人は去って行ってしまった。

「かつこよかったなあ……。」

多分、うつん、絶対!あの人が私の運命の人なんだ!

でも、名前も知らないし、手がかりはこの制服だけ。

あれ?この制服ってうちの制服……。

ってことは同じ学校!?



えつと確か名前とクラスがどっかにあったはず……、あった！

森神…潤…。3年1組…。

潤先輩かあ……。明日さっそく会いにいってみよつと

さっき自分が襲われそうになったのもすっかり忘れている。

ここからこの少女の恋物語が始まったのだった。

（第八話へ続く）

## 第八話

厄介事を片付けて家へと帰った。

「ただい……、」

「潤君！――！」

玄関の扉を開けたら突然春奈が飛びついてきた。

「うお！？お、おい春奈！？」

「ふえ〜ん……ひっく、無事でよかったよ、ひっく、うぐ、潤く〜ん……。」

春奈は俺に抱きついたまま泣きじゃくっている。

「ほら、春奈。俺は大丈夫だから。」

「うん……。」

そう言って春奈は離れていった。

「じゃあご飯にしよう。もう出来てるよ。」

「ああ、悪いな。手伝えなくて……。」

「大丈夫だよ。一緒に食べよう。」

「ああ。」

俺は春奈と一緒に飯を食いにリビングにはいっていった。

……………。

「それで、何があったの？」

食後に俺が煎れた紅茶を飲みながら春奈は尋ねた。

「ああ、女の子がいかにも不良っぽいやつらに襲われてたから助けた。」

「ええ！？大丈夫だったの！？」

春奈が心配そうに聞いてきた。

「ああ、大丈夫。俺もその女の子も怪我はしなかったから。」

春奈を心配させないように極力優しい声を出した。

「そっかぁ……よかった。」

とりあえず春奈は納得してくれたみたいだ。

春奈に余計な心配はさせたくないしな、うんうん。

ふと、春奈が俺を見つめている。

「どうした？」

「潤君って優しいよね。」

「どした？突然。」

「だって、私のときも綾ちゃんるときも見返りを求めないで助けちゃうし。」

俺は意識してそうしてるわけじゃないんだがな。

「でも、助けた後の女の子の気持ちには気づかないよね……。」  
「は？何が？」

男なんだから女の子の気持ちなんてわからん気もするが。

「ハア、もういいよ。」

ふむ、春奈が何を言いたいかよく分かんがまあいいか。

「そつえば、潤君。制服は？」

今気づいたのか……。

「助けた女の子の服が破けてたから渡した。」

その時！春奈の目が光った！

「潤くん！変な事してないでしょうねー！」

な！？春奈の後ろに般若が見える！！

「し、してません！断じてしてません！！」

「本当に？」

春奈はまだ疑っている。

「本当だって！」

一応信じる、と春奈は言った。

春奈にここまでの迫力があるとは……。

これからは怒らせないようにしよ……。

「それで、制服どうするの？」

「あーまあ予備もあるしいいや。名前も聞かなかったし。」

俺は制服の事は諦めることにした。

「それより春奈。先に風呂はいつてこいよ。」

「うん。じゃ先にはいるね。」

そう言って春奈は風呂場に向かっていった。

さて、春奈が上がったら俺も入ってさっさと寝よう。

……………。

「いつてきます。」

「いつてきまーす。」

昨日と同じように2人で家を出る。

「あ、信君。」

「なに！？」

家を出たら表に信が立っていた。

「よう、ご両人。」

信は何事もなかったように挨拶してくる。

「な、なあ信。」

「ふ、あんずるな。他言無用なのだろう?」

「ああ、話が早くて助かるよ。」

信はこういう時は話が早い。

「しかし、いつかはばれると思うぞ。」

「ああ、わかつてる。今日、明日くらいにはお前とあとの2人にも言うつもりだった。」

「そうか。」

信はそれで納得したようだった。

「2人とも早く行かなきゃ遅刻しちゃうよ。」

「ああ、じゃあさっさといくか。」

そして、3人は連れ添って学校へと急いだ。

・・・。

「はよつす。」

「おはよー。」

教室に入り俺と春奈はクラスメイトに挨拶を済ませる。

「おはよ。」

「おはよう。」

綾乃と美姫が寄ってきた。

「お、2人とも、ちょっと話があるんだが。」

「なによ。」

綾乃が不思議がって聞いてきた。

「ああ、実は・・・、」

・・・。

「ふんふん、つまりほかのみんなにばれないように協力してほしい  
ってことね。」

「ああ、そうなんだがそういう解釈は最初にしてほしかったぞ。」

俺がここまでたどり着くのに傷だらけになってしまった。

最初に春奈と一緒に住んでいるという事を言ったら、綾乃は殴りだ  
す、美姫は泣き出すという事態に陥ってしまった。

なんとか2人をなだめて、今の状態になった。

「ごめん、ごめん。」

「ごめんなさい・・・。」

「まあ、もういいけどよ。」

一応、2人とも落ち着いたみたいだな。

「ま、うちのばあちゃんのもくろみでただ一緒に住んでるだけだか

ら、変な勘ぐりはしないように。」

「でも、若い男女が一つ屋根の下に2人きりだし……、春奈、襲われちゃうかもよ。」

「森神君……。」

「ま、待てお前ら！ そんな汚物を見るような目で俺を見るな！俺はそんな事じゃせん！なあ、春奈。」

俺はそこで黙って成り行きを見ていた春奈に話を振った。

「…………。」

「待て待て！何故そこで顔を赤らめる！？」

突然そういう反応をした春奈に突っ込みをいれる。

「やっぱりあんた、そういう事してんじゃないのよー！？」

「も、森神君……。」

ヤバい！またさっきと同じパターンだ！！

ガシッ！

と、肩を掴まれた。

「覚悟はいいわね！」

「待て！それは不可抗力、ふべっ！？」

綾乃の爆裂パンチが俺にヒットした。

「も、もういや……。」



薄れゆく意識の中で最後に見たのは追撃態勢の綾乃と号泣している美姫、顔を赤らめて照れまくっている春奈の姿だった。

……………。

目を開けたらどうやら俺は保健室にいるみたいだ。

「痛っ！？~~~~あいつ思いっきり殴りやがって……。」

少し頬を触っただけでもまだ痛んだ。

「ふう、今何時だ？」

時計を見たら昼休みが始まる五分前だった。

「結局綾乃のせいで午前中を寝て過ごしちゃった。」

さて、どうすっかな……。保険の先生もいねえみたいだし。

キンコーンカーンコーン。

ふむ。学食にでも行くか。

そう思っていたら、

「潤君、いる？」

春奈を先頭に綾乃と美姫も保健室に入ってきた。

「おう、どうしたお前ら？」

「どうしたじゃないよ。大丈夫なの？」

そう言つて春奈が俺の顔をのぞき込んできた。

「ちょっと春ちゃん！近い近い！」

「そうだよ春奈ちゃん！」

突然綾乃と美姫が反応した。

「ふえ？」

と、言つた後自覚したのかボンツと音がしたみたいに顔を赤くしてズザザツと後ずさつた。

「ご、ごごごごめんね！！？」

「あ、ああいや、大丈夫。」

そんなに照れられるとこっちも恥ずかしいんだが。

「あ、ねえ潤……。」

綾乃が話しかけてきた。

「何だ？」

「さっきはちょっとやりすぎた。ごめんね……。」

と、綾乃が謝ってきた。

俺は綾乃が素直に謝った事に面食らっていた。

「ちょっとー、謝ってるんだから何とか言ってよ。」

「あ、ああ。気にしてねえよ。」

「そっかあ。良かったあ。」

うつ！？こいつこんな可愛い顔できるのか……。

俺は綾乃の安心した顔を見て少し見とれてしまった。

「どしたの？」

今度は綾乃が顔をのぞき込んできた。

それを見て俺は自然と顔が赤くなるのを感じた。

「な、何でもねえよ……。」

俺はそっぽを向いて答えた。

「？」

綾乃と他の2人もよく分かってないみたいだ。

「あ、パン買ってきたから森神君も一緒に食べよう。」

「お、サンキュ。美姫。」

「うつん。気にしないで。」

俺は美姫が持ってきてくれたパンを適当に掴んだ。

と、その時、

「潤。いるか？」

信が保健室にやって来た。

「どうした？信。」

「ああ、お前に客人だ。」

「客人？」

誰だろうと思っていたら、

「先輩！！！！」

突然女の子が抱きついてきた。

「なっ！！！！？」

「「「ええ！！！！？」」」

「ほう……。」

と、三者三様のリアクションを見せていた。

「先輩！！大丈夫ですか！！？どこか悪いんですか！！？」

女の子が心配そうな目で一気にまくし立てる。

「あ、ああ。大丈夫だから。とりあえず落ち着いてくれ。」

このままの状態でいると今度こそ死ぬ！！

そのものすごい殺気放っている3人によって!!!

怖い、怖い!!! 怖すぎッスよあんたら!!!

少しして女の子がゆっくりと離れていった。

ちよつと柔らかいと思っていたことは秘密だ。

「あ! 君は昨日の……。」

「はい! 昨日はありがとうございました。」

その少女は昨日俺が助けた女の子だった。

「ここの学園だったのか……。」

「はい! 私もびっくりでした。」

へー、こんな偶然もあるもんだ。

「ねえねえ、潤君。この子が昨日言ってた女の子?」

「ああ、そうだ。」

「潤、あんた春ちゃん以外にも手を出してたわけ!？」

「そんな……、森神君が実は鬼畜だったなんて……。」

「ふむ。こいつはいつか刺されるな。」

「うおい!? その3人変な事言ってんじゃないやねえよ!!!」

誤解されんじゃねえか!!!

俺はこいつらに昨日あったことを話した。

.....。

「ふーん。あんたって無差別に人助けが好きよねえ。」

「私は最初から分かってたよ。森神君はそんなことはしないって。」

「ふっ、右に同じ。」

「嘘をつけ嘘を。」

特に信のは含みが感じられる。

「あ、先輩。これ、お返しします。」

と、女の子が俺の制服を返してくれた。

「ん、ありがとう。」

「それはこっちのセリフですよー。」

「そりゃそうだな。」

アハハと2人して笑う。

「何かあの2人、いい雰囲気……。」

「何か悔しいわ。」

「新たなライバル出現の予感……。」

「ふっ。」

信以外の3人が潤を白い目で見ている。

「あ、そういえば何で俺の場所が分かったんだ？」

「それはですね、制服に書いてあるクラスにいつてその先輩に教えてもらったんです。」

そう言って女の子は信を指差した。

「あ、そういえば私、自己紹介するの忘れてましたね。」

「そっぴやそっぴだな。」

改めて俺達は自己紹介をすることになった。

「私は2組2組の水無瀬雪華です。」  
みなせゆきか

「水無瀬さんね、えーと俺は……、」

「森神潤先輩ですよ。それも書いてありました。それと雪華でいいですよ。」

「ああ、分かった。じゃあ俺も名前でもいいよ。おーい、お前らも自己紹介……って何でそんな隅っこにいんだよ。」

俺が4人の方を見ると全員隅っこに集まっていた。

「「「別にい……。」「」」

「ふっ。」

春奈と綾乃、美姫が見事にハモって不機嫌丸出しだった。

ハア、またやっかいな事が起きそっぴだ……。

と、思っていたが、

「私、久代春奈！よろしくね！」

「あたしは霧丘綾乃。よろしく。」

「私は天神美姫、よろしくね。」

「俺は篠原信一だ。よろしくたのむ。」

「はい！春奈先輩に綾乃先輩に美姫先輩に信先輩ですね！よろしく  
お願いします！」

自己紹介はものすごく平和的に終了した。

ふう、良かった良かった。

「あ、そろそろ昼休みが終わりますね。」  
「ん、そうだな。」

時計を見るともう昼休みが終わりそうになっていた。

「じゃあ、私もう戻りますね。」

「ああ、じゃあな、雪華。」

「バイバイ。雪華ちゃん。」

「じゃあね、雪華。」

「またね、雪華ちゃん。」

「はい！さようなら。」

雪華が保健室を出ようとしたが、

「あ、そうそう。潤先輩。」

「何だ？」

雪華が俺の前に戻ってきた。

「ちょっとかがんで目つぶって下さい。」  
「？」



俺は言われた通りにしてみた。

!!!!?

「「「ああー！ー！！！？」」「」」

突然俺の唇が異様に柔らかい雪華の唇にふさがれた。

「な、なななな！？」

「えへ 昨日のお礼です。それと、私先輩が好きになっちゃいました」

「「「な、なんですってー！ー！！？」」「」」

キスされた俺よりこの3人のリアクションの方がでかつた。

やっぱ一波乱くるな、こりゃ……。

俺はもう死を覚悟したのだった……。

（第九話へ続く）

## 第九話（前書き）

桜登場！これが最後のキャラですね。あとは、いろいろと伏線を作ったり、謎が解けたりしていくつもりッス。なにとぞ、応援よろしくお願いします。

あ、そうそう、今自分が書いているこのシリーズ、『孤独からの救い』を含め、全部で六部作品にしようと思っています。

『春の訪れ』が終わってからの一年間を書いていきます。

頑張るッス。

## 第九話

昼休みの騒動の後、俺はというと、

「……………」

燃え尽きていた……。

あの後雪華は、

「返事はまだいいです。先輩が私の事をもっと知ってもらってからで。」

と言い、戻っていった。

雪華が帰った後、春名、綾乃、美姫の3人は泣くわ、わめくわ、殴るわで体力的にも、精神的にもヤバかった。

結局、その日は授業には出られず、最後のホームルームに出ただけだった。

「何をそんな燃え尽きている。」

1人で放心していると信が寄ってきた。

「しゅん……!!何で助けてくれなかったんだ……!？」

「ふ、俺も命は大事だからな。」

確かにあの3人は誰にも止められなかっただろうな。

「もういい。俺は帰る。」

「そうか。俺はまだやることがあるので帰れんが、頑張っ  
て生きる  
ことだな。」

「余計なお世話だ。」

そう言っ  
て俺は帰っ  
ていっ  
た。

.....。

「ただいま。」

「.....お帰  
りなさい.....。」

春奈がブスツとした顔で出迎えた。

「おいおい、まだ怒っ  
てんのかよ。」

「べっ  
つに〜。」

やっぱり怒っ  
てんじゃねえか.....。

「なあ、いい加減機嫌直せよ。」

「ふんだ。潤君なんて雪華ちゃんといちゃいちゃしてればいいんだ。」

「

ハア、しばらくは直りそうにないな、これは。

「.....じゃあ俺部屋に  
いるからなにかあつたら呼べよ。」

「.....。」

そう言っ  
て俺は自  
分の部  
屋に向  
かつ  
た。

.....。

「…………じゃあ俺部屋にいるからなにかあったら呼べよ。」

そう言つて潤君は部屋に行つてしまった。

…………ちよつと言ひ過ぎちやつたかな。

でも、潤君だつて私の気持ちは知つてるんだからもつと氣を使つてくれてもいいのに……。

……潤君、最後に寂しそうな顔してたな……。

そう思つたら私は心臓が鷲掴みされたような氣分になつてしまった。

うん、やっぱり後で謝ろつ。

よし、そうと決まればご馳走作っちゃおつと

そう思い、私はキッチンに入つていった。

……………。

ぐうぐう。

「あー腹減つたなあ……………」

昼も結局パン一個だったからなあ。

そろそろ春奈の機嫌も直つてるところかな。

そして、俺はゆっくりと春奈に気づかれないうちにリビングに入った。

「うお！？何だこのご馳走は？」

テーブルの上にはうちのどこにこんな材料があったのかと疑いたくなるようなご馳走があった。

「あ、潤君。ご飯できてるよ。」

「春奈。どうしたんだ、これ。」

とりあえず春奈の機嫌は直ってるようだ。

「う、うん……。さっき、ちょっと言い過ぎちゃったから。そのお詫び。」

春奈は申し訳なさそうに顔を伏せる。

「別に俺は気にしてねえよ。んじゃ、さっさと食おうぜ。」

「うん！ありがとう……。」

そして、俺は春奈と一緒に晩飯を食べ始めた。

……………。

「ぐふ、食い過ぎたかも。」

春奈の料理がかなり美味かったので、ついつい食べ過ぎてしまった。

「あは、お粗末様」

春奈はずいぶんと上機嫌になったようだ。

「どうした？ずいぶんご機嫌だな。」

「うん、よく考えたら他のみんなより私の方が一歩リードしてるなあって思っで。」

一歩リードって何のこっちゃ？

と、思っていたら、

「あ、そうだ潤君。」

「何だ？」

「前から聞こうと思っでたんだけど……。」

「何を？」

少し間をおいて春奈が聞いてきた。

「美咲さんって誰？」

「……え？」

俺はその名前を聞いたとき固まっでしまった。

しかし、あれはもう過去の事だが、出来ることなら思い出したくない。

「俺の……幼なじみで……最も大切だっでた人だ……。」

「へえー、どんな人だっでたの？」

「……………」

俺はそれ以上答えられなかった。

「潤君？」

「すまん……………これ以上は答えられん……………」

そうして、俺は黙って自分の部屋に向かった。

ボタン。

美咲……………」

……………」

次の朝、体がものすごくだるかった。

「昨日の事があったからかな……………」

春奈に謝らなくちゃ……………」

そして、俺は着替えてリビングに入ってしまった。

「春奈？」

「あ、潤君……………」

俺に気づいた春奈だったが突然ジワツと目に涙を溜めていった。

「お、おい春奈？」



そうして春奈が俺に抱きついてきた。

「ごめんなさい、ごめんなさい……潤君……お願いだからあ……嫌  
いにならないでえ!」

「春奈……。」

「ごめんなさい……潤君……うぐ……ひつく……潤君に嫌われたら私……  
私……。」

「ばか、嫌いになんてなるかよ。」

俺は春奈の頭を撫でながら言った。

「昨日はごめんな、結局俺が理由つけて逃げてるだけなんだよな。」

「潤君……。」

「自分の過去にけりを付けなきゃな。」

あいつとの約束を守るために……。

「だから、春奈は笑顔でいてくれ、そっちの方が俺は好きだぞ。」

そう言ってるうちに恥ずかしくなってきた。

「潤君。」

「な、何だ?」

そう呼ばれて、春奈の方を見たら、

「!?」

「ん……。」

突然唇を春奈に塞がれた。

もう既に不意打ちのキスは3回目だぞ。

「お前また……、」

だが、春奈は抱きついてきた力をより一層強めてきた。

「春奈？」

「お願い……今だけ……。」

俺はそのまま言うつおりにしていた。

……………。

その後は2人揃って照れ笑いしているうちに時間がきてしまった。

「行つて来ます。」

「行つて来ます！」

外に出ると、信が立っていた。

「よう、ご兩人。」

「ああ。」

「おはよう、信君。」

しかし、信が俺んちの前に立っていたのは珍しかった。

「何かあったのか？」

「ああ、また俺達のクラスに転校生が来るんだが……、」

「またか……にしては齒切れが悪いな。」

信にしては珍しい。

「ああ、実は俺達のクラスということと女子ということだけしか分からんのだ。いつもだったら、もう少し情報が入ってきててもいいんだが……。」

「ほう、本当に珍しいな。お前が分からないなんて。まあ別に大したことではねえだろ。」

「うむ、おそらくは。」

「なら、さっさと行くか。」

「ああ。」

「うん。」

俺達は3人で学園へ向かった。

……………。

「ふうん、また転校生が来るんだ。」

「珍しいね。2人もなんて。」

綾乃と美姫も巻き込んで教室でもまだその話題だった。

「まあどんな人かはすぐわかんだろ。もう来るんじゃないの?」

俺がそう言つと、安達祐介(35)が入ってきた。

「ほらほら、席に着け。」

相変わらず間延びした声で仕切る。

「かなり珍しいことに今日もみんなに新しい仲間を紹介する。」

さすがに珍しいからか教室内が騒がしくなる。

「先生！女の子ですか？」

やはり、同じ質問をする生徒A。

「そうだが、今回もかなりかわいいぞ。」

前回は前回なだけに男子群がかなりの盛り上がりを見せる。

「では、入ってきなさい。」

そう言うと、その子は入ってきた。

「なっ！！？」

「なに！？」

「何で！？」

「えっ！？」

教室の内部生の一部は驚いていた。

そして、中でも一番俺達は驚いた。

「えっ？なに？どうしたの？」

春奈だけがよく分かっていないようだった。

その女の子は黒い髪を肩の辺りまで伸ばし、背もそんなに高くなか

った。

俺は驚愕した。

似ている、いや、似すぎている。

本人と言われても全く違和感がないくらいに。

俺の大切だった人に……。

そう、美咲に……。

「おはようございます。八重桜やえのさくらと言います。よろしくお願いします。

」

（第十話へ続く）

## 第十話

俺はずっと転校生、八重桜の方を見ていた。

見れば見るほど美咲に似ている。

本当に美咲が帰ってきてくれたんじゃないかとも思った。しかし、そんなはずはない。美咲は確かにあの時……。

それに気になる事はもう一つ。

あの桜という名前。まさかとは思うが、んなわけはないよなあ。

その時、春奈達が寄ってきた。

「何で美咲がここにいるのよ!？」

机をバンツと叩いて綾乃が俺に怒鳴る。

「俺だって分からん。ただのそっくりさんかも知れないだろう?」

「でも、あれだけ似てて無関係なのかなあ。」

今度は美姫が首を傾げながら俺に問う。

確かにうりふたつだし、無関係かどうかは分からんが……。

「でも、小さい頃から一緒だったし生き別れの姉妹なんかいないと思うんだが。」

「じゃあ美咲ちゃんのお母さんに聞いてみるのは?」

しかし、その言葉に俺は首を左右に振る。

「いや、美幸さんはあの後引越ししちまったんだ。」

母さんに聞いてもおそらく分からんだろう。

美幸さん、随分ショックを受けてたから、美咲の思い出が残るこの町にはいずらかったんだろう。

「じゃあ、信君！調べられないの！」

「既に手は回してあるが期待はするな。」

半ギレ状態の綾乃に信は冷静に答える。

だが、綾乃は更に声を荒げて聞く。

「どうしてよ!？」

調べることに關しては徹底的に調べるをモットーにしている信がそう言っただけには驚いた。

「転校生などのおいしい情報を載せた裏新聞は読者も食い付く。なので、大抵の事は調べる事になっているのだが、今回は名前と性別しか分からなかった。」

信・・・、お前どこまで調べるつもりだったんだ。

俺は半ば犯罪じみた事をする信を呆れて見ていた。

「そっかぁ・・・。」

ガッツと力が抜けたように綾乃が椅子に座り込んだ。

「やっぱ本人に直接聞くしかないのかねえ。」

「でも、もし関係があつたら八重さんに失礼だよ。」

俺の結論に美姫が言う。

確かにその通りなんだが、でもそれしか方法はない。

俺達が悩んでいるところでふと、春奈がいないことに気付いた。

「あれ？そついえば春奈は？」

俺は辺りを見回し春奈を探した。

あ、いた。まっすぐ八重さんの方へ向かっている。

つてまさか、今の話を！？

そつ思い急いで春奈を追いかける。

「あの、ちょっといいですか？」

「はい？」

春奈が八重さんに話しかける。

くそっ！間に合わないか！？

「はる」

「私、久代春奈！私も転校してきたの！転校生同士仲良くしよ！」

ずじーーーーー！！



俺は勢い余って派手にすっころんでしまった。

「ふえ？どうしたの？潤君。」

当の本人は脳天気している。

こ、このやろっ……。

「八重さん、ちょっとこいつ借りるな。」

「え？あ、はい……！？」

俺はそう聞くな否や春奈の襟首を掴んで連行する。

「へ？なににに！？どうしたの！？」

春奈は俺になすがままに引きずられていった。

しかし、俺は八重さんが一瞬驚いた顔をしたことに気付かなかった。

……。

「んで？何で勝手に行動したんだ？」

俺は春奈の勝手な行動に怒りを通り越して呆れていた。

春奈はやや顔をうつむかせて答える。

「あの……えっと……怒らない？」

「大丈夫だよ。森神君は頭ごなしに怒ったりしないよ。」

恐る恐る言う春奈に美姫がフォローをいれる。

こういう時って美姫は優しいよなあ。  
っと思っていたが、

「でも、理由次第では私も怒るかも」  
「ひ、姬ちゃんの裏切り者〜。」

前言撤回、こいつは結構腹黒かった。

「うう〜、えつとね、転校生同士、仲良くしたいのは本当だよ。でも、みんなあの子の事知りたがってたから・・・。」  
「同じ立場だから仲良くしやすいと思ったのか？」  
「うん・・・。」

春奈は伏し目がちにそう答える。

ぽん。

「あ・・・。」

俺は春奈のその心遣いを嬉しく思い、春奈の頭を撫でる。

「ありがとな、昨日の事もあって聞きづらかったろうに。」  
「ううん、そんなことないよ。」

俺の言葉に春奈は嬉しそうな顔で答える。

やっぱり春奈にもしっておいてもらった方がいいな。  
いや、俺自身、春奈には知っていてもらいたい。

と、その時授業開始のチャイムがなり響く。

「おっと、じゃ続きは後だ。席に戻るか。」

その言葉に各々は頷き、自分の席へと戻って行った。

.....

キンコーンカーンコーン。

本日の授業は全て終了。

結局、八重さんとは話せずじまいで終わってしまった。

次の機会を待つしかないか。

そう思っていると、春奈が寄ってきた。

「潤君、一緒に帰ろう。」

「ああ、そうだな。」

帰ってから春奈にあの話をしなければいけないな。

「あ、その前にちょっと寄り道していいか？」

「うん、いいけど、どこいくの？」

「ああ、ちよつとな.....」

俺がそう言つと春奈は不思議そうな顔をしていた。

.....

「寄り道といつてもうちの隣なだけだな。」

「あの、空き家になつてゐるお家？」

「ああ、そつだよ。」

そして俺達はその家を見据えた。

久しぶりだな、こうしてまじまじと見るのは。

「あれ？空き家の札がでてないね。」

「そつだな・・・、とうとう売れちまつたのか・・・。」

そこにはいつもぶら下がっていた空き家の札がなかった。

「ねえ、ここ、誰のお家だったの？」

「ここは・・・美咲の家だったんだ・・・。」

「え？」

春奈は驚き、目の前の家を見上げる。

俺はこの家で起きた色々な思い出が蘇ってきた。

「さて、帰るか。」

少しの間思い出にふけて俺が言った。

「もういいの？」

「ああ、それにお前に話しておかなきゃいけない事がある。」

俺は春奈に美咲のことをちゃんと話しておこうと思った。

「もしかして、美咲さんの事？」

俺は黙って頷く。

「いいの？」

「ああ、春奈には知ってもらいたい。」

春奈はそつかと一言、そして家を見上げる。  
俺も美咲が住んでいたこの家を見上げた。

・・・。

「さて、どこから話せばいいかな。」

家に帰って俺は椅子の上で春奈と向かい合っていた。

しかし、どこから話せばいいのかわからん。

「春奈は美咲の事はどこまで知っているんだ？」

とりあえず春奈がどれくらい美咲の事を知っているのか聞いてみることにした。

「うーんと、潤君と信君の幼なじみで八重さんとよく似ている事くらいかなあ。」

「じゃあ、ほとんど知らないのか・・・。」  
「なら、最初から話さないとな。」

俺は美咲と初めて会った日のことを思い出していた。

「あれは十一年前くらいの事になるか……。」

俺は十一年前の事を一つ一つ思い出しながら話し始めた。

（第十一話へ続く）

## 第十一話（前書き）

回想ッス。これは、第十三話辺りまで続く予定です。

## 第十一話

・十一年前・

さんもよく家にいた。

この頃はまだ親父も母

俺はいつものように信

と遊ぼうと思っていたが、母さんの

「今日は新しい友達ができるのよ。」

発言でいつ来るか楽しみに待っていた。

「新しく引越して来る人

ってどういう人なんだろうな。」

「ふっ。」

既にこの頃には信のキ

ヤラは出来上がっていた。

そして『あいつ』がや

って来た。

「はじめまして。藤森

美咲りみさきです。これからよろしくお願いします。」

そして俺達はその時か

ら二人から三人になったんだ。



何をするにも三人一緒

で、美咲を泣かす奴は俺と信で謝らせるまで喧嘩をした。

といつても、喧嘩をしたのは俺で信は相手の弱みを調べて精神的に追い込めた。

思えばこの頃から信の情報網は凄まじかった気がする。

そして、俺達は天神学園に入学した。

その頃かな、綾乃や美姫と知り合ったのは。

俺達は五人、いつも一緒にいて、遊んだり、勉強したりしていた。

そして、俺達は中等部二年生になった。

・・・。

- 中等部二年、四月 -

「潤、早くおきなさい!」

「ん。くはあ、寝みい・・・。」

あ、今日から二年生なんだったけな。

といつても、代わり映えはしないけど。

「潤?」

「あー、はいはい、起きたっつーの。」

全く母さんはうるさいんだから。

さて、着替えて、飯食ってさっさと迎えに行くとするか。そして俺は、全ての用意を済ませてあいつを起こしに行った。

ピンポン。

「はい。潤君？」

「あ、はい。おはようございます。」

ガチャ。

玄関から出てきたのはとても子持ちとは思えないほど若々しい女の人だった。

この人はふじもりみゆき藤森美幸さん、美咲の母親だ。

ちなみに、おばさんと言うと怒る。すごく怒る。

「おはよう。あの子まだ寝てるの、いつもみたいにやっちゃってくれる？」

美幸さんはいたずらっぽく笑って言った。

「はい。了解です。」

俺もそれに合わせるように笑った。

俺は玄関から美咲の部屋まで一直線に行った。

「美咲く？起きて・・・ないよな。入るぞ。」

俺は部屋の扉を開けて、まだ寝ている美咲に近づいた。

「すうく、んんく。すう・・・。」

つたく、また幸せそうな寝顔して・・・。

「ほら、美咲。おきろよ、学校行くぞ。」

「むうくく。」

しかし、寝返りをされて拒否された。

「ハア、やっぱりいつものやるのか・・・。」

俺は半ばげんなりしながら美咲の脇腹をつつく。

「はう！くくくもう、脇腹つつくのは止めてよくく。」

「うつさい、起きないお前が悪い。」

「むうくく、潤ちゃん意地悪だよくく。」

美咲が膨れっ顔で睨んできた。

「はいはい、さっさと用意しろよ。」

そう言って俺は部屋を出ていった。

部屋を出るとき

「ち、ちよつと待つてよ〜!？」

という声と急いで用意しているやかましい音が聞こえてきた。

.....。

「それにしても、美咲がもうちょい早く起きてくれれば楽なんだがな。」

俺は美咲に昔から何度も言っているが全く直らない。

「だって、お布団がボクを呼んでるんだもん。」

「いや、わけわからん。」

美咲は毎度毎度わけわからん発言をしては俺を困らせていた。

「それに、潤ちゃんが起こしてくれるって分かってるから安心して眠れるんだもん。」

そう言った美咲は屈託のない笑顔を浮かべた。

「ハア、全く.....。」

いつものごとく俺は呆れていた。

ふう、俺も美咲に甘いところがあるよなあ。

「ほらほら、早くしないと遅刻しちゃうよ。」

「はいはい。」

俺はため息をつきながら学校へと急いだ。

.....

キンコーンカーンコーン。

「ふう、ようやくと昼休みか。」

「潤ちゃん寝すぎ。」

と、美咲に呆れられてしまった。

むう、美咲に呆れらるとは納得いかねえ。

と思い反論しようとしたが、

「全くよねえ。」

「あははは。」

そこに、綾乃と美姫も加わった。

「にゃにおう、れっきとした睡眠学習だ。」

「威張る事じゃないでしょ。」

ふう、とため息をつかれた。

くう、綾乃まで.....

「ねえ、潤ちゃん。信ちゃんは？」

唐突に美咲が聞いてきた。

「まあ、多分、また情報収集だろう。」

いつの間にかいなくなってるからなあ、あいつ。

「信君の情報ってどこから仕入れてくるんだろう。」

「森神君何か知らないの？」

「俺が一番知りたいよ・・・。」

「つか、奴の全てが謎だ。」

「あ、じゃあ、もうお昼にしようか。」

美咲が思い出したように言った。

「賛成。」

「了解。じゃあ俺購買行ってくるわ。」

「うん、行ってらっしゃい。」

そして俺は購買へと急いだ。

・・・。

キンコンカンコン。

終わったあ。

俺は授業が終わった解放感を味わっていた。

「じゅくんちゃん！一緒に帰ろ。」

美咲が俺の席までやって来た。

「おお、そうだな。おい、信・・・ってまたいねえし。」

信の席を見てみるが、またいなかった。

つーか今日1日あいつの姿を見ていない。

「信ちゃん、またどっか行っちゃったよ。」

「しゃーない、二人で帰るか。」

「うん。」

そして俺達は教室から出た。

・・・。

俺達が商店街に差し掛かった所でそれは起きた。

「うん？」

「どうした？」

美咲が突然足を止めた。

「今、犬の鳴き声が聞こえたような気が・・・。」  
「そうか？」

俺は何も聞こえなかったが。

「こつち！」

「あ、おい！待てよ！」

俺は突然走り出した美咲を追いかけた。

そして、しばらくして土手に着いた。

こんなところがあったのか・・・、知らなかった。

「いた！」

そう考えていたら美咲が声を張り上げた。

「どこだ？」

「あそこ！流されてる！」

川の真ん中辺りでダンボールに入った子犬が流されていた。

「助けなきゃ！」

「おい、ちよつと待てよ！この川流れが早い、お前が入ったら流れちゃう！」

俺は川に入ろうとした美咲を慌てて止めた。

「でも・・・でもこのままじゃ・・・。」

「俺が行く。」

どうせこうなるだろうとは思ってたし。

「え！？駄目だよ！流されちゃうよ！」



「あほ。それはお前も同じだ。だったら俺が行く方が戻って来られる確率も高い。」

そう言ったが美咲は心配そうに俺と子犬を交互に見た。

「んじゃ、行ってくる。」

俺は美咲の返事を待たずに歩き出した。

「潤ちゃん！」

突然美咲に呼び止められた。

「絶対、無事に帰ってきてね！」

「ああ。」

さて、さつさと助けなきゃな。

川はさつきから流れが早い。

見たところ石とかもないし、やっぱ泳いでいくしかないか。

俺は覚悟を決めて、川へ飛込んだ。

バシャーン！

豪快に水しぶきをあげながら俺は子犬のところまで泳いだ。

「よしよし、もう大丈夫だ。急いで戻るぞ。」

遠くから美咲が心配そうにしていたのが見えた。

俺は片手で子犬を持ち上げ頭に乘せて、もう片方の手で岸まで泳いだ。

くっ！？さすがに片手で泳ぐのはきつい。

あいつが、美咲が待ってるのに。

くそう！体が流される！

また、泣かせちまう。

ごめんな・・・。

俺は最後に美咲が何か必死に叫んでいるのが見えた。

（第十二話へ続く）

## 第十二話（前書き）

予想よりも回想編が長くなりそうッス・・・。

## 第十二話

あ．．。

うそ．．。

潤ちゃんが流されちゃった．．．。

目の前が涙でにじんでいく。

うそだよ．．。潤ちゃん、絶対無事で戻ってくるって言っただよ？

ねえ、潤ちゃん．．．。

やだ．．．。

そんなのやだあ．．．。

涙がポロポロと流れ落ちていく。

「ボクのせいだ．．．。」

ボクの．．．せいで．．．．。

ドサッ。

腰が抜けて足から崩れ落ちた。

「ボクの．．．せいで．．．、潤ちゃんがしんじやったよお！！」

「！」

「あほ。勝手に殺すな。」

「え？」

俺はなんとか川を泳ぎきり、川から上がった。

ふいふ、今のはさすがに危なかった。

「ふえええん、潤ちゃん。」

美咲が泣きながら抱きついてきた。

「おいおい、無事だったんだから泣くなよ。」

「潤ちゃん・・・ひつく・・・ごめんなさい・・・。」

「ほら、犬も無事だぞ。」

「う・・・ぐすつ・・・うん。あはっ、眠ってる。」

この犬は助け助けてもらって安心したのか、ずっと眠っていた。

「ありがとう・・・潤ちゃん・・・。」

「まあ、気にするな。」

美咲の無茶はいつものことだ。

「後でその犬に名前付けてやれな。」

「うん！でも、名前は潤ちゃんが決めて。」

「俺が？」

「うん！」

名前か……。

「んじゃ、ちよつくら考えるわ。それより早く帰って風呂入りたい。」

このままじゃ風邪ひくしな。

「うん、帰ろう。」

美咲は子犬を抱えて俺と一緒に帰路についた。

……。

「うゝさびい。」

季節は春だが川はかなり冷たかった。

さつさと風呂入る。

俺は服を脱ぎながらあの犬の名前を考えていた。

犬の名前ねえ……。

太郎？

いやいや、さすがに定番すぎるなあ。

それに、あの犬メスだったし。

俺は風呂から上がってから考えていた。

うーん、なかなかいい名前がつけられんなあ。

ふと、テレビのニュースが目に入った。

あつ！これがいいな。シンプルだし。

よし、さっそく明日美咲に言おう。

そう思いながら俺は明日の用意を始めた。

・・・。

ピンポン。

いつものように美咲の家を訪ねたが、

「ごめんね、あの子今日は早く学校行くなって言ってもう出たのよ。」

「あ、そうなんですか。」

美咲が一人で先に行くなんて珍しいな。

「あ、それと潤君。」

「はい？」

美幸さんが突然真剣な顔をして言った。

「昨日はあなたを危険な目にあわせてごめんなさい。美咲から全部聞いたわ。」

「そうなんですか。」

突然犬を連れて帰ったんだから理由を聞かれて当然か。

「あの子昔から随分潤君に迷惑かけて……。」

「そんなことないですよ。」

俺は美幸さんの言葉を遮って言った。

「あれは俺が勝手にやったことです。」

「でも……。」

「それにより、」

もう一度美幸さんの言葉を遮って言った。

「俺自身、美咲の悲しそうな顔を見るのがいやなんです。」

「潤君……。」

美幸さんは驚いていたが次第に嬉しそうな顔をしていった。

「ありがとう、潤君。これからもあの子をよろしくお願いします。」

「はい!」

美幸さんに見送られながら俺は学校へと急いだ。

……。



「えーと、美咲はっど・・・。」

俺は教室に着くなり美咲の姿を探した。

あ、いた。でも、様子がおかしいな。

ずっとうつむいたままで顔をあげようとしな。

とりあえず俺は声をかけることにした。

「よお、美咲。今朝は早く起きられたんだな。」

「・・・・・・。」

俺の声に反応はしたものの、またうつむいてしまった。

「おい、どうしたんだ？みさ。」

キンコンカーンコン。

そこで授業開始のチャイムがなった。

俺は不信に思いながらも自分の席に着いた。

次の休み時間にでももう一度話してみよう。

・・・・・・。

「うつむ。おかしい。」

結局、休み時間に話しかけようとしてもいないか、すぐにどっかに

行っちゃって話せないでいた。

もう昼休みになっちゃうし、なんとかして話さなければ。

そして、俺は授業終了直後、意を決して美咲に話しかけた。

「美咲、ちょっと話がある。屋上に来てくれ。」

「……………」

相変わらずだんまりだったが、今度は大人しくついて来てくれた。

キィ、ボタン。

屋上の少しさびれた扉を開き、俺と美咲はもとからあるベンチに座った。

「なあ、美咲。いい加減話してくれよ。」

「……………」

やはり、うつむいて黙ったままだった。

俺、美咲に何かしたかなあ……………。

そう思ったが全く心当たりがない。

本人に直接聞こうと思い、美咲の方に向き直った。

しかし、

「うぐ…………ひつく……………」

突然美咲が泣き出してしまった。

「お、おい、どうした？」

俺は突然の出来事に慌ててしまった。

「えぐ・・・ごめんなさい・・・ごめんなさい・・・」

「おい、いったいどうしたんだよ。」

とりあえず俺は理由を聞いてみることにした。「ひつく、えぐ・・・昨日ね・・・お母さんに・・・うく・・・話したの・・・」  
「ああ。」

朝に美幸さんと話したからそれは知っている。

「そうしたら・・・お母さんが・・・うく・・・ぐす・・・あなたは・・・潤君に・・・迷惑をかけすぎだつて・・・もし、潤君が死んじゃつたら・・・どうするつもりなのつて・・・」

「・・・」

「そう思ったら・・・急に怖くなっちゃつて・・・ぐすつ・・・うぐ・・・もう潤ちゃんに・・・迷惑かけられないつて思つて・・・」

「だから、俺を避けてたのか？」

「うん・・・。寂しかったけど・・・」

ふう、ばかだねえ。美咲は。

「あのな、迷惑だつて思つたら美咲と一緒にいるわけないだろ。ずっと一緒にいるんだからそのくらい分かれ。」

「ホントに？ボク、潤ちゃんと一緒にいていいの？」

美咲が不安そうな目で俺を見上げてきた。

「ああ。」

「う・ふええ・・・潤ちゃん！」

そう言っ て美咲が俺に抱きついてきた。

「ああ、もう泣くなよ。」

ったく、しょうがねえなあ。

俺は美咲が泣き止むまでずっと頭を撫でていた。

・・・・・。

「そついえば今日、台風がくるみたいだよ？」

教室に戻った後、ようやく泣き止んだ美咲が言った。

「へえ、そうか。じゃあ窓の補強くらいやつとくかな。」

うちの窓は一部、台風に耐えられそうにないところがあった。

「だからね、潤ちゃん。ボクの家泊まっていきなよ。」

「は？」

何を突然言い出すかと思えば・・・。

確かに今日は親父も出張で母さんも友達と旅行で、一人きりだが・・。

「さすがにガキじゃないんだから。」

「でも・・・。」

心配してくれるのはありがたいが必要はないな。

「大丈夫だって。次の授業の準備しとけ。」

「うん・・・。」

・・・・。

「ただいまつと。」

家に帰ったらもう誰もいなくなっていた。

ガタガタ。

美咲が言った通り、台風がきてるみたいだな。窓の補強でもしとくか。

と、その時、

トゥルルルル。

家の電話がなった。

「はい、森神ですが・・・。」

「あ、潤ちゃん？」

電話の主は美咲だった。

「まさか、泊まりにこいと言っんじゃないだろうな。」

「うん、その通り。」

こいつはさっき言ったこともう忘れてんのか？

「なあ、さっきもいったが別にいいって。」

「よくないよ！もし、潤ちゃんのうちが流されちゃったらもう会えなくなっちゃうもん！」

「話を飛躍させ過ぎだ。んな事あるわけないだろ。」

「わかんないもん！じゃあボクが迎えに行くから待ってて！」

「な！？おい！こんな時に外出たらお前じゃ危ないだろうが！」

外はもう既に風が強くなつて雨が降ってきていた。

「分かった！泊まらせてもらっから！」

「ホントに？早く来てね」

プツ。

ツー、ツー、ツー。

切られた受話器を見て思う。

「あの野郎！確信犯だったな！」

自分が何て言えば俺が動くか分かっていやがった。

にやろう、あっち行ったらまずおしおきだな。

そう思いながら準備をし始めた。

・・・。

「うう・・・ぐすつ・・・。」

「・・・。」

所変わって美咲の部屋。

美咲は半泣きで、俺はむすっとしている。

「ひどいよ。ただボクは心配しただけなのに・・・。」

「ならあの電話は何だ！絶対確信犯だろうが！」

俺は美咲の家に着いた早々、スペシャルローリングデラックスマグナム（いわゆるデコピン）をかまし、今に到る。

「むう、そんなことないのに。」

美咲はまだブツブツと文句を言っている。

全くこいつは・・・。

あ、そうだ！

「そつえば、あの犬は？」

「まだいるよ。ちょっと待ってね。」

そう言って美咲は部屋から出ていった。

しばらくすると、美咲が子犬を抱えて戻ってきた。

「はい。」

美咲から子犬を渡してもらい同じように抱いてみる。

最初は体をこわばらせていたが、次第にリラックスしたようで大人しくなった。

「なかなか人なつつこいな、こいつ。」

そう言うと犬がペロペロと手を舐めてきた。

「あれえ？私やお母さんはこんなになつてくれなかったのに。」

美咲は不服そうに俺と子犬を交互に見た。

やはり、命の恩人が誰だか分かっているようだな。

よしよし、と子犬の頭を撫でみると気持良さそうに目を細めている。

「あ、そうそう。こいつの名前、決まったぞ。」

「え！？なにになに？どんな名前？」

美咲はワクワクした目で見てくる。



「テレビ見ててちょうど桜の木の話題だったから桜にしようかと。」

「桜かぁ……。うん！いいと思うよ！」

「よし、決定！お前の名前は今日から桜だ！」

俺の声に反応するかにように桜はワンツと鳴いた。

「じゃあ、潤ちゃん。桜ちゃんの名前も決まったし、ご飯食べに行こう。」

「おお。」

俺は桜を抱いたまま、美咲と晩御飯を食べに行った。

（第十三話へ続く）

### 第十三話

「うぶ。食い過ぎた。」

「あんなにいっぱい食べなくても・・・。」

晩御飯を食べた後、俺はリビングで休んでいた。

「いやいや、残したら悪いし。」

「でも、あんなに急いで食べなくてもいいのに。」

そう言う美咲はちよつと呆れ顔だ。

でも、相変わらず美幸さんの料理はうまいんだよな。

美咲の父さんと離婚して、仕事もこなしているというのに。

しかし、残念ながら美咲にはその才能は遺伝されなかったようで、美咲の料理は殺人的だ。

カレーを甘くするぐらいだしな。

う、思い出したら気持悪くなってきた。

別のことを考えよう。

「それにしても、桜もよく食ったな。」

「アン！」

返事をするかのように桜も一鳴き。こいつも物凄い勢いでドッグフードを平らげていた。

うんうん、たくさん食って大きくなれよ。  
大きくなる種類なのは知らんが。

「あ、ねえ潤ちゃん！ボクの部屋に行ってトランプしよ！ボク、大貧民強くなっただよ。」

「そうかい、じゃ、ちよっくら揉んでやるとするかね。」

俺達は部屋へ戻っ行ったが、途中で美幸さんが親指を立て、  
「グッドラック！」  
と言ったのが見えた。

「？」

そのときの俺はその意味が分かっていなかった。

・・・・。

「ふあゝあ。」

大貧民を数回やった所であくびが出た。

「眠いの？」

美咲の言葉にああ、少しと答える。

うーむ、食ってすぐ寝ると体に良くないっていうんだが。

いかんせんだうにも体が言うことを聞かない。

「それじゃあ、布団敷いちゃうね。」  
「ああ。」

そう言つて美咲はここに布団を敷く。

ん？ここに？

「つて！うおい！？なぜここに敷く！？」

「え？だつてここしか空いてる部屋ないよ？」

キョトンとした顔で美咲が答える。

「いやでも、美幸さんが許さ・・・」

そこで思い出す。

美幸さんが親指を立て  
「グッドラック！」  
と言つたことを。

「は、はめられた・・・。」

ガクツと膝をつく俺の横で美咲は妙に上機嫌だ。

「潤ちゃんと一緒に寝るなんて久しぶり」

こいつにもうちちょっと恥じらいを覚えろと言いたい。

と、その時だった。

そとが一瞬明るく光ってゴロゴロと音がなると同時に電気が消えた。

「きゃあ！」

美咲が叫び声をあげて俺に飛び付いてきた。

「ううゝ、やだあ、暗いよ、怖いよゝ。」

美咲は昔から雷を怖がっていた。

「ほらほら、すぐに元に戻るからもう少し落ち着けて。」

「ううゝ、ぐすつ、ふええ・・・。」

俺は落ち着けるように美咲の頭を撫でてみる。

昔からこうすると、美咲は大人しくなる。

なので、今回も同じように試す。

「・・・・。」

しばらく無言で撫でていると少しずつ固さがとけていった。

そして、聞こえてくるのは穏やかな寝息。

「すうゝ、ん、すう。」

「ふう、寝ちまったか・・・。」

やれやれ、俺がいなかったらどうしてたんだか。

「んじゃ、桜、俺達も寝ようか。」

「アン！」

そう返事をした桜を抱き枕代わりにして俺は眠りについた。

。。。。。

う、うーん。。。

何か異様に暑い。

それに俺の体に何かがまとわりついている。

そして手探りでそれが何か探ってみる。

ふにゆ。

「う、ううん。」

ん？何だこれ。妙に柔らかい。

例えるならそう、マシユマロ。

それに何だか色っぽい声がしたような。

俺は寝惚けながらそれが何かさらに探っていく。

ふにゆ、ふにゆ。

「あん、んん、はあん。。。。。」

それを触る度に色っぽい声が響く。

こんな男の性的欲求を刺激するような抱き枕を買った覚えはないんだか。

不審に思いながらも俺は少しずつ目を開いていく。

「ぬあ!!?」

そこにはパジャマのボタンが全開でモロにブラジャーをさらけだした美咲がいた。

そしてそのブラジャーの上から俺の手が美咲の胸をまさぐっている状態だった。

こいつ意外と胸あんだな……。

って!んな事を考えてる場合じゃない!

こんなところを見られたらまず俺は生きていけない!

どうする俺!どうすんだよ!?

ラ フカード。

つづく!

ってだから違う!あんなCM思い出してどうすんだよ!

よし！とりあえず美咲のパジャマをちゃんと着させてこいつを起こすしよう。

そして俺はパジャマのボタンに手をかけた。

だが、その時階段の方からトントんと登って来る音が聞こえてきた。

ぬああ！何でこんな最悪なタイミングで美幸さんが来るんだよ！

ヤバい！ヤバすぎる！ボタンをかけ直そうにも間に合わない！

どうする！？どうする！？

くそっ！仕方ねえ！

ガチャ。

「美咲く、潤君く、起きてるく？」

「あ、はい。起きてます。」

俺は自然体で美幸さんに挨拶をした。

内心バレやしないかとヒヤヒヤものだったが。

「あれ？潤君。そんなに布団どっぶり被っちゃって暑くないの？」

「ああ、ちよつと寒かったんで。」

今俺の状態は布団を首まで被りその中に美咲を胸に抱えこんだ状態だった。

美咲はこんな状態でも身動き一つしないからまだ寝ているのだろう。



美幸さんはそれで納得したようだったが、美咲がベッドにいないのに気づいた。

「美咲はどしたの？」

「さ、さあ、トイレじゃないですか？」

俺は必死に何とか誤魔化す。

「ふうん、そっか。」

美幸さんは気づいた様子もなくそう言った。

「じゃあ、ご飯そろそろできるから着替えて降りてらっしゃい。」  
「はい。」

ボタンと扉が閉まる。

「はへえ。何とか誤魔化せたあ。」

あとはこの馬鹿者を何とかせにや。

そう思っただけで布団をはぎ、美咲のパジャマのボタンに手をかける。

あれ？でも、これ……。

と、その時、

「う、ううん……。」

またも最悪なタイミングで美咲が目を覚ます。

「あ、潤ちゃんおはよう。」

「ぶっ!!」

ヤベエって!そのアングルはヤベエって!

さっきの一悶着のせいで美咲のブラジャーがずれてあれが見えるか  
見えないかの位置にある。

しかし、美咲は気付かない。それどころか寝惚けながら俺に抱きつ  
いてきた。

「えへえ、潤ちゃん。」

「ば、ばか!目を覚ませ!」

だが、美咲は一向に寝惚けたままだ。

「この馬鹿者!前を隠せつつってんだ!」

「ん?まえ?」

そこでようやく美咲が自分の状態に気付く。

パジャマのボタン全開でブラジャーも結構ずれている。

すぐさま腕で前を隠してどんどん顔が赤くなっていく。

「き・・・」

き?

「きゃあああ!潤ちゃんのエッチ!!」

ドゴオ！

「ぐほお！」

人形が数体飛んできて俺の顔にクリティカルヒット。

「う、誤解だ……。」

薄れゆく意識の中で最後に見たのは桜が人形に何かをやっていた。

……。

「ごめんなさい。」

「……。」

美咲が先ほどからただひたすらに謝り続ける。

実は美咲のパジャマのボタンはどうやら桜が食い千切ってしまったようだった。

俺が気が付いた時に桜が人形の服のボタンを食い千切っているのを目撃し、美咲がようやくそれに気付き今に到る。

「う、ぐすつ、ごめ、んなさい……。」

「ああああ、分かったから泣くなって。」

毎度毎度、先に折れるのは俺の方だったりする。

「ぐすつ、えへえ、良かったあ。」

涙を拭いながら本当に嬉しそうな表情をする。  
ほんと、この表情に弱いよなあ、俺。

しかし、それにしても・・・。

右手をまじまじと見ながら手をにぎにぎする。

夢現だったというのに頭はしっかりと覚えている。  
下着こしでも意外と柔らかかった。

そう物思いにふけていると、

「潤ちゃん、右手どうかしたの？」

美咲が心配そうに俺を覗き込んでくる。

「うえ！？いいいいや！何でもない！」

い、いかん。さっきの光景と感触を思い出して美咲の顔を直視できん。

次第に顔が赤くなっていくのが自分でも分かる。

「あれ？潤ちゃん顔が赤いよ？熱でもあるのかな？」

「いやいやいや！大丈夫！それよりも早く朝飯食いに行こうぜ！」

我ながらやや強引であつたが美咲は少々驚きながらも頷いた。

ふうー、危ない、危ない。バレたらどうなることかと思つたぞ・・・

。

.....

それは朝飯に手をつけたその時に起こった。

「昨日はお楽しみでしたねえ、潤君。」

「ぶっ!!」

ニヤニヤした顔で美幸さんが俺に言う。

パンをかじっている最中だったのでむせてしまった。

「げほっ、ごほっ、い、いきなり何ですか!？」

「だって昨日、食べちゃったんでしょ？美咲を。」

「え？ボク？」

「なわけないでしょう!!」

俺は全力でそれを否定した。

まさか、今朝のことがバレていたというのか!？

「えー、だって今朝一緒に寝てたじゃん。言っとくけどバレバレだったよ。」

な、何という事だ。

必死こいて隠してた俺が馬鹿みたいじゃないか。

「で、美咲。あんた何で潤君の布団の中にいたの？」

「えーっとねえ、夜中に突然目が覚めて、その時雷がゴロゴロっ

てなつて怖くて潤ちゃんの布団に潜り込んだの。」

お前はガキか！？んな事で潜り込んでくんないよ！  
寿命が五年は縮んだぞ！

「ったく、もう少し大人になつてくれ。」  
「むう、ボクもう大人だもん。」

そう言つて美咲は頬を膨らます。

そついうのが子供なんだつつの……。

俺はしばし呆れ顔で美咲を眺めていた。

（第十四話へ続く）

## 第十四話

「朝っぱらから物凄く疲れた……。」

学校へ登校中、俺はもうくたびれていた。

こいつのせいで……。」

「な、なに？潤ちゃん。ボクの方ずつと見つめて。何だか照れちゃうよ……。」

そう言っただけの俺の疲れの元凶は頬を赤く染めて照れている。

呆れているのにどこをどうすればそんな見解にたどり着くのか知りたい。

「ハア、やっぱり美咲はまだまだ子供だってことだ。」

「むう、だからボクは子供じゃない……くしゅんっ！」

美咲が反論しようとしたがくしゃみで中断された。

「おいおい、どうした？風邪か？」

そう言っただけで美咲の額に手を当てる。

少し熱いか……。

学校着いたら保険室に直行だな。

「ううゝ、これも桜ちゃんのせいだゝ。」

まあ、パジャマのボタン全開な状態でいれば風邪くらいひくわな。といつても、気付かない美咲も美咲だが・・・。

俺は美咲の風邪がひどくならないうちに学校へと急いだ。

・・・。

美咲を保険室へ連れていった後、俺は教室で久々に信の姿を見た。

「おお、信！何か久しぶりだな。」

「こちら色々忙しかったのでな。」

そう言つて信は美咲がいないことに気が付いた。

「美咲はどうしたのだ？」

「ああ、何か風邪引いたっぽいから保険室に連れてった。」

その理由は言わない。てゆーか言えない。

「ふむ、いつも美咲はお前にべったりだったからいなければいけないで不自然だな。」

「そこまでべったりだったか？」

まあ、俺がなにをするにも隣にはいつも美咲がいたような気がするが。

「ふむ、近すぎて見えない事もある・・・か。」

突然、信がわけわからん発言をした。



「何が？」

「いい加減、自分の気持ちに気付いたらどうだ？美咲はもう気付いているぞ。」

自分の気持ちって何だよ、それに美咲はもう気づいてるってわけわからん。

「さっきからお前が言おうとしている事が分からん。」  
「……………」

信は明らかにダメだ、こいつ的な顔をしている。

「ゆっくり一人で考えてる事だな。」

「あ、ちょっ」

そう言って、信はまたどこかへ行ってしまった。

「何だったんだ？」

「つかあいつ授業はどうすんだ？」

それにしても自分の気持ちに気づけやら美咲はもう気づいているやら何のことだよ。

俺は急に授業を受ける気をなくして屋上へ向かった。

……………。

「いったい、何のことだったんだろうな・・・。」

俺はずっとさっき信に言われた事を考えていた。

「美咲の事・・・だよな・・・。」

美咲の名前も出ていたからおそらくそうなんだろう。

やはり何のことだかわからない。

いや、分かりたくないだけで本当は分かっているのかも知れない。

美咲が俺をどんな目で見ていいのか、俺が美咲をどう思っているのか。

だが、俺は本当に美咲の事が好きなのかまだよくわからない。

俺はもう一度美咲の事について深く考える。

いつもどこか抜けていて、頼りなくて、見てると危なっかしいから世話のかかる妹のように接してきた。

でもいつの間にか、隣にいるのが当たり前になっていた。

思えば俺の生活は美咲中心になっていた。

ああ、そういえば俺は何をするにも美咲を喜ばせようとしていた気がする。

あいつの笑顔が見たいから、あいつの悲しむ顔を見たくないから。

桜を助けた時も、美咲の悲しむ顔を見たくないから必死に生きようとした。

ああ、そっか。今気付いた。

俺、美咲の事が好きなんだ。

甘えん坊で、泣き虫で、でも誰よりも優しい女の子。

ずっと、ずっと、多分会った時から好きだったのかもしれない。

そう思ったら、急に美咲に会いたくなった。

やっと気づいたこの思い、あいつに伝えてこよう。

俺は美咲がいる保険室へと急いだ。

.....

「え？帰った？」

何でも風邪が少し悪化したらしいので家で療養することになったらしい。

せっかく自分の気持ちに気づいたというのに。

仕方ない。授業が終り次第、速攻でお見舞いにでも行くか。

俺は重い足取りで教室へ戻って行った。

教室へ戻る途中、信が向こうから歩いてきた。

「ようやく自分の気持ちに気づいたのだな。」

「ああ。」

「ふっ、それならいい。」

それだけ話して信はまた歩き出した。

あいつの言葉が無かったら俺は俺自身の気持ちに気付く事はなかっただろう。

ありがとう、信。

.....

キンコンカンコン。

「よし、行くか。」

本日最後の授業が終わり、俺は勢いよく立ち上がる。

やっぱり隣にいつもいるやつがいないと落ち着かない。

そして、俺は教室から走り出す。

心の中は美咲に会いたいという気持ちでいっぱいだった。

全力で走って息を切らしながら美咲の家へついた。

「ハア、ハア、ふう。」

ピンポン。

「はい。」

ガチャ。

家の中から返事が聞こえてきて美幸さんが出てきた。

「あら、潤君。どうしたの？そんなに息を切らして。」

「ちよつと・・・走ってきて・・・美咲は？」

「退屈そうにしてる。お見舞いしてきてあげて。」

「はい。」

俺は家の中に上がらせてもらい美咲の部屋へ急いだ。

コンコン。

「お母さん？」

部屋の中から美咲の声が聞こえてくる。

「俺だよ。」

「え！？潤ちゃん！？」

ドアを開いて美咲の様子を見る。  
さすがにちよつと緊張する。

「結構元氣そうじゃねえか。」

「うん、大事をとって早退しただけだから。」

さて、これから俺の気持ちを伝えようと思つのだが、

「……………」

「？」

なかなか言い出しづらい！思つたことを口に出来ん！

「どうしたの？」

「うえ！？い、いや何でもない。」

まだ何も言つてないのに何でもないとはおかしいんだが…………。

「あの……な、美咲……………」

「うん。」

いざ、決心して話し始める。

「これから大事な話があるから聞いてくれるか？」

「え、なにになに？」

美咲が妙にワクワクした顔で聞いてくる。

もう少し俺の心中察して欲しい・・・。

「さっきな、信に言われたんだ。いい加減自分の気持ちに気づけて。」

「え?」

そこで美咲が少し驚いたような顔をした。

「?どうした?」

「う、うつん!何でもない!」

今度は美咲の様子がおかしいがとりあえず俺は続ける。

「でさ、気付いたんだよ。俺、美咲の事が好きなんだって。」  
「・・・。」

多分真っ赤になってるな、俺。  
見ると美咲は驚いたのか固まっている。

「み、美咲?」

「え、え?えええええ!!?」

ハッと我に帰ったようで驚いた声をあげる。

どんどん美咲の顔が真っ赤に染まっていく。

「え、あ、うあ、ほ、ホントに?」

「・・・ああ。」

恥ずかしくてそっぽをむく俺。情けない話だ。

だが、

「ひつく、うつく……。」「

「み、美咲?」

突然美咲が泣き出してしまった。

「やっと・・・やっと、ひつく、思いが通じた……。」「

「え?」

美咲が涙ながらに話し出す。

「ずっと・・・ずっと、ひつく、出会った時から、うつく、ぐす、好きだった……。」「

そんな昔から俺の事が好きだったなんて俺は少なからず驚いた。

「ぐす、ひく、潤ちゃん!」

「美咲……。」「

胸に飛び込んできた美咲をしっかりと抱きしめる。

「ごめんな、ずっと待たせてたみたいで……。」「

「うつん、ボクが勝手に待ってたただけだもん。」「

そう言つて、美咲が下から俺を見上げる。

「これからは恋人としてよろしくな。」「



「うん！」

俺はこの時の美咲の幸せそうな顔を一生忘れないだろう。

「美咲。」

俺は美咲の頬に手をそえる。

美咲も上を向いたままそつと目を閉じる。

そして、俺達の唇が重なる。

この時、この瞬間だけ俺達は幸せの絶頂にいた。

この場面が美幸さんにばっちり写真に撮られて後で死ぬほど冷やかされたのは言うまでもない……。

（第十五話へ続く）

## 第十五話（前書き）

なんかもうかなり更新遅れてすみません。本当すみません。これからはもちよつと早く更新したいと思います。

## 第十五話

あの日、美咲に告白した日から一年。

俺達は中等部三年生になった。

俺達二人は色々なところで思い出を積み重ねていった。

だが、俺が美咲に告白してから何か変わったかと言うと、

「美咲！いい加減起しろ！遅刻するぞ！」

「うにうゝ、あと五年……。」

「んなに待てるかぁ！！！」

特に変わってなかったりする。

結局、恋人同士になっても俺や美咲の行動パターンは何一つ変わらない。

だが俺は、この平凡な日常がすごく幸せだと思っている。  
ずっと続いてゆけると信じていた、しかし運命の時は刻一刻と迫って来ていた……。

チリンチリン。

「いらっしやいます。」

夏休みまで残りわずか一週間のこの日。

俺と美咲は夏休みの計画を練るために学校近くの喫茶店、『ラプソディ』に寄り道していた。

「潤ちゃん！ボクね、旅行に行きたい！」

「ふむ、旅行かぁ、いいな。」

旅行なんてめんどいという理由で今まではあまり行かなかったが、美咲と一緒にならどこでも楽しいだろう。

こんな事、ほんの一年前には夢にも思わなかったろうな。

俺は何処からか持ってきたパンフレットを開いてどこがいいかなと楽しそうにしている美咲を見て苦笑した。

「あ、そしたら信や綾乃達も誘った方が楽しそうだな。」

「う、うん・・・それもいいんだけど・・・。」

何故か美咲が赤くなってモジモジしている。

「その・・・ボクとしては・・・潤ちゃんと二人っきりの方がいいな、なんて・・・。」

美咲が顔を赤らめて上目使いで言う。

ぐは！！その攻撃は破壊力抜群だぞ、美咲。

「あ、ああ、そうだな・・・。」

努めて平静を装い、内心めちゃくちゃ動揺しながら返事を返す。

「あ、それとまた去年みたいに幸さんに会いたいな。」  
「またあ？」

俺は露骨に嫌そうな顔をする。

去年の夏休み、墓参りにばあちゃん家に行くと美咲に言ったら、  
「ボクも行きたい！」  
と言い出し聞かなかったのしぶしぶ連れていった。

そこで、美咲とばあちゃんは初めて対面したわけだが、どういっわけか少ししたら凄く仲良くなってしまった。

そして、二人してひそひそと俺の事を話し始める事態にまでなってしまった。

正直、あんまり行く気がしない……。

「ま、まあそのうちにな……。」  
「うん！」

本当に楽しそうに美咲はこれからのことに思いをはせている。

これからずっと、幸せに生きていけたらいいな……。

と、俺が幸せを噛み締めている時にパトカーのサイレンの音が聞こえてきた。

「なんだ、いつたい？」

「結構近いね。」

外を見てみるとパトカーが何台か通りすぎていった。

「おい、知ってるか？」

隣のテーブルに座っている男二人組の片方の話し声が聞こえてくる。

「さっきその銀行で強盗があつて犯人は逃走中らしいぜ。」

「うわ、まじかよ。」

ふーん、犯人はまだ捕まっていけないのか。

「怖いね・・・。」

「ああ、物騒な世の中だ。」

俺はしみじみと言うが美咲は不安そうにしている。

そんな美咲の頭に手をのせる。

「心配すんな。いざとなったら守ってやつから。」

「あ・・・うん！」

我ながらなんともくさいセリフだったが美咲はそれで大分安心したようだった。

「さて、じゃあそろそろ帰るか。」

「うん。あ、そうそう、この後桜ちゃんのお散歩するから一緒に行

こ。」

「まあ、別に構わんが・・・。」

どうせ帰っても寝るだけだし。

そして俺達は帰り道も他愛のない話をしながら店を後にした。

・・・。

「きゃあ~~~~!! た~~~~す~~~~け~~~~て~~~~!!」

「おいおい、飼い主のくせにだらしねえぞ!」

今、俺達は桜の散歩コースである河原まで来ている。

そこで、少し休憩のつもりが突然桜が走り出してリードを持っていた美咲が引きずられる形になっていた。

「きゃあ~~~~!!? 止まって~~~~!!」

桜を飼い始めて一年ほど経つが、そこそこでづかくなった桜はおかまいなしに走り続ける。

「ハア、ハア、ふう、ハア。」

ようやく疲れたのか桜が走るのを止めて、美咲が息を整えている。

「ハア、ハア、っんもう!! ひどいよ! 潤ちゃん! 助けてくれたっ  
ていいのに!」

「いや、面白かったのでつい・・・。」

美咲は頬を膨らませて睨みをきかせてくる。

「つか、飼い主のくせに振り回される方に問題あるだろ……。」

そう思ったら、今度は桜が俺に飛び付いてきた。

「うお！？どうした桜？なかなかでつかくなっただから、急に飛び付いてきたら危ねえよ。」

そう桜に言ってみるが効果はなく、今度は顔を舐めてきた。

「おいおい、何で飼い主になつかないで俺になついてんだよ。」

何故か桜は美咲にはなつかず、俺にばかりなつくようになった。

やっぱり命の恩人は誰なのかちゃんと分かってんだな。

てゆうか美咲よ、そんな羨ましそうな視線を桜に送るな。犬に嫉妬してどうする、お前は。

「さて、そろそろ帰るか。」

「……そうだね。」

微妙に美咲がすねている気がするがノータッチで。

……。

しばらく歩いていると、またパトカーのサイレンの音が聞こえてきた。



「まだ捕まってねえのかな？」

「そうみたいだね。」

交差点で信号待ちをしながら美咲に言う。

犯人もなかなかしぶといんだな。

「潤ちゃん行くよー！」

美咲はもう既に交差点の半分まで渡っていた。

「ああ、いま行っ美咲、危ない！！！！」  
「え？」

気が付いた時には、

美咲は地面に叩き付けられていた。

（第十六話へ続く）

## 第十五話（後書き）

回想編は次回でラストの予定ッス。意外と長くなってしまったですね。

## 第十六話

俺はあいつを助けることが出来なかった・・・。

守ってみせると約束したのに・・・。

自分が自分を許せない。後悔ばかりが押し寄せる。

今、美咲は手術室で頑張っている。

ただ待つしか出来ないことが歯がゆい。

美咲をはねたのは銀行強盗をしたグループで美咲をはねた後、しばらくして捕まった。

隣には美幸さんや、信、綾乃、美姫も駆け付けてそわそわと心配そうに手術室の扉を見ている。

病院に駆け付けた美幸さんに俺は会わず顔が無く、ただ謝ることしか出来なかった。

そんな俺を美幸さんは優しく抱きしめてくれた。

「そんなに自分を責めないで。潤君はなにも悪くないんだから。」  
どこまでも美幸さんは強かった。今にも不安に押し潰されそうなのに。

俺はそんな美幸さんを見てますます自分が許せなくなった。

何故助けることが出来なかった？

何故あいつがあんな目にあわなければいけない？

悪いのはいったい誰だ？

美咲をひいた強盗共か？強盗共をすぐ捕まえられなかった警察か？  
それとも美咲を助けることが出来なかった俺自身か？

悪いのはいったい誰なんだ？

今はこんな事考えてる場合じゃない、美咲は今も頑張っている。

頭では分かっているが、やはり守れなかった事が許せない。

俺は祈ることしか出来ないのか？

そう思っただけからすぐに手術室の扉が開いた。

「先生！美咲は・・・美咲は大丈夫なんですか！？」

俺は一目散に医師に駆け寄る。

しかし医師は首を振り、

「今は落ち着いていますが、もって後数時間の命でしょう・・・。」  
「そんな・・・、美咲！」

俺は直ぐ様美咲のもとに駆け込んだ。

後の四人も急いで部屋に駆け込んで来た。

白いベッドの上には弱々しく美咲が横たわっている。

その時、美咲が気付いたのかうつすらと目を開けた。

「潤・・・ちゃん、みんな・・・。」

スーハー、と酸素マスクを付けたままで途切れ途切れに話してくる。

俺は美咲の手をギュツと強く掴んだ。

「美咲い・・・ごめん・・・ごめんな・・・。」

「潤ちゃんの・・・せいじゃ・・・ない、よ。」

美咲は途絶えながらも言葉をつむいでくる。

「美咲！しっかりしなさいよ！」

「そうだよ！またみんなで遊びに行こうよ！」

綾乃と美姫が涙声で美咲を励ますが、美咲は嬉しそうに笑うだけだった。

「ありがとう・・・二人に会えて・・・ボク・・・嬉しかった・・・」

楽しかったよ……。」

「やだあ！そんな言葉、聞きたくない！」

「そうよ！まだ楽しいことはいっぱいあるんだから！」

「ありがとう……。」

そう言つて、美咲は力なく手を二人に伸ばす。

そして、その手を二人で強く握る。

まるでどこにも行かせないように、強く、強く握る。

「綾ちゃん……部活……頑張つて……ボク……ずっと見守つてるから……。」

「美咲い……。」

「姫ちゃん……言いたい事は……ちゃんと言わなきゃダメだよ？自分に自身をもつて……ね？」

「うん……うん……。」

とうとう、堪えきれず二人の目から涙がとめどなく溢れだした。

見ると、美幸さんも涙がどんどん頬を伝つていき、口元を手で押さえている。

信も顔は見えないが肩が小刻みに震えている。

「信ちゃん……。」

「なんだ？」

今度は美咲が背中を向けている信に言葉をかける。

背中を向けたまま信は答えるがその言葉は少し震えているようだった。

た。

「あんまり・・・潤ちゃんをいじめたらダメだよ・・・？」

「ふっ、善処しよう。」

内容は相変わらずだがその言葉はどこか悲しかった。

「お母さん・・・。」

「なに？・・・美咲。」

涙をふきながら涙声で美幸さんは答える。

「ごめんね・・・親不孝な娘で・・・いっぱい・・・心配・・・かけちゃったね・・・。」

「そうよ、全く。自覚はあったのね。」

そう言っていたずらっぽく笑う美幸さんの目から涙が溢れていく。

「わ・・・ひどいなあ・・・。」

「でもね、」

そのまま美幸さんは泣き笑いながら続ける。

「あんたは私にとって最高の娘だったよ。」

そう言うのと堪えきれなくなったのか、涙が流れる。

「うん・・・ありがとう・・・お母さん・・・。」

美咲が今度は俺の方に顔を向ける。

「潤ちゃん・・・そんなに泣かないでよ・・・。」  
「美咲・・・美咲い・・・。」

さつきから涙が止まらない。止めようとしても後から後から溢れ出る。

「潤ちゃん・・・自分を責めちゃ・・・ダメだよ・・・？」  
「でも・・・でも俺が・・・ちゃんとしていれば、こんな事には・・・。」

そう言うとき美咲は弱々しく首を振って手を差し出す。

俺はその手をギュッと力強く握る。

「潤ちゃん・・・ボク・・・幸せだったよ・・・。短い間だったけど・・・潤ちゃんと一緒にいられて・・・ボク・・・幸せだった・・・。」

「そんなこと言うなよ！これから、もっとうつと側にいてくれよ！」

「潤ちゃん・・・約束して・・・これから先・・・潤ちゃんの前に素敵な人が現れたら・・・その人を幸せにするって・・・。」

「ふざけんなよ・・・俺はお前しかいないんだよ・・・。」

俺は顔を伏せて声を震わせながら言う。

「ダメだよ・・・そうじゃないと・・・ボク・・・安心出来ないよ・・・。」

「でも・・・俺は・・・。」

その時、美咲が強く握っている俺の手を握り返してきた。



「大丈夫だよ・・・ね？だから・・・約束して・・・？」  
「・・・・・・・・。」

俺はもう美咲の言葉に頷く事しか出来なかった。

美咲を安心させるにはこれしかなかった。

「ありがとう・・・・・・・・。潤ちゃん・・・大好き。」

美咲の手が俺の手から滑り落ちていく。

「美咲？」

俺は少しの間、それが理解出来なかった。

周りのみんなは涙を流し続けている。

「おい・・・美咲・・・そんな・・・目を覚ませよ・・・・・・・・。」

俺は必死に美咲に呼びかけるが美咲は目を覚まさない。

「おい・・・目え覚ませつてば・・・もっとずっと一緒にいてくれよ・・・なあ美咲・・・・・・・・。」

もう美咲は目を覚まさない。永遠に・・・・・・・・。

「美咲・・・美咲い・・・・・・・・美咲いーーーー！！！！！」

俺は美咲の体を抱き締めながら泣き叫ぶ。

新春の日には少し肌寒い陽気だった。

（第十七話へ続く）

## 第十七話（前書き）

えーまずは言い訳です。ここ最近は何となく忙しくて更新が全く出来なかったのです。すいません、まじ、すいません。これからもうちっと頑張りたいツスね。

## 第十七話

その日、葬儀は速やかに行われた。

仏壇の中央には笑顔の美咲の写真がある。

木魚がポンポンとなるなか、俺は心の中がポツカリと穴があいた気分だった。

隣では信がまっすぐ前を向いたまま瞬きすらせずじっとしていた。信は信なりに美咲に別れを告げているのだろう。

綾乃と美姫は共に声を押し殺して泣きじゃくっている。

美幸さんと俺の母も葬儀に参列して思い思いに美咲に別れを告げる。

やがて、美咲の体は火葬場に連れていかれ美咲が空へと旅立った。

その後はあまり覚えていない。

俺は美咲が忘れられず、美咲と一緒に過ごした思い出の場所にもう一度訪れていた。

町中、学校、帰り道の喫茶店、その他にも色々な所に行ったが当たり前のごとく美咲の影はどこにもない。

そして最後に訪れたのはばあちゃん家だった。

「おや？潤どうしたんだい？」  
「……………」

ここに来ることは誰にも教えていない。美咲を追い求めていたら最後にここにたどり着いた。

「ま、とにかく入りな。」  
「……………」

俺は頷き、ばあちゃんと共に中に入る。

居間に入った途端、美咲との思い出が鮮やかに蘇る。

『あ、潤ちゃんのおばあちゃんですか？初めまして、藤森美咲と言います。』

『相変わらず、潤ちゃんの料理っておいしいよね』

『アハハ 潤ちゃん、幸さんには歯が立たないんだねえ。』

「いつまでぼくっと突っ立ってんだい？」

その声で思い出に耽っていた俺は現実に戻される。

振り向くと怖い顔したばあちゃんが俺を睨んでいた。

「いつまで美咲ちゃんの事を引きずっているつもりだい？」

凜とした声で真っ直ぐ俺に問う。

うるさい……。

「いつまでもグジグジして、情けないねえ。あの子も災難だねえ、こんな男が彼氏なんて。」

「なに……？」

「おや？どうしたんだい？これ以上一緒にいてもどうせあんたはあの子を不幸にしたんじゃないのかい？」

俺はその言葉でカツとなってしまった。

「んだと！？そんなことあるわけねえだろ！あんたなんか俺の気持ちが分かってたまるか！」

「ああ、分かんないねえ、分かりたくもない！悲しんでたらあの子が帰ってくるのか！？あの子の影を探せばまた会えるとも思ってるのか！？違うだろ！最後にあの子が望んでいたことは何だい？よく思い出してみな。」

そう言つてばあちゃんは部屋を出ていった。

「いつまでばーっと突っ立ってんだい？」

その声で思い出に耽っていた俺は現実に戻れる。

振り向くと怖い顔したばあちゃんが俺を睨んでいた。

「いつまで美咲ちゃんの事を引きずっているつもりだい？」

凜とした声で真っ直ぐ俺に問う。

うるさい……。

「いつまでもグジグジして、情けないねえ。あの子も災難だねえ、こんな男が彼氏なんて。」

「なに……？」

「おや？どうしたんだい？これ以上一緒にいてもどうせあんたはあの子を不幸にしたんじゃないのかい？」

俺はその言葉でカツとなつてしまった。

「んだと！？そんなことあるわけねえだろ！あんたなんか俺の気持ちに分かつてたまるか！」

「ああ、分かんないねえ、分かりたくもない！悲しんでたらあの子が帰ってくるのか！？あの子の影を探せばまた会えるとも思ってるのか！？違うだろ！最後にあの子が望んでいたことは何だい？よく思い出してみな。」

そう言つてばあちゃんは部屋を出ていった。

「ちつ、言いたいことだけ言いやがって……。」

そんなこと、俺だつて分かつてる……でも、でも……。

俺は窓の外の空を見上げる。

「お前がいないと寂しいよ……美咲……。」

……。

俺は最後に美咲と訪れた思い出の場所、後に春奈と出会う公園に来ていた。

いつ来ても全く変わっていない。ただ、そこにぽつんとある滑り台やブランコ。

辺りはもう薄暗くなって夜が訪れようとしていた。

「・・・・・・・・。」

近くにあったベンチにそつと腰掛ける。

ばあちゃんが言っていた事はもつともだ。ちゃんと分かってる。

だが・・・俺は・・・それでも・・・・・・・・。

・・・・・・・・。

うつすらと目を開けると辺りは真つ暗だった。

「ああ・・・そういえば公園にいたんだっけ。いつの間にか寝ちまつたのか。」

あくびをしながら辺りを見回すがもう夜なので人っこ一人いない。

あいつを追い求めて最後にこの場所まで来たけど無駄だったな。



「ハハツ・・・。」

乾いた笑い声が公園の中に響く。

その時、

「潤ちゃん。」

「あ？」

顔を上げて周囲を見るが誰もいない。

あーとうとう幻聴まで聞くようになったか。

「潤ちゃん。」

今度ははっきり聞こえた。

いったい誰だよと思いながら立ち上がる。

と、突然目の前が眩しいくらいに光った。

光がやみ、少しずつ目を開けるとそこにいたのは、

「み・・・さき・・・？」

俺の目の前に死んだはずの美咲が立っていた。

（第十八話へ続く）

## 第十八話

目の前の不可解な現象に俺は放心状態になっていた。

「元氣・・ってわけじゃなさそうだね。」

「そ、それはお前のせいだろ。勝手に約束させて、勝手に逝っちゃうから。」

そう言つて目元を腕で擦る。

情けねえ、こんな姿美咲に見せちまうなんて。

「ねえ、潤ちゃん。ボクはもう死んじやったんだよ。」

その言葉でグサリと心が突き刺されたような感じがした。

自分自身分かつてはいるがどうしても認めたくない。

「ボクがまた潤ちゃんに会いに来たのはね、約束が中途半端だったからもう一度しようと思つて。」

「あんな身勝手な約束、守れるかよ。」

そう言つと、少し美咲は悲しそうに笑う。

「うん、確かに身勝手。だけどね、これだけは覚えておいて。」

「何だよ?」

「ボクがこんな約束するのは潤ちゃんに幸せになって欲しいから。」

本当にそう思っているのだろう、この時の美咲の笑顔はとても輝いていた。

その笑顔を直視できず、俺は顔を伏せてしまった。

「俺だって・・・お前を幸せにしたかった・・・。」

そう声を絞り出すのに精一杯だった。

「ボクは幸せだったよ、ずっと潤ちゃんの側にいられて。」

「そうか・・・。」

そう言つて美咲は小指を俺に差し出す。

「指切りつて事が、ハハッ、まだまだ子供だな。」

泣き笑いのまま精一杯の憎まれ口を叩く。

だが、その小指にそつと自分の小指をからめる。

「約束、してやるよ。ただ、すぐつて分けにはいかないけどな。」

「うん、今はそれで十分だよ。」

満足そうに美咲は頷いた。

俺は涙が溢れているが今は気にしない。

一秒でも長く、こいつの顔を見ていたい。

やがて、指切りが済み、ゆっくり指がほどかれていく。

そうするとだんだんと美咲の姿が薄れてゆく。

「じゃあ、これでさよならだね、潤ちゃん。」

「いや、違つぞ。こついう時はこつ言つんだ。」

そう言つと美咲は不思議そうに首を傾げる。

「またな、美咲。」

「っ!?!?! うん! またね!! 潤ちゃん!」

そうして美咲は消えていった。

.....。

「.....はっ。」

気づいた時には美咲の姿はなかった。

「さっきのは夢、だつたのか?」

いや、違つ、指切りをした感触がまだはつきりと残っている。

「わざわざご苦労なこつたな。」

さっきまでの喪失感はどうなくなっている。

あいつと約束をかわしたお陰だろう。

「みんなに心配かけちまつたな、帰るとするか。」

そして、俺は歩き出す。

美咲との約束をしっかりと胸に刻み付けて。

（ 第十九話へ続く ）

## 第十九話（前書き）

以前、この小説は第六章くらいになると言いましたがやつぱ普通に  
終らせたいとおもいます。あしからず。

## 第十九話

「とまあ、美咲に関してはこんなところかな、春奈？」

話し終わると春奈は顔を伏せてひっそりと泣いていた。

「うおっ！？何泣いてんだよ！」

「ひぐっ、えぐ、だって、悲しくて、ひっく……。」「

会ったこともないのにここまで悲しんでくれて俺は嬉しく思った。

「まあ、こんな事があったからすぐに返事できねえんだ。」

しばらく春奈はぐずついていたがやがて顔を上げた。

「……。うん、大丈夫、答えが出るまでずっとまってるよ。」

「ああ、ありがとう。」

。。。。。

「でも、結局八重さんは何者なんだろうねえ。」

夕飯を食い終り、食後にまったりしている中、春奈が言った。

「分かん。」

はっきり言って、昔の傷がえぐられるようであまり会いたくはないんだが。。。



だがこのままにしてはおけねえし、無関係なら無関係で構わないんだが。

「やっぱり、明日、聞いてみるしかないな。」

「うん、そうだね。あ、そういえば。」

「うん？」

春奈がはっと何か思い出したようだ。

「美咲さんのお母さんと飼ってた犬の桜ちゃんはどうしたの？」

まあ、美幸さん達についてはあまり触れなかったから疑問に思うのも当然か。

「美幸さんと桜は引越しちまったんだよ。この町は美咲の思い出が多いから辛かったんだろう……。」

そう話したら春奈は悲しそうに目を伏せた。

今頃どうしてんのかなあ。元気にしてればいいけど。

ふと時計を見たら既に十一時を回った所だった。

「さて、明日に備えて寝るとするか。」

「あ、うん、そうだね。」

俺が立ち上がると春奈も慌てて寝る準備に入った。

明日は忙しくなりそうだ。また、疲れそうな予感がする……。

そして俺はその予感が見事に的中することになるうとは、この時はまだ知る由もなかった。

……。

「おはよーす。」

「あ、潤君おはよー。」

いつものごとくしつかり起きて、朝飯創作中の春奈に挨拶をする。

そして今日もまた見事に朝飯らしい朝飯が出てきた。

「ふむ、日本人は朝はやっぱり白飯だよなあ。」

「じ、潤君……その発言はちょっとおじんくさい……。」

グサリ。

「お、おじっ!？」

あー今のはスゲーへこむわー。地面にの字書くぐらいにへこむわー!。

この日は妙にショックがでかい朝だった。

……。

「それでいつ八重さんと話しするの？」

朝の登校中、春奈が聞いてきた。

「ああ、とりあえず早めがいいから学校いったら聞いてみる。」

自分でも聞いてどうするのか全然考えていない。

「・・・ねえ、潤君は八重さんが美咲さんと何か関係があつて欲しいの？」

関係、か・・・。多分、俺は・・・。

「関係は・・・あつて欲しくないかな。」

無関係であつて欲しい。そうすればあいつに似ていようが似ていまいが友達になれそうだからな。

「そつか・・・。」

春奈はそれで納得したらしく少し先に進んで俺に振り返った。

「頑張つて、潤君。」

「おう。」

今のでちよつと緊張がほぐれたな。ありがとう、春奈・・・。

・・・。

さて、教室に着いた分けだが八重さんはと・・・あ、いた。

ちょうどいいことに八重さんは一人で席に座って本を読んでいた。

俺は静かに八重さんのところへと歩いていった。

後ろでは春奈と綾乃と美姫（この二人は既に事情を知っている。）が見守っている。

再び八重さんを見してみる。やはり・・・似ている。

違う、この人は美咲じゃない、そう強く自分に言い聞かせる。

よし、いざ！

「本が・・・好きなのか？」

「え？」

八重さんが驚いたように顔をこちらに向ける。

違う、違う、と自分に言い聞かせながら続ける。

「本、ずっと読んでみたいだから。」

「あ、はい・・・、そ、なんです。」

まだ慣れないのか言葉が途切れ途切れになっている。

男子と話すのは慣れていないのか顔を真っ赤にしている。

（う、初々しすぎて、ちょっと面白いかも。）

そんな事を思ったら後ろから殺気を感じたので本題に入る。

「あのさ、八重さんに聞きたいことがあるんだけど。」

「は、はい！な、なんでしよう・・・。」

それにしてもきょどりすぎな気がするが、まあいいか。

「彼氏いるの？」

「ふえ！？」

パソコン！パソコン！パソコン！！

突然後ろから黒板消し×3がとんできた。

「じ、ジョーク、ジョークですから！」

ほつといたら今度は物凄いのがとんできそうなので慌てて後ろに弁明する。

「さ、さて、本題なんだけど・・・？」

八重さんの方を見てみると何故か俺の後ろを睨みつけている。

「や、八重さん？」

「は、はい！な、なんでしょうか！？」

呼びかけると物凄いオーバーリアクションが返ってきた。

うーむ、面白い。

キンコーンカーンコーン。

そうしているうちに授業開始のチャイムがなってしまった。

「あ、悪い、また後で話すわ。」

「え、あ、はい……。」

ちよつとしょんぼりした顔をされてしまった。何故に？

その後、あの三人衆にのされたのは言うまでもない。

……。

八重さんが一人でいるのを見計らっているうちに昼休みになってしまった。

（まあ、いいか。）

「じゃあ、八重さん、さっきの話しの続きなんだが。」

「あ、はい……。」

八重さんは顔を赤らめながらも答える。

だが何故か体が震えているようだった。

それは何かを我慢しているように見えた。

「どしたの？何か震えてるようだが。」

「あ、いえ！何でも……ないです……。」

？何かよくわからんな。

「話しつつうのは、八重さんってもしかして・・・？」  
「・・・・・・・・。」

プルプルプルプル。

何かもう色々ヤバすぎる気がするんだが。

「な、なあ本当にどうしたんだ？」

「・・・・・・・・ない。」

「ん？なに？」

小さすぎてよく聞こえなかった。

トイレか？そう思った瞬間、

「も、もう我慢出来ない！！！」

ガバッ！

突然抱きつかれた。

（ 第二十一話へ続く ）

## 第二十話

えーっとまず今の状態を確認してみよう。

八重さんに例の話をしてみようと思ったら突然抱きつかれた。

最近多いよなあ、こんな事・・・。

うん、脳内は正常。

そろそろ突然の出来事によるフリーズが溶ける頃だろう。

「「「あーーーーー!!!」」」

「ふっ、またか。」

もうすでに当然の如く俺よりリアクションがでかい三人組と一人。

だが、しかし、今日は意外な人物も登場した。

「潤先輩ー！一緒にお昼たべませ・・・!!!」

最近存在すら忘れていた雪華登場。

「ず・・・。」

「ず？」

俺は正常な頭で固まっている雪華に聞き返す。

「ズルイですー！ー！私も先輩とハグしたいですー！ー!!!」



ただだつと凄い勢いでこちらに向かって駆けてくる。

「ち、ちよつとまで!!? つーか何故に八重さん抱きついてんの!」

「パパあ……。」

核爆弾級の問題発言、発生。

「パっ!？」

「「「「パパあーーーー!!!!?」」」」

「ほう……。」

だから何でお前らの方がリアクションでかいんだよ!

八重さんはまだ幸せそうに頬擦りしてるし。

ああ、八重さんのイメージが……。

クラスのいたるところから殺気がもんもんと湧き出ている。

美咲……俺すぐそっち逝くかもしれない。

……。

その後、八重さんの抱擁を振りほどき見事に逃亡した。

それから教室に帰るに帰れず、今日はもう帰る事に決めた。

(何故に八重さんはいきなりあんな事を……。)

考えていても仕方ないので明日にでも聞くかと思い、下駄箱まで行く。手紙が入っていた。

その手紙にはこう書かれていた。

放課後、学校が終わったなら話がありますのでそちらのお宅に伺います。

八重桜

どうやら授業の合間の休み時間中にいれたようだ。

それにしても八重さん、俺んち知ってんのか？

「まあ、なるようになるか。」

考えても仕方ないのでとりあえず家に帰る事にした。

・・・。

「ん？」

家に着いて中に入ろうとしたら隣の美咲の家だったところに引越しのトラックが来ていた。

今日からもう違う人の家になってしまったと思ったら少し寂しい気分になった。

「止め止め、いつまでも感傷に浸ってても仕方ないしな。」

後で引越しの挨拶も来るだろうし変な顔はしないようにしなきゃな。

さて、八重さんが来るまで何をしてっかな・・・。

・・・。

ピンポン。

「はい。」

「んあ？」

いけね、寝ちまってたみたいだ。

春奈ももう帰ってきてたみたいだな。

「あれ？八重さん！？」

「ふえ！？えつと久代さん？」

いけね！どっちにも事情を説明してなかった。

俺は急いで飛び起き、玄関に向かった。

「おう、とりあえず二人に説明すつから八重さんは上がってくれ。」

「あ、はい・・・。」

「あ、潤君、起きたんだ。」

なんかもうあのショッキングな出来事があったから八重さんは美咲じゃないって割りきれるようになったな。

八重さんと春奈が席に着いたのを見て切り出した。

「さて、まずはどうしてこいつが俺んちにいるかだけど．．．。」  
八重さんは激しく頷いている。

「フィアンセだから」

と、俺が言っわけもなく春奈が横からちゃちゃをいれてくる。

んな事、普通本当の事だと思わ．．．

「ふええ!!?」

いや、めっちゃ真に受けてるし．．．。

「断じて違うぞ。只たんに身寄りがなくてうちの親が里親になった  
ということ。」

春奈が来てから親共にもう一度確認してみたところ、里親になる手  
続きは既にしてあったらしい。

そう言う八重さんはえっとした顔をした。

「そうなの．．．?」

「うん、だけど潤君もいるし全然寂しくないよ。」

「そうなんだ．．．。」

八重さんは何だか複雑そうな顔をしていた。

「で、八重さんが何故うちに来たかだけど何でも話があるらしい。」

今度は春奈に向かって事の経緯を話す。

「で、結局話って？」

「あ、はい、それは・・・」

ピンポン。

また家のチャイムが鳴った。

「ん？今度は誰だ？」

ちよつと待ってて、と二人に言って玄関に向かう。

「はいはい、どちらさー！！？」

玄関の扉を開けたらそこには、

「お久しぶり、潤君。」

美咲の母、美幸さんが立っていた。

（ 第二十二話へ続く ）

## 第二十一話

その懐かしい人は突然、やって来た。

「み、美幸さん!？」

「元気にしてた？」

そついう美幸さんは昔と全く変わらない笑顔を見せた。

美咲が死んでしまった時はひどく落ち込んでいたが今は大丈夫なようだ。

「どうしたんですか？突然いなくなつたと思つたら今度は突然現れて。」

「また、あの家に住む事になつたから再会もかねて引越しの挨拶しにきたんだ。」

そつ言つた後、美幸さんは玄関に女物の靴が二足あることに気づいた。

「あれ？桜は来るつて言つてたけどもう一人は？」

あれ？何で美幸さんが八重さんの事知ってるんだ？

と、そう思つた時、

「あ、美幸ママ。」

と、後ろから声が聞こえてきた。

「桜、やっぱりここだったんだ。」

「うん、早くパパに会いたかったから・・・。」

八重さんが赤い顔をしてチラチラこちらを見てくる。

・・・八重さんの後方からの視線が痛い。

「それで、潤君に事情は話したの？」

「ううん、まだ。」

美幸さんはそう、とつぶやき真剣な顔をして俺に向き直った。

「潤君、長くなりそうだから上がってもいいかしら？」

「あ、はい、どうぞ。」

・・・。

俺は美幸さんに春奈の事をさっき、八重さんにしたように説明した。

「そっか、大変だったね・・・。」

「いえ、今はもう大丈夫ですから。」

そう言って、春奈はニツコリと笑う。

その笑顔を見て美幸さんははっと何かに気づいたようだった。

「どうかしたんですか？」

俺はそう尋ねてみたが、美幸さんは、

「うっん、後で話すね。」

と、言うだけだった。

「それで？何で八重さんは俺をパパと呼ぶんだ？」

春奈もブンブンと激しく頷いている。

「それは・・・あのねパパ、ボク、桜だよ。」

「いや、それは知ってっけど。」

何を言っているのかいまいち分からん。

だが、八重さんは違う違うと首を振る。

「だから、そうじゃなくて・・・」

と、その時、美幸さんが苦笑して言った。

「潤君この子、犬の桜だよ。」



・・・は？

「えーっと、もう一回言ってくれますか？」

「まあ、信じられないよねえ、桜。」

「うん。」

美幸さんに言われ、八重さんは被っていた帽子を脱いだ。

「なっ!？」

「ええ!？」

八重さんの頭には、

「犬耳・・・。」

俺は呆然としながら呟いた。

「ち、ちよつといいか？」

俺はそう言っつて八重さんの頭の耳を触った。

「あつ、んっ・・・。」

ピクン、ピクン。

「ほ、本物だ・・・。」

犬耳はちゃんと血が通っていて、俺が触る度に反応した。

一通り、触ってみた後俺は呆然としながら椅子に座った。

「しつぽもあるよ、見る？」

そう言つて八重さんは立つて、くるつと後ろを向いた。

「しつぽ・・・。」

ゴクリと生唾を飲んで俺はそのしつぽがあると思われる場所を凝視した。

ギューー。

「いででで！？な、何だよ、春奈！？」

突然春奈が耳を思いつき引き張ってきた。

「・・・いやらしい。」

「ち、違う！誤解だ！」

俺は必死に言い訳するが春奈は聞く耳持たない。

「パパになら見られてもいいかな・・・。」

赤い顔してそんなことを言うもんだから春奈の殺気が五割増した。

「頼むからこれ以上事がこじれること言わんでくれ・・・。」

俺は本気で脱力しながら言った。

「話を元に戻すけど、私にも何で犬だった桜がこんな事になったのかは分からないんだ。」

「八重さん本人にも？」

俺がそう尋ねると美幸さんはそう、と言った。

うーん、しかし犬が人間にねえ、にわかには信じがたいけど。

「あの・・・。」

春奈が恐る恐る手をあげた。

「何かな？」

「どうして、名字が藤森じゃなくて八重何ですか？」

あ、確かにそうだな。

「あ、言い忘れてたけど私再婚したんだ。」

「・・・えええ！？」

いきなり寝耳に水な話だった。

「あつちで色々あつてねえ、今に到るわけなの。」

「説明省き過ぎですけどまあおめでとうございます。」

「おめでとうございます。」

俺と春奈はそろって祝の言葉を言った。

「ありがと、それで学校では桜と美咲は無関係ということにしておいて。あることないこと噂されるのはいい気分じゃないだろうし。」

八重さんを見ながら俺達にそう言った。

「はい、分かりました。春奈もいいな？」

「うん。」

美幸さんは嬉しそうに目を細めている。

「ありがとう、潤君、春奈ちゃん、これからもよろしくね。」

「はい。」

俺は今度は八重さんに向き直った。

「明日からよろしくな、桜。」

俺がそう言うのと桜は驚いた顔をしたが、だんだんと嬉しそうな顔になっていった。

「うん！-！」

ガバツとまたもや桜が飛び付いてきた。

「つか、んな事したら

「ああー！-！？」

ああ、やっぱりまた修羅場・・・。

（ 第二十三話へ続く ）

## 第二十二話

その日もやっぱり厄日だった。

「痛い・・・。」

「パパ、大丈夫？」

「潤君が悪いんでしょう。」

朝、学校へ登校中、俺は痛む頭をさすっていた。

「それにしたって思いつきり叩くことないのに・・・。」

「自業自得です！」

桜は心配そうな顔をしていたが春奈はまだプリプリしていた。

それは、一時間前の出来事・・・。

・・・。

この日も春奈は早く起きて朝食の支度をしていた。

「よしっと、後は潤君を起こすだけ。」

今日はどんなこととして起こそうかな

「昨日は足をくすぐったし、昨日は耳に息を吹きかけたりしたし・・・。」

色々考えているうちに春奈は部屋の前まで来ていた。

「お邪魔します」

ぬき足さし足でベッドまで近づいていく。

潤は布団を頭まで被っていて顔は見えない。

「よし、今日は一思いにやっちゃいましょう」

そして、春奈はガバツと布団を剥ぐ。

が、

「っ!？」

そこには、桜も一緒に寝ていた。

「つつつゝつつっ!」

声にならない叫び声をあげるが潤はだらしなく寝ているだけ。

そしてまたいつものごとく、

「潤君!!!」

「ぐほあ!!」

ドカツ、バキッ

春奈は寝ている潤を袋叩きにしていく。

「ん〜、パパ〜」

桜はまだ寝ぼけているのか潤にすりよっている。

「はっ！？何で桜が!？」

潤もようやく今の自分の状況が分かったようだ。

しかし、時既に遅し。

「この浮気者――!――!」

「ま、待て、春奈! 話せば分かぶほあ!」

春奈のパンチが潤の顔面に炸裂した。

・・・。

そして今に到る。

「それで何で桜は俺のベッドに忍び込んでたんだ？」

春奈に殴られた顔を撫でながら桜に問う。

「んとねえ、今日は朝早くから起きちゃったからパパを起こそうと思っ  
て、でも・・・」

桜は顔を赤くしてモジモジしている。

「パパの寝顔見てたらボクも眠くなっちゃって。」  
「それで、忍び込んだと？」

うん、と桜ははにかみながら頷く。

満足気にそう言う桜を見て潤はハアと溜め息をついた。

「桜よ、例え元が犬でも今は普通の女の子なんだから忍び込むのはやめなさい。」

「えゝ、なんで？」

桜は不満気に頬を膨らました。

「いや、びびって俺の寿命が縮まるから。」

春奈のせいで、と心の中で付け足しておく。

「むゝ、わかった。」

しぶしぶながらも桜は了承してくれたようだ。

「よしよし、偉いぞ。」

そう言って潤は桜の頭を撫でる。

「えへゝ」

桜は頭を撫でられている間はこの世の幸せ独り占め、みたいな表情をしていた。



が、

「・・・・・・・・。」

他方からの無言の重圧。

潤の背中に嫌な汗が流れ出す。

このままではやばいと判断した潤は話題を変える事にした。

「そうそう桜、学校ではパパとか呼ぶなよ。」

「どうして？」

キョトンとした顔で桜は首を傾げる。

「あのなあ、同世代でパパとかありえないだろうが、名字か名前でよんでくれ。」

桜はうーんと首を捻っている。

どうやら、呼び名を考えているようだ。

「じゃあ、潤ちゃん。」

「あ・・・・・・・・。」

『潤ちゃん。』

そう呼ばれた時、潤の中で美咲と桜が被った。

「潤君、どうしたの？」

潤の様子が少しおかしいのに気づいた春奈はすかさず尋ねた。

「あ・・や、やっぱりパパでいいか。しばらくすれば周りも慣れるだろう。」

「本当に？やった！」

「潤君・・。」

（美咲さんの事？）

唐突に思い浮かんだが春奈は何故か確信があった。

「・・・まだまだ美咲さんには勝てないなあ。」

「ん？春奈、何か言ったか？」

「ううん、何でもないよ。」

少し遅れた春奈が駆け足になり潤の隣に並ぶ。

頑張ろう、と春奈は心に深く刻み込んだ。

・・・・・。

「つ、疲れた。」

「あ、あはは、お疲れさま。」

机に突っ伏している潤を見て春奈が苦笑する。

先程、昨日の件についての理由をクラスメイト達に聞かせていた。

もちろん本当の事は言わずに、昨晚潤が必死こいて考えた理由を話した。

その理由は、桜の父親が潤に激似だったというものだった。

中には、んなばかなと言う奴もいたがどうにか納得させた。

そして、今に到る。

「でも、ちよつと無理矢理な理由だったかもね。」

「言っな、それしか思い浮かばなかったんだ。」

桜の席ではクラスメイト達が理由の真偽を確かめている。

「全く、もつとましな理由考えなさいよ。」

「霧丘よ、諦めろ、この男にはそれが限界だ。」

「ふ、二人とも、それはちよつとひどいよ。」

既に、綾乃達には本当の事を話している。

若干、まだ信じられないようだったが桜の耳を見て、納得したようだ。

「ふっ、お嬢は潤にだけは甘いな。」

「そ、そそそそそんなことないよー!」

信の言葉に美姫が耳まで真っ赤にして首を振る。

ちなみに信が美姫をお嬢と呼ぶ理由については後々語られるだろう。

「そ、それより……森神君、大丈夫なの？」  
「何が？」

美姫は言わずらそうに口ごもる。

「桜ちゃん、美咲ちゃんに似てるから……。」

その言葉に春奈も綾乃も心配そうな顔になる。

「いや、大丈夫。あいつ、美咲にそっくりだけど、中身全然違うから。」

でも時々、美咲と被ることがあるけど、とは思っただけにしておく。

「そっか、よかった。」

その言葉で美姫は安心できたようだ。

「ごめんな、美姫。心配かけて。」  
「ううん、いいよそんなの。当然だもん。」

その心遣いに潤はじゅんと感動した。

「ありがとう、美姫。お前っていいやつだなあ。」  
「え！？あ、う、えうう……。。」

潤がそう言つと美姫は赤くなつて縮こまっていた。

ガララ。

潤が美姫のコロコロ変わる表情を楽しんで見ていた時、突然教室の扉が開いた。

（第二十三話へ続く）

## 第二十三話（前書き）

序盤のみ雪華視点です。

## 第二十三話

こんにちは！水無瀬雪華です。

最近出番が少ない事が悩みの種になっています。

そりゃあ、私は潤先輩達と学年が違うから出番が少ないと思うけどもっと増やしてもいいと思うのですよ！

とまあ、愚痴はこの辺にしておき、今私は前回出来なかった潤先輩とお昼と一緒に食べるというミッションを再度行おうと思い、潤先輩のクラスに向かっています。

それより、昨日潤先輩に抱きついていたのはいったい誰なのでしょう？

春奈先輩ではなかったし、綾乃先輩や美姫先輩でもなかったみたいだし……。

ええい！考えても仕方ない！後で直接聞いてみよ！

一人で悶々と考えている内に雪華は潤の教室前まで来ていた。

「よし、突撃」  
……。

潤が春奈達と雑談している時、雪華が突然やって来た。

「潤先輩、今日こそはお昼と一緒にしましょう」

そう言つて潤の席まで駆けていき、そして周りを警戒します。

「何してんだ？」

「・・・今日はいないみたいですわね。」

恐らく桜の事を言っているのだろうが、雪華には人ばかりが出来ている桜が見えていないようだ。

「それじゃ先輩、お昼一緒に食べましょう・・・二人つきりで」

「」「」「ダメ。」「」「」

「ふっ。」

何故か潤が答えるよりも早く例のごとく三人娘プラスいつの間にか桜まで加わっている。

「あー！？あなた昨日の潤先輩に抱きついてた人ー！？」

「そう言う君は誰？パパに何か用？」

それを聞いた雪華は絶句した。

「ぱ、ぱ、パパー！！？」

「ああ、デジャヴだ・・・。」

潤は昨日と全く同じ事態になってしまった事を嘆いた。



「そんな・・・私というものがありません・・・相手は誰ですか！！」  
「？」

雪華が鬼の形相で潤と向き合う。

「む、雪華ちゃんそれは聞きすぎてならないね。」

春奈が潤と雪華の間に立ち、雪華と対峙する。

「ああ、もうどうにかして・・・。」

潤は人知れず涙を（心の中で）流した。

・・・。

一悶着起こった後、潤は雪華に事の事情を話した。

雪華になら話しても大丈夫だろうと満場一致で本当の事を話した。

「そ、そんな・・・。」

「まあ、驚くのも無理はないが、ほら、これが証拠。」

潤は雪華にだけ見えるように桜が付けているヘアバンドをずらした。

「うう、まさか潤先輩が獣耳好きだったなんて・・・。」

「驚くのそこかよ！？」

どうやら雪華は違ふところに驚愕していたようだ。

「まあ、そんなことよりお昼食べましょう。」  
「いや、そんなことって……。まあ、いいか。」

潤は内心かなり嬉しく思っていた。

桜の正体を知っても奇異の目で見ることなく普通にしている。

「雪華、お前いいやつだな……。」

「はい？何か言いました？」

「いや、何でもない。」

きゅ……。。

その時、誰かの腹が鳴った。

その音の出処を探っていくと、

「あう、ううう……。。」

桜が腹を押さえて真っ赤になっていた。

「恥ずかしいやつだな。」

「うう、パパ……ひどい……。。」

潤がさりげなく呟くと桜は涙目になって潤を睨む。

「ふふ、も、森神君、そういう事言っちゃダメだよ……。。」

「そ、そうよ、潤。思うだけにしておきなさい……。。」

桜をフォローする美姫と綾乃だが笑いながら言ってもまるで説得力がない。

「えうう、笑わないでよー。」

桜はもうこれ以上ないぐらいに赤くなってしまった。

「じゃあ、みんなでお昼食べに行こうよ。」

「おお、そうだな。いいか？雪華。」

「はい、ちよつと残念ですが・・・。」

春奈の提案に少々不満げだったが雪華は承諾してくれた。

そうして潤達は食堂へ向かって行った。

（第二十四話へ続く）

## 第二十四話

春奈との再会から色んな事が一気に起こっていたが最近になってようやく落ち着いてきた。

今日は土曜日で休日。だが潤は駅前に一人で突っ立っていた。

「遅いな、おい。」

一人ベンチに座って不満をもらす。

だが、ようやく向こうから人がこっちに駆けて来るのがわかった。

「ハア、ハア、ご、ごめんね森神君。待った?」

美姫はいつもはポニーテールにしている髪を下ろし、ほんの少しだが化粧をしているようだった。

そのいつもとは格段に違う容姿に潤はしばしみとれてしまう。

「……。」

「どうしたの?森神君。」

その言葉に潤ははっと気づく。

「いやいや、何でもない。」

潤は美姫に気付かれないようにその場をやり過ごす。

何故潤と美姫が一緒にいるかというそれは昨日の放課後に遡る。

.....

キンコンカーンコン。

「あー、やっと終わったか・・・。」

明日は休日ということもあり、解放感に包まれている潤。

このところなんともでか過ぎるニュースが続いたので、今日のよう  
な普通の日は懐かしく感じられた。

そう物思いに耽っていると、

「森神君。」

ふと、名前を呼ばれて潤は振り返ると美姫が立っていた。

「美姫、どうした？」

「あ、あのね！明日、暇かな？」

美姫は内心ドキドキだったが潤は全く気付かない。

潤は明日の予定を思い出していた。

「んー、明日は家でゴロゴロする予定。」

春奈は朝から出掛けるって言ってたから思う存分寝れる！と潤は企

んでいた。

「じゃあ暇なんだね。」

「・・・さすがにズバツと言われると傷付くぞ。」

「で、明日なんだけど・・・」

「いや、聞けよ！」

潤のささやかな抗議を美姫は軽やかスルーした。

「で、明日が何だって？」

このまま反抗してもしようがないので潤は話しを進める。

「うん、えっと・・・今度兄さんの誕生日があって、プレゼント贈りたいんだけど、私男の人の趣味ってよく分からなくて・・・」

「それで買いたい物に付き合っただけいい？」

「うん・・・ダメかな？」

不安そうな瞳で美姫は潤を見る。

「いや、どうせ暇だしな。いいよ。」

潤がそう言つと美姫はパアツと笑顔になった。

「ありがとう！じゃあ明日は十時に駅前でもいい？」

「ああ、分かったよ。」

「遅刻厳禁だよ？」

「分かっている。さて、俺はもう帰るぞ。」

見ると教室には潤達意外ほとんどいない。

「うん、バイバイ。また明日ね。」  
「おう。」

そして、その夜、潤はふと気が付いた。

「そういえば、美姫と二人で過ごすのは初めてかもしれない。」  
今までは何かと綾乃や信と一緒にいたから二人つきりにはなれなかった。

昔にあんな事があつたのに男と二人つきりで過ごしても大丈夫なんだろうか・・・。

「あゝ！やめやめ！この事は忘れるって約束したじゃねえか！」

何があるうと約束だけは絶対に守り通す、それが美咲を守れなかった事に対しての自分への戒め。

「ま、明日はしっかりエスコートすればいいか。」

そう決断すると、だんだんと眠くなっていった。

・・・。

「つーか、自分で遅刻厳禁って言ったくせに自分が遅刻してんじゃない。」

昨日の美姫の言葉を思い出し、潤は言う。

「あ、あはは・・・ごめんね。何か色々時間かっちゃって。」

美姫が家を出ようとする時に色々悶着があって時間がかかってしまった。

「まあ、いいか。さっさと行こう。」

「うん。」

潤と美姫は駅前の近くにあるデパートへ向かって行った。

「そっぴゃ、美姫と二人つきりっていうのも初めてだよな？」

デパートに入った時、潤は昨日の夜考えていた事を言った。

「あ、う、うん。そだね・・・。」

脳天気と言う潤に対して美姫は意識しまくりである。

その時、美姫は朝あったとある出来事を思い出した。

・・・。

「母さん、今日ちょっと出掛けて来るね。」

朝、美姫が目覚めて、身支度を整えた後、美姫の母、天神姫乃てんじんひめのに言  
った。

「あら、誰と？」



そう言われて、美姫は少々躊躇った。

「も、森神君とだけど……。」「

「あら？あらあらあら？」「

姫乃がいたずらっぽく微笑んだ。

こういう話題は姫乃の好物だったりする。

「美姫ちゃん、もしかして、デート？」「

そう言われた途端、美姫の頬が赤く染まっていく。

「ち、ちが」「

「よくやったー！！美姫！！」「

「やったねえ、美いちゃん！」「

違うと言おうとしたがその言葉はある二人の登場に遮られた。

最初に発言したのは妙にテンションの高い青年、美姫の兄、天神達てんじんた哉つや。

次に発言したのはほんわかした女性、美姫の姉の天神姫菜てんじんひな。

「あの奥手な美姫がようやくデートできるようになって……。くうつ、あんちゃん嬉しすぎて涙がちょよぎれるわ。」「

達哉は腕で目を隠して泣くふりをしている。天神達哉、今年で22

才。

「そうだねえ、美いちゃん可愛いのに男っ気が全く無かったから心配してたよ。」

ぽわわんとした雰囲気の姫菜がしみじみと言う。

「ち、違っつて！森神君には私の買物に付き合ってもらっただけ！」

それまで泣きまねしていた達哉が突然真面目な顔をした。

「美姫。男と女が二人つきりで出掛ける、それすなわちデートというんだよ。」

「そうだよ、美いちゃん。どうせなら押し倒すくらいしなきゃ。」

天神姫菜、顔に似合わず危ないことを言う20才。

「美姫ちゃん、はい、これ。」

姫乃が美姫に3万円ほど美姫に握らせた。

「な、なにこの大金？」

いつもは見ると安心する姫乃の笑顔が今日は怖い。

「なにつて、美姫ちゃん今日は帰って来ないんでしょう？いわゆる朝帰り？」

「帰ってくるって！朝帰りなんてしない！」

美姫は真っ赤になって姫乃の言葉を全否定する。

「ふふん、では僕からはこれをあげよう。」

そう言いつと、達哉は懷から一枚の紙切れを取り出し、美姫に持たせる。

「これは何？」

いい加減うんざりしてきて、美姫は疲れた声を出した。

「駅前のラブホの割引き券。」

「なっ!？」

美姫は驚き、手の中にある券を見る。

『ラブホテル、ジュエリー&ラブ』

「いらない!こんなのいらないよ!」

美姫は持たされた割引き券を達哉に突き返す。

が、

「よし、じゃあ美いちゃんに全ての男が狼になっちゃうようなメイクをしてあげようかな。」

こう見えても、姫菜はプロのスタイリストである。

「じゃあ、美いちゃん。あっちにいきましょう」  
「もう、いやあ・・・、誰か助けて・・・。」

美姫は姫菜にズルズルと引きずられていった。

・・・。

「はあ・・・。」

美姫は潤に気付かれないように溜め息をついた。

（結局流されて母さん達の好き勝手にされちゃたし。）

「・・・め。」

（はあ、あの割引き券も持ってきちゃって・・・。）

「お・・・み・・・て。」

（ううー、こんなの見られたら森神君に嫌われちゃうよお。）

「おい、美姫つて！」

「ひゃ、ひゃい!？」

突然呼ばれた美姫は驚いて妙な声をだしてしまった。

「どうした？ぼーっとして。」

「あ、う、ううん！何でもない！」

ラブホの割引き券をどうするか考えていたなんて口が裂けても言えない。

「でも、そんなもんで良かったのか？意外とあっさり決まったけど。」

美姫の手にはさつき潤が選んだ銀のブレスレットを誕生日用に包んでもらった箱があった。

「大丈夫だよ。兄さん、多分こういうの好きだと思うし。」

それに、と美姫は顔を赤らめて潤を上目使いで見る。

「森神君がせっかく選んでくれたんだし……。」  
「う……。。」

思わず抱き締めたくなるくらい可愛く言う美姫に潤は言葉を詰まらせる。

「そ、そうか、それならいいけど……。。」

若い男女が二人顔を赤くして固まっている光景は端から見てもおかしいだろう。

「とりあえず、当初の目的は達したわけだけどこれからどうするんだ？帰るか？」

帰る、という言葉に美姫は表情を曇らせる。

買い物は意外と早く終わってしまったってまだ時間は十二時を少し過ぎたくらいだ。

美姫はもつと一緒にいたいと思うが、内心焦りまくってなかなか言い出せない。

もうこのまま帰るのかな、と思って気落ちしていたが次の潤の言葉にそんな気持は無くなっていった。

「もしよかったら、これから遊んでいかないか？帰ってもどうせ暇だし。」

「あ・・・」

その言葉に曇っていた美姫の表情は一気に晴れていった。

「うん！喜んで！」

美姫はその時、今日一日で最高の笑顔を見せた。

・・・。

潤と美姫が一通り、駅前にあるゲームセンターやボーリング場などで遊び終えた時には、もうすっかり空が赤らんでいた。

「あゝ何か疲れたな。美姫いつもよりテンション高かったし。」  
「あはは・・・、ごめんね、ついはいじやって。」

潤が溜め息をつきながら言うと美姫は苦笑した。

「少し休んでから、帰るか。」

「うん、じゃあ公園にでも行こう。」

二人は駅前の近くにある公園に向かって歩き出した。

.....。

「わあ、誰もいないね。」

二人が公園に着いた時には辺りは暗くなり、そこには誰もいなかった。

「元気だよなあ、美姫。」

はしゃぐ美姫を尻目に潤はベンチに腰を下ろした。

そんな潤を見て呆れたのか美姫は頬を膨らませて駆け寄ってきた。

「もゝ、森神君じじくさいな。」

「いいんだよ、今日の美姫に合わせてたら体がもたん。」

その言葉でますます頬を膨らませるがやがてはあ、と溜め息をついて潤の横に座った。

そして、徐に空を見上げた。

潤もそれに習って上を見上げる。

「星、綺麗だね。」

「そうだな。都会とは思えないな。」

美姫はその言葉を最後に黙ってしまう。

潤も何を言っているのかわからず、そのままだ。

「今日はありがとね、森神君。」

「なに、気にするな。」

見上げるのをやめた美姫は今日のお礼を潤に言う。

「ねえ、森神君……。あの日の事、覚えてる？」

あの日、美姫の人生の転機ともいえる日。

「覚えてるっちゃ覚えてるが、忘れる事にしたんじゃないか？」

美姫が突然あの日の事を話して来る事に潤は驚いた。

「うん……。でも、今はそんな気分だから。」

あの日の事は潤も美姫も思い出したくない記憶。

だが、美姫はそんな記憶にも関わらず、あの日の事を思い出していた。

（第二十五話へ続く）



## 第二十五話（前書き）

意外と更新が早い・・・自分でもビックリっす。  
さあて、美姫過去編（前編）の始まりっす。

## 第二十五話

潤と美姫が最初に出会ったのは四年前の中等部二年の時だった。

「あゝ、今日から二年生か。」

その日は天神学園の始業式。

「そうだね、一年間あつという間だったね。」

「ふっ、新一年生をどう手駒にするか、考えなくては。」

美咲はこの一年を思い出し、信一は物騒な事を呟いている。

「なあ、信。俺達のクラス分けの情報って入ってるか？」

「無論だ。しかし、こういうのはその場で見た方が感動はでかいだろう。」

「そうだよ、潤ちゃん。信ちゃんの言う通り。」

「ふーん、そんなもんか。」

そして、三人はこの一年の思い出を振り返りながら学園に向かった。

・・・。

「結局、いつものメンバーか。」

「よかったあ、離れたら寂しいもんね。」

「何よ？」

「ふっ。」

いつものメンバーというのは潤、美咲、信一、そして一年前とある

出来事から知り合った綾乃だった。

「結構、周りも代わり映えしないな。」

周りを見ると、一年の時とそんなに変わらないようだった。

「ん？」

潤が周りを見渡していると一人だけポツンとうつむいている女の子がいた。

「何、あの子がどうかした？」

潤の視線に気づいた綾乃が聞いてきた。

「ん、いや、何か一人だけ周りから浮いてるなって。」

「ほんとだ。どうしたんだろ？周りに知ってる人がいないのかな？」

言われて美咲も気になるのか心配そうな顔をしている。

「ふむ、あの女子は天神美姫、一年の時から一人で過ごすことが多いようだ。」

信一が得意の情報力で彼女のプロフィールを述べる。

「・・・お前、よくまあそんな事調べられるよなあ。」

「ふつ、俺の辞書に不可能の文字はない。」

「プライバシーの侵害ね、あたしの情報もあるのかしら？」

「ふつ、無論だ。なんなら今ここで・・・」  
「いい！言わなくていい！」

何か気になる事があるのか綾乃が顔を真っ赤にしながら信一を止める。

「あれ？でも天神って・・・」  
「そうだ。彼女はこの学園の学園長の孫だ。」

得意気に信一は美咲の疑問に答える。

「でも、何で一人ぼっちなんだ？」

「ああ、それは学園長の孫という事で周りから敬遠されているのだろ。まあ、他にもいくつか理由があるみたいだが・・・。」  
「何だ、その」

理由って？と聞こうとしたがどうやら担任が来たらしく話しは一時中断となった。

「よし、では出席をとるぞ。」

入ってきたのは一年の時と同じく、安達祐介（４１）だった。

そして、新学期恒例の自己紹介が始まった。

「霧丘綾乃です！部活はバスケット部に所属してます！どうぞ、よろしく！」

「ベタやなあ……。 (ボソッ)」

潤のそんな呟きが聞こえたのか綾乃が振り向き睨んできた。

「何で聞こえてんだ？」

潤はホームルームが終わってからの自分の安否が不安になった。

綾乃の元気ハツラツな自己紹介終わったあと、それまで消極的だったクラスメイト達は、うけを狙ってネタをするやつや、自分の特技を披露するやつまで出てきた。

その中でも信一は異様だった。

「俺の名は篠原信一。趣味は情報公開、特技は情報収集。気になるあの子のスリーサイズから定期テストの答えまで！ジャンルを幅広く！が俺のモットーだ。ま、興味がある者は後で俺のところまでくるがよい。」

そう言い終わり、信一が着席すると周りから賛美の嵐（主に男）が巻き起こった。

「あいつのあれは相変わらずだな。」

去年もあれのせいで学園をあげての大騒動にまで発展し、本人は事態が収まるまで隠れていたりした。

そのせいで、潤や美咲まで被害を被った。

「また、去年と同じにならなきゃいいけど。」

人知れず、潤は溜め息をついた。

そして、いよいよ次はあの天神美姫の自己紹介。

どんな感じなんだろう、と思っていると突然周りの雑音が無くなった。

突然の事に潤は困惑し、辺りを見回してみると、みんな彼女を見て、安達祐介（41）までもが少しこわばっている。

気のせいか、みんなの彼女を見る目が冷たい気がする。

「・・・天神・・・美姫です・・・。よろしくお願いします・・・。」

そんな今にも消えてしまいそうな声で自己紹介を終えるが拍手も起こらず、みな何事もなかったように振る舞っている。

「なんだよ、今の・・・。」

潤が呟いた時にはもう次の自己紹介が始まっていた。

・・・。

「何、さっきのは。感じ悪いー。」

ホームルームが終わった後の休み時間、綾乃が潤の席まで来て言う。

「ああ、俺もそう思う。」

潤も顔をしかめて、さっきのクラスメイト達の態度に憤慨していた。

「いじめ・・・とはまた違った事なんだろうな。」

美咲も彼女の事を考えているのか悲しそうな表情を見せている。

「いや、一年の頃はどうかやらずという事もあったらしいな。」

信一は淡々と無表情で過去の事実を話していく。

「入学当初は学園長の孫、という事はあまり知られていなかったらしいが、時が経つにつれてその事を知られていき、悪質な嫌がらせもあったらしい。」

信一が言うには、時が経つにつれて、彼女はどんどん孤立、周りからはあいつに下手な事をすると言園から敵視されかねない、という事だった。

だが、それに気を悪くした、不当な輩共が、あからさまに無視したり、ノートをぼろぼろにしたりと悪質ないじめもあったそうだ。

「だが、あの容姿だ。中にはそれを承知で近づく者もいるようだったが、彼女自身人見知りが激しいらしく、話しているうちに男の方から離れていく事が多かったようだ。」

「ふーん、友達がいないのか、何か悲しいわね。」

綾乃は気の毒そうに彼女の方を見ている。

「よし、じゃあ決めた。」

信一の話を聞いて、少し考え事をしていた潤は唐突に言った。

「って、なにを？」

美咲が不思議そうに首を傾げて潤を見る。

「天神さんを俺達の友達に引き込む。」

意気揚々に言う潤の提案に美咲は嬉しそうに、綾乃は呆れ顔、信一は無表情だった。

「ま、あんただったらそう言うと思ったわよ。」

「うん！ボクもそう思った！」

「ふっ。」

「さて、思い立ったら即行動。」

そう言う潤は美姫の席まで歩いていった。

美姫が潤に気付くとどこか脅えた目で潤を見上げている。

「・・・なんですか？」

「え？あ、いや、なんというか。」

しまった、勢いで来たものの話す内容を考えていなかった、と今更になって後悔し始めた。

そして、勢いに任せて見当違いな発言をした。

「彼氏いるの？」



バキッ！ドゴォ！

「ぐほぁ！！？」

潤に向かって黒板消しやら筆箱やら色んな物が飛んできた。

「ごめんねえ、ちょっとこいつ持って帰るわね。」

そう言つて綾乃が潤の首ねっこを掴んで連れていく。

「あんた！何考えてんのよ！」

潤を椅子に座らせて綾乃が怒鳴る。

「いや、何かテンパっちゃって・・・、すまん。」

だが、それ以外にも理由があつた。

（あの話す時の脅えた目。あれじゃあ、男から離れていくつてのは分かるな。）

「しょうがないな、じゃあ今度はボクがいつてくるよ。」

今度は美咲が美姫のところへ向かう。

そして、一言、三言話すだけで戻ってきた。

「あれ？駄目だったのか？」

潤がそう尋ねると美咲は違う、違うと首を横に振った。

「お昼ご飯一緒に食べようって誘ったの。まずはそれからだと思っ  
て。」

「さすが美咲！この馬鹿者（潤）とは違う！」

綾乃の暴言に一瞬むっとするが、事実なので反論できなかった。

「とりあえず、次の授業の準備するか。」

これ以上の進展はないとみて、潤は次の授業の準備を始める。

「そうね、あとはお昼にどうするか考えておいて。」

「はいよ。」

「ラジャー」

「ふっ、まかせろ。」

そうして、潤達は各々の席に着いた。

・・・。

昼休みになって、潤は学食に向かった。

既に席には、潤以外全員席に着いていた。

「あ、おそーい。潤ちゃん、みんなとつくに来てたんだよ。」

「いや、悪い。ちよっと職員室行ってたもんで。」

「なに？あんた何したのよ？」

綾乃がジト目で潤を睨みつける。

「違うつて。ただ先生の手伝い、っと俺も飯とってこよ。」

そう言つて、潤が昼飯を取ってくるまでみんな律義に待っていた。

「何だ、先に食つてもよかったのに。」

「はいはい、そんな事より自己紹介。」

綾乃が美姫の方を向くと不安そうな目で潤を見る。

潤もそれまで黙っていた美姫に向き直る。

「えっと、さっきも言ったが、俺は森神潤。どうぞ、よろしく。」

「・・・天神・・・美姫です。よろしく・・・お願いします・・・」

美姫がビクビクしながら、消え入りそうな声で自己紹介をした。

「そんな、チワワみたいに脅えるなよ。」

「・・・ごめんなさい・・・。」

潤の何気ない言葉にも美姫は涙目になってしまう。

「てゆうか、姫ちゃんがこんなに脅えるのは明らかにさっきの一言のせいだと思っけど。」

「ふっ、全くだ。」

美咲と信一が呆れ顔で潤を見る。

「う、すまん。あれは、その、その場の勢いというか、なんというか……。」

「普通その場の勢いでもあんな事言わないわよ。」

「く、ごもつとも……。」

三人の口攻撃に潤はへこみまくる。

「……ふ、うふふ」

「ん？」

美姫が潤の姿を見て突然笑いだした。

「はは、あははっ、みんな仲いいんですね。」

どうやらツボに入ったらしく、あはははっと笑いが止まらない。

「うん、姬ちゃんやっぱり笑った方が可愛いよ。」

「そうね、笑う門には幸きたるっていうもんね。」

「霧丘よ、意味合いはあまり変わらんが幸ではなく福だ。」

間違いを指摘された綾乃は顔を赤くして信一を睨みつける。

「う、うるさいわね、意味合いが変わらないなら別にいいじゃない！」

「へっ、いいきみだな、綾乃。」

「なんですって!!!？」

ドゴオ！！

「ぐほあ！！!?」

綾乃のグーパンチが潤の腹に炸裂した。

「ぐおおおお・・・」

「ふふっ、あはははっ」

潤の悶絶する姿を見た美姫はさらに笑ったのだった。

この日から潤達と美姫の交流が始まったのだった。

だが、ある日、そんな潤達の仲を引き裂く出来事が起こった。

（第二十六話へ続く）

## 第二十五話（後書き）

次回より、第三者視点から潤視点、時々他者視点にしたいと思います。

そっちの方が書きやすいかなと思った次第で・・・。

書きにくかったら元に戻します。どうかそんな春の訪れ、よろしく  
お願いします。

## 第二十六話（前書き）

今回よりまた、潤視点に戻りました。美姫過去編は多分次回で終了します。

## 第二十六話

美姫と仲良くなって一ヶ月。

俺達と行動を共にしていることで、美姫自身少しずつではあるが変わっていつてる。

だが、その日は突然訪れた。

朝、少しだけ早く起きた俺は早めに家を出た。

「ま、たまにはこんな日もいいかな。」

誰に言うわけでもなく俺は一人呟く。

さて、早起きは三文の得。何か良いことおきないかなと思いながら通学路にある橋のところに差し掛かると、前方から美姫が歩いてくるのが分かった。

「おーい！美姫！」

俺が大声をあげるとあちらも気づいたようで控え目に手を振っている。

「おはよつす、美姫。」

「・・・森神君、おはよう。」

橋のところで合流した二人はそのまま歩き出す。

「・・・今日は早いんだね。」



「まあな、今日は目覚ましに圧勝だったな。」

何、それ、と美姫が尋ねてくる。

「いや、毎朝俺は目覚ましと壮絶なるバトルを繰り広げているんだ。」

「ふふつ、そうなんだ。」

と、美姫が言った瞬間だった。

突如として背中に衝撃が走ったと思ったなら目の前には地面が広がっていた。

俺が最後に見たのは同じように倒れる美姫と何か大きな人影だった。

・・・。

「・・・う、くう・・・」

俺が目を覚ました時、そこはどこかの倉庫のようだった。

「・・・つ、ここは・・・?」

えつと俺どうしたんだっけ?

確か朝歩いてて、途中で美姫に会って・・・それからの記憶がねえ。

「って美姫は?」

辺りは少し薄暗くなっていて、あまりよくわからない。

つか、両手縛られてうまく動けねえ。

「おーっと、森神潤。これはもしかや誘拐かー？人生最大のピンチかー？」

なんてナレーションしててもしょうがねえ。暗闇にだんだんと目も慣れてきた。

あ、あれは！？

「美姫！！？」

そこには美姫も俺と同じように縛られて横になっていた。

「お、おい！美姫、大丈夫か！？」

俺はふらふらになりながらも美姫に近づいた。

「おい、大丈夫か？美姫！？美姫！？」

両手が縛られているので美姫に必死で呼びかける。

「ん・・・ううん・・・」

よかった、どうやらただ気絶しているだけのようだ。  
とりあえず起こさなきゃ。

「おい、美姫。」

「ん．．？んん．．．」

うーむ、妙に色っぽい声だしてくるなあ。  
うわ、いけないことしてる気がしてきた。

「美姫って！起きろ！」

「ん．．．ううん．．．」

ようやく美姫が目を覚まして．．．

「．．．．おやすみなさい．．．」

ない．．．．。

「コラ。」

げし。

起きてすぐ寝ようとする美姫の尻を、もとい腰を足で蹴る。

もちろん靴は脱いで。

「ひゃあ！？な、なに！？」

「おはよう。」

つーか気絶する前も言ってたから違和感あるなあ。

美姫はぼーっとした目で俺を見ている。

「・・・あれ？何で森神君が私の部屋に？」

「いつまで寝ぼけてる、ここはお前の部屋じゃないだろうが。」

そう言われて美姫はキョロキョロと周りを見回す。

「ここはどこ？」

「私は誰？なんてボケはするなよ。」

美姫はむっとして、空気読め的な顔をしている。

「しないよ、森神君じゃないんだから。」

「ひどひ！！って漫才してる場合じゃないな。」

俺は今の状況を（推測だが）美姫に教えた。

「誘拐！？ねえ！私達どうなっちゃうの！？」

「まあ、落ち着け。パニックってもしようがない。」

俺はなんとかパニックに陥っている美姫をなだめる。

さて、落ち着けとは言ったものの、どうするか。

脱出したいのは山々だがここがどこかも分からないし、連絡しようにも手段が・・・あ。

「そうだ！携帯！美姫、携帯持ってるか？」

あいにく俺の携帯は気絶させられた時にどこかに落としてしまった

ようだった。

「え？あ、うん、ポケットの中。」

「それで、外に連絡とれるか？」

美姫は後ろに縛られた手で携帯を取りだそうとするがうまくいかない。

「駄目、取れない。森神君、ちょっと取って。」

「あいよ、どこだ？」

「あ……。」

だが、美姫は言うてから気づいたのか急にもじもじし始めた。

「あの……スカートの方のポケット……。」

「何？」

ちよつと待て。俺も後ろで手を縛られてんだぞ。

そんな状態でポケに手なんぞ入れたら間違い無く変な所まで触るぞ。

「うー、背に腹は変えられないし……我慢するから……私は大丈夫だよ。」

「だが、そうは言っても……。」

やっぱりまずいものはまずい。だが、いつ誘拐犯が戻ってくるかわからないし……。

「すまん、すぐやるから。」

「う、うん・・・。」

俺は後ろ向きで美姫の横に立った。

「うゝん、こっからじゃよく見えん。ちょっと指示してくれ。」

「あ、うん、もうちょっと下。」

俺は言われた通り手を下に下げる。

「そう、そこで入れて・・・。」

「こっか？」

ガサゴソ。

「ん・・・んん！」

「うおい！変な声出すなよ！」

「だって、くすぐりたい・・・。」

「っ」か誘拐されたつてのに何だ？この甘酸っぱいシチュエーションは？

何というか、さっきから俺の手に美姫の太ももが当たる。

「ひゃっ！？も、森神君！？変な所触ってる！」

「うわ！？すまん！っ」か携帯なんて取れねえよ！」

ああ、何か余計な事ばかり考えてしまっ。太ももとか、太ももとか、太ももとか。

もうこれ以上やると何か悟りを開けそうだね。うん。

とか余計な事を考えていると、

「あ、取れた。」

携帯についてるストラップを掴んで持ち上げる。

なんだか、嬉しいんだか、もったいないんだか分からない複雑な気分だ。

グッバイ、一夏の思い出。夏じゃないけど。

「どうだ？電波入ってるか？」

俺は携帯を掴んだまま、美姫に聞いてみる。

「あ、駄目。圏外・・・。」

ああ、俺の苦勞は何だったのか。切ないねえ。

それは、もう漫画買ったら表紙と中身が実は違ってたぐらいに切ないねえ。  
（実話）

「はあ、どうしようこれから。」

「待つしか」

バンッ！！

俺のセリフを遮って突然固く閉ざされていた扉が開いた。

そこには、長身で金髪、おまけにサングラスを付けた見た目二十代後半の男が立っていた。

「おや、少年少女。今頃お目覚めかい？」

下品な薄ら笑いを浮かべながら男が近寄ってきた。

「近寄るな！！てめえ、俺達をどうするつもりだ！？」

俺は美姫を後ろにかばいながら、後退りする。

「なあに、俺はお前には用はないんだよ。そっちの女に用がある。」  
「ひっ……」

美姫は脅えながら俺にぴったり引っ付いてくる。

そうやっている間にも男はどんどん近づいてくる。

「くっ！！」

こうなったら先手必勝！

俺は男の腹めがけて思いっきり蹴りを繰り出す。

しかし、あっけなく蹴りは避けられ、逆に男の拳が俺の顔にめり込む。

ドカッ！！



「ぐっ!!?」

殴られた勢いで床を転がる。

「森神君!!」

美姫が心配そうな顔で俺を見つめている。

「森神君!森神君!!」

「大丈夫・・・。」

とは言うものの、やっぱりもろにくらったのがいけなかった。  
少しふらふらする。

だが、俺は直ぐ様再び男と対峙する。

「ひゅゝ、カツコイゝ。でも、いつまで続くかな?」

さらに、男が俺に殴りかかってきた。

当然、ふらふらな俺はかわせるはずもなくボコボコにされていく。

殴られる度に意識が遠のいていく。

「やめてえ!!!もうやめてえ!!!」

途中で美姫が男に飛びかかっていく。しかし、

パン!!

「あう！！！」

美姫も男に平手打ちをくらわされる。

「てめえは黙ってる！おらおら、糞がキイ！さっきまでの威勢はどこいったあ！！」

ドゴォ！！バキィ！！

男は容赦無く俺を殴り続ける。

そして、一度俺を殴る手を止めて美姫の方に投げつける。

「森神君！！？」

「ぐ……、がはっ……。」

俺はもう話す事もままならないくらいにぼろぼろだ。

美姫はポロポロ涙を流しながら俺を抱きかかえる。

「さあ、女。今度はおめえの番だ。」

そう言っつて、美姫の腕を掴んで立ち上がらせようとする。

「いや！いやあ！！」

「く……！！」

俺は最後の力を振り絞り、男に体当たりをくらわせる。

「があ!!?」

「ハアー、ハアー……。」

俺は男を睨みつける。

「汚え手で、美姫に触るなあ!!!」

男もギロリと俺を睨みつけて立ち上がる。

「この糞ガキがあ!!そんなに死にてえならぶっ殺してやるよ!!」

男の拳が再び俺の顔面を貫く。

そこからは、阿鼻叫喚の地獄絵図。

男が俺を本気で俺を殴り殺しにかかってきて、それを止めようとした美姫も殴られる。

そして、数時間後。

俺と美姫はぐったりと横たわっていた。

「か……。はあ……。み……。ひめ?だい……。じよぶか……。?」

俺の声に反応した美姫が答える。いや、答えようとする。

「あ……。ゲホッ、ゴホッ……。だい……。じよ……。ぶ……。」

明らかに大丈夫ではないが、美姫は無理をして笑顔を作ろうとする。

さっきの事はもうあまり記憶がない。

途中からは美姫に覆い被さり、男の暴力に必死に耐えていた。

あ、やばい。目が霞んできた。

「も．．．りがみ．．．．．くん？」

「はあー．．．はあー．．．」

美姫が何か言っているようだが分からない。

「もり．．．がみ．．．くん．．．。しんじゃ．．．ゲホッ、ゴホッ．．．しんじゃ．．．やだあ．．．。」

美姫が這って俺の手を握る。

「ごめ．．．んな．．．み、ひめ．．．まも、って．．．やれなく、て．．．」

「や、だあ．．．もりが、みくん．．．！」

俺が最後に見たのは美姫の泣き顔。そして、パアンと何かの音がした。

（第二十七話へ続く）

## 第二十七話

目が覚めて、最初に目に入っ たのは白い天井だった。

「・・・生きてる。」

どう見てもここは病院。天国ではない。

「潤・・・ちゃん・・・？」

「んあ？」

隣には美咲がいて驚きで目が見開いている。

「おう、美咲。どうしてうおおー！！！！？」

「うええん！！よかった、よかったよお！！！！」

当然美咲が泣き出して抱きついてきた。

「いでででで！！！！ギブ！ギブ！ロープ、ロープ！！！！」

あ、やば、また意識が。

「きゃあああ、潤ちゃん！しっかりしてー！！！！」

「いや、つかお前のせいだろ・・・がくつ。」

「きゃああああ！！！！潤ちゃん！！！！」

・・・・・・。

「まったく、まじで死ぬかと思ったぞ。」

「ごめんなさい……。」

俺に睨まれて美咲はシヨボンとしている。

「それで、俺はあの後どうなったんだ？」

「うーん、ボクが知ってるのは」

美咲の話とはこうだった。

誘拐犯の狙いはおそらく美姫で、身代金目的だったらしい。

しかし、犯人の要求には警察は応じず潜入していた警察官に抵抗したため射殺。（俺が気絶した時に聞いた音はおそらくこの時の銃声だろう。）

そして、その後気絶していた俺と美姫は保護され、病院へと搬送。

俺はどうやら丸一日眠っていたらしい。

「ふーん、そんな事が……。そういえば、美姫は？この病院にいるんだろ？」

「あ、うん……。ここにすることはいるんだけど……。」

どうやら何か美姫に問題が発生したらしく美咲は言いよどむ。

「まさか！？美姫に何かあったのか！？」

「うーん、実はね、姫ちゃんが目を覚ました時、急に脅えだして錯乱状態に陥っちゃったの。」

今は薬で眠っているけど、と美咲は付け加えた。

「そんな・・・くそっ！！俺のせ」

「潤ちゃんのせいなんかじゃないよ。」

美咲が俺の言葉を遮って告げる。

「潤ちゃんのせいなんかじゃない。悪いのは誘拐犯の方だよ。」  
「でも・・・俺は・・・」

自分を責める俺に美咲は少し怒ったような顔をした。

「もう、そんなに自分を責めないの！お医者さんが言ってたよ、姫ちゃんの怪我がこれぐらいですんだのは潤ちゃんのおかげだーって」

不幸中の幸いとも言えるだろう。誘拐犯の暴力に俺は美姫をかばうことしかできなかった。

・・・美姫に会いに行かなきゃ。

会って謝らなきゃ。

「なあ、美咲。美姫の病室ってどこだ？」

「ええ！！？無茶だよ！さっき起きたばかりなんだから！」

確かにちよつと動かすだけで俺の体は悲鳴をあげている。

だが

「頼む！美姫に会って一言謝らなきゃ俺の気が済まないんだ！」

「潤ちゃん……。」

頭を下げている俺を見て、美咲はハアと溜め息をつく。

「しょうがないなあ。じゃあ、退院したらケーキおごってくれたら連れてってあげる。」

痛い……。強烈にそれは俺のお財布に大打撃だ。

しかし、今はんな事言っている場合ではない。

「退院したら地獄だな、こりゃ。」

退院後の不安を感じながら、俺は美咲の肩を借りた。

……。

「美姫、大丈夫だろうか？」

「大丈夫だよ、きつと。」

体の傷はしばらくすれば治るが心の傷はそう簡単には治らない。

俺が美姫に何かしてやれるだろうか。

今は気休めとも呼べる美咲の言葉だが、何故か安心できた。



「いいだよ。」

そこには477号室と書かれた病室。天神美姫というネームプレートが架っていた。

どうやら間違いはない。

俺が扉を開けようとした瞬間、中から怒声が聞こえてきた。

「い・・・!<・・・しん・・・!」

「!!?」

部屋は防音されているらしく、途切れ途切れに聞こえてきた。

俺と美咲は同時に顔を見合わせ、部屋に入る。

「美姫！」

「姫ちゃん！！」

そこには、まだ一日しか経っていないのに、以前のような可愛らしい姿とは別人のようにやつれている美姫がいた。

看護師が何とか美姫を落ち着かせようと体を押さえていて、医者がおそらく鎮静剤と思われる注射を手に行っている。

「も、森神さん！？まだ起きちゃ駄目ですよ！」

部屋に入ってきた俺に気づいたのか医者が声を荒げる。

「先生！早く鎮静剤を！」

必死に美姫を押さえている看護師が医者と呼ぶ。

「嫌あ、嫌あ！！森神君が死んじゃう！！」

あの時の光景を思い出し泣き叫ぶ美姫を見て、俺はじっとしていら  
れなかった。

「美姫！美姫！！俺は大丈夫だから！ここにいるから！！」

俺は暴れる美姫を抱きしめながら、その頭を優しく撫でる。

すると少しずつ暴れる力が弱くなっていき、虚ろだった目に生気が  
宿る。

「も・・り・・がみ・・くん？」

「おう、ちゃんと生きてるぞ。」

だんだんと美姫の目に涙が溜まっていき、流れ出す。

「ふええ、ふえええ、ひつく、よかつ・・た、うぐ、よかつたよお」

「ほらほら、そんなに泣くなよ。」

泣きじゃくる美姫の頭を苦笑しながらゆっくり撫でる。

「・・・ごめんな、美姫。守ってやれなくて。」

「ひつく、えぐ、う、ううん、つく、そんな事、ない、ふええ・・・  
」

責任を感じる俺に美姫はそんな事ない、ちゃんと守ってくれたと言  
ってくれた。

俺はそれから何も言えずただ黙って美姫が泣き止むまで、頭を撫でていた。

しかし、美姫にはある深刻な問題が残ってしまった。

一つは俺の側を離れられなくなってしまった事。

それは単に一人ぼっちになるのが怖いという訳ではなく、俺が近くにいと認識出来ないという恐ろしい状態に陥ってまともに動く事も出来なくなってしまうた。

このおかげで俺は美姫家に数ヶ月の間やつかいになることになったのだが、これがまた・・・いや、この話しはまた追々語るとしよう。そして、もう一つの問題は、美姫は俺以外の男と話しすら出来なくなってしまうたという事だった。

男の前に立つだけで、どうしても誘拐犯と重ね合わせてしまい恐怖で足がすくんでしまっていた。

だが、美姫はこの二つの問題をちゃんと克服した。

二つ目の問題はまだ今でも若干残っていて、普通に話しが出来るのは俺と信だけだった。

だが、俺はこの時の美姫が今までで一番強いと思った。

この二つの問題を前にしても逃げたさず、真正面から向き合って克

服した。

いつもは腹黒くて、侮れない美姫だが、この時のあいつほど強いと思った事はなかった。

.....。

「いやー、やっぱりあん時の美姫はすごかったよなあ。」  
「や、そんな事ないよ.....。」

素直に感心する俺に美姫は謙遜しているようだった。

「私、何度も逃げ出そうとしたり、諦めそうになった事もあったもん。」  
「はて？そうだったか？」

俺は真正面から問題に向き合う美姫しか見てない気がするのだが。

「私が落ち込んだり、へこんでたりするといっつも励ましてくれたもん。」

「あ？ん、あゝ。」

確かにそんな事もあった。だが、そんな大したことは言ってなかった気がするが。

と、美姫に言ってみると

「大したことじゃなくて何気ない一言が私を励ましてくれたんだよ。」

「

と、屈託のない笑顔で答えてきた。

その後はなんとなく言葉が続かない雰囲気になってしまった。

だが、気まずい雰囲気ではなくどこことなく居心地がよかった。

「ねえ、森神君。」

「ん？」

美姫はどこか決心したような顔つきで話し出した。

「私ね、森神君には本当に感謝してるんだよ。森神君がいなかったら今の私はいなかったんだろうなああって時々思うんだ。」

「何だ突然？」

あの時、俺はただ友達が悲しむのは見たくなかっただけで、そのためなら協力は惜しまなかった。

それは、俺だけじゃなくて美咲や綾乃も同じ気持だった。

「はあ、駄目だなあ私。春奈ちゃんや雪華ちゃんがいるから諦めようって何度も思ったのに……。」

「……。」

何がつて危つく聞きそうになったが、美姫の顔を見たら聞いてはいけないような気がして思い止まる。

少しして美姫が頭を上げて俺を真っ直ぐ見据える。

「森神潤君、私、天神美姫は貴方が心から好きです。」  
「・・・・・・・・へ？」

そんな間拔けな言葉しか出なかった自分が情けない。

「えっと、いつからで？」

「う、ん・・・病院で私を落ち着かせてくれた時かな・・・。」

美姫はもう顔真っ赤になっていた。というかそおいう俺もきつと真っ赤だな。

「あの・・・返事・・・。」

「あ、ああ、そうだったな。」

いけない、いけない、あまりにびっくりな展開にすっかり忘れそうになった。

俺は改めて美姫を見る。

確かに美姫は可愛い。もしこんな娘と付き合えたら俺はこ踊りしながら舞い上がるだろう。

だが、春奈の時もそうだったように俺の心にはまだ美咲がいる。

こんな状態で付き合ったりしたら美咲に申し訳ないし、美姫にも嫌な思いをさせることになる。

だから、俺は

（第二十八話へ続く）

## 第二十八話（前書き）

久々の更新！&読者一万人突破！！いやー、嬉しいッスね。これからもどんどん頑張ります！



## 第二十八話

「ハァー、何だか言ったらすっきりしちゃった。」

「美姫……。」

今まで溜めていた気持ちを全部言っただけからか美姫はすがすがしい顔をしていた。

「ごめんな、美姫……。俺って優柔不断だから……。」

「ううん、大丈夫だよ。森神君が優柔不断なのは今に始まったことじゃないしね。」

うう、美姫の言葉がまたしても俺に突き刺さる。

笑顔で言われると、痛いッス……。

美姫の告白の答えは、春奈に言っただけと同じく、気持ちの整理がつくまで待つてくれ、と答えた。

やっぱり俺って最低だな。自分の事しか考えてない。

でもやっぱり、俺は美咲の事を忘れられない……。

「さて、大分暗くなつたし、帰るか。送るぞ。」

「ううん、大丈夫だよ。一人で帰れるから。」

そうは言っても、このご時世、何が起るかわからない。

というわけで、無理矢理美姫を送る事にする。

「つべこべ言わない、さっさと行くぞ。」

「・・・うん。」

美姫は申し訳なさそうにしながらもどこか嬉しそうだった。

・・・。

「それじゃあね、森神君。また学園で。」

「おう、じゃあな。」

ボタン。

「ふう・・・。」

私は家の扉を背にしてため息をついた。

私が告白すれば森神君がああ言うのは分かっていた。

春奈ちゃんや雪華ちゃんが現れてからは諦めようって思っていた。

でも、そう思えば思うほど気持ちは膨らんでとうとう爆発してしまった。

告白した事に後悔はないけど本当に言ってよかったのか今更になっ  
て思う。

「・・・考えてたって仕方ないかな。」

とにかく告白してしまったからにはもっと積極的にならなくては。

「よし、頑張ろう。」

そう決意し、深呼吸を一つしていつもの私に戻った。

・・・。

「ふう、やっと家だよ・・・。」

ここまで来るのにずいぶんかった気がする。

頭の中では美姫の告白の言葉がずっとリフレインしている。

春奈や雪華もそうだが、俺なんかのどこがいいのか全く分からん。

だが、まあ考えてると言っただけ以上真剣に考えなくてはいけない。

さて、少し疲れたから考えるのは後にしてさっさと飯食って、風呂入って寝よ。

ガチャ。

「ただいまああああああー！！！！！！？」

玄關に入るとそこには包丁片手に仁王立ちして鬼の形相な春奈が立っていた。

「あ、何を怒りになっておいでなのでしょうが春奈さん？」

「潤君・・・、今日は随分お楽しみだったみたいだね・・・。」

ニツコリ、と怖いくらいに笑顔になる春奈。

「い、いやそりゃ楽しくなかったと言えば嘘になるが、どうした？」

恐る恐る尋ねてみると今度はうーっと唸り出した。

「潤君、姫ちゃんの用事が済んだらすぐ帰るって言ってたから、私も用事をすぐ終わらせて帰って来たのに・・・。」

「あー、色々話し込んで、遅くなったんだわ。」

「何の話してたの？」

何故だか春奈の目が冷たい・・・。

「うーかそれを言ったらおしまいだ。（主に俺の体が）」

ということで、適当にはぐらかす。

「まあ、色々昔話をな。それよか、飯飯。腹減っちゃった。」

「うー、何かはぐらかされた気がするー。」

まあ、はぐらかしたからな。許せ、これ以上痛い目は見たくない、

切に。

うん、まあ、とりあえず包丁戻せ、怖い。

「あ、そうだ。ねえねえ、潤君。」  
「何だ？」

春奈が何か唐突に思いついた顔をした。

「明日、家の大掃除やろう。そろそろ私もいららないものとか出てきたから。」  
「ふむう……。」

大掃除、ねえ……。はつきり言ってめんどい。

だが、まあ最近ゴタゴタしてて春奈とゆっくり過ごしてなかったしな。

「仕方がない、やるか。」  
「うん」

俺の言葉に春奈は嬉しそうに頷いた。

……。

そして次の日。

「掃除つつつても何をすればいいのか……。」

春奈は部屋で要るものと要らないものの分別をしている。

その間に俺は部屋の片付けを言い渡されたのだが。

部屋を見渡してみる。机の上がプリントやら教科書やらでカオスと化している。

「とりあえず、机の上からやるか。」

二時間後

「ふいー、大分片付いたな。」

机の上のプリントや押し入れの中の既に読んだ雑誌なんかをまとめていたら二時間もかかってしまった。

古い漫画とかって久々に読むと意外と面白いんだよな。（これで三十分は無駄にした）

「後片付けなくちゃならんところは……。」

ベッドの隅っこや押し入れの奥深くに眠っている例の物。

「ふつ、俺も男だ……。エロスな本はもう一冊や二冊なんてもんじゃない。」

という事で、春奈に見つからないうちに必要最低限を残して処分しちまおう。

さっさっさつと、ひもでくくつていく。

さらば、青春……。

感慨深い気持ちでエロスな本に別れを告げる。

「ふうん、潤君こんなの読んでたんだ。」

「っ！！？」

突然、その声は俺の背後から聞こえてきた。

嫌な汗が俺の背中に流れる。

ギギギつとまるで油がさされてない機械のように首が声の方に曲がる。

そこには何故か包丁片手に昨日と全く同じスタイルな春奈がニコニコ顔で立っていた。

「潤君。」

「は、はいっ！！？」

思わず敬語になってしまいう俺。  
だって怖いんだもん。

「それは……捨てないの……？」

春奈は俺の横にあるとっておいたエロスな本を指差していた。

「い、いや、ちょっとは残しておかないともったいないかなーって

「思いまして・・・。」

「潤君・・・。」

「はいっ!?!?!?。」

春奈は何やら下を向いてプルプル震えている。

「いいから・・・。」

「へ?。」

「全部捨てなさーーーーーい!?!?!?!?!。」

「ギャーーーー!?!?!?!?!?。」

結局、その日のうちに俺のエロスな本は春奈の手によって全て捨てられてしまった。

あんな本を買う金があるならパフェでも奢れと春奈に言われ、駅前  
に連れていかれたりしてその日は終わってしまった。

何か災難な一日だったな・・・。。。

（第二十九話へ続く）



## 第二十九話

「ボランティア？」

授業が終わって昼休みに春奈が作った弁当をパクついていると雪華が唐突に言った。

「はい！実は私、ちよくちよく町内会のボランティアに参加してたんですけど・・・」

「へー、なんか意外。」

雪華が説明していると綾乃が話の腰を折った。

てゆうか綾乃なかなか失礼だな、その通りだけど・・・。

「む、綾乃先輩、話の腰を折らないで下さいー。」

「まあまあ、雪華ちゃん、続けて続けて。」

いつものごとく、なだめ役の美姫が雪華に続きを促す。

・・・あの怒涛の休日が終わっても美姫はいつもとなんら変わりはないかった。

いや、前より少し積極的になったかもしれないが、よく分かん。

「先輩？話し聞いてますかー！」

ぼーっと美姫の方を眺めていたら雪華に呼ばれた。

いけね、話し聞いてなかった。

「悪い、何だっけ？」

「もー、ちゃんと聞いてて下さいよー！今週の日曜にある町内会のボランティアの人数が少ないから、先輩方も暇だったらどうですかって話します。」

今週の日曜・・・別に何もなかったかな。

「俺は別に構わんが。」

「ホントですか！？やったあ！！」

手放して喜ぶ雪華をまたもやむっとした顔で見るといつもの三人。

「パパが行くならボクも行くー！」

今まで黙々と弁当を食っていた桜がようやく食い終ったのか元気に叫んだ。

「ふっ、俺も行くでしょう。」

不思議な事に信も名乗りを上げた。

「お前、ボランティア何かに興味あったのか？」

「ふっ、まあな。」

相変わらず真意が分からん奴だ。

まあ、こいつが変なのは今に始まった事じゃない。

「だったら、私も行く!!!!」

勢いよく箸を持ったまま立ち上がる春奈。

いくらなんでもそこまで気合い入れる必要はないだろう。

「春奈の主張はよくわかったからとりあえず座ろうか、みんな見てる。」

いきなり勢いよく立ち上がったたりしたもんだから春奈はクラスの的になっていた。

「あ・・・はう・・・。」

そのまま赤くなってしおしおと椅子に座る。

「あーあ、あたしも部活が無かったら行くのになあ。」

「お前も行くつもりだったのか、すげえ意外だ。」

バシッと怒った綾乃に箸入れで頭を叩かれた。

「失礼な事言っな。」

お前だって最初言ったくせにとは反論出来なかった。  
意外と痛いんだよ、箸入れて・・・。

「んー、私も次の日曜日は姉さんと約束があるなあ。」

美姫もパスか、という事は今回は雪華含めて五人になるのか。

「で、いったい何のボランティアやるんだ？」

「えーっとですね、保育園のお手伝いです。」

保育園の手伝い？日曜日に？と雪華に聞いたら、

「何でもその日は日帰りで町内会の旅行に行くらしくて、子供は臨時に保育園に預ける事になったんですけど、何せ日曜日ですから保育園も人手が足りないらしくて・・・」

「それで、雪華に話が来たわけか。」

「という事です。」

むう、俺は子供の世話なんてした事ないんだが・・・。

「雪華は子供の世話とかした事あるのか？」

「ありません！」

威張るな、バカモノ。

「しかし、こういうのは我慢強くて、包容力の大きさがものを言うよな。」

周りを見渡してみる。

春奈、うーん何とかかなりそうかな。

雪華、何か子供に振り回されそうな気がする。

桜、ある意味子供と同じだな。

信・・・想像できん！

「何か心配だな。」

「な、何とかなるよ、潤君。」

俺が考えている事が分かったのか春奈は苦笑いしている。

ぬう、こういう時一番頼りになりそうな美姫がいないとは。

「美姫・・・お前の姉さんも一緒にいいから何とか来れないか？」

「うーん、行きたいのは山々なんだけど・・・ちょっとわかんないかなあ。」

く、望みは薄いかな。

「まあ、頑張りなさい。面白い土産話期待してるから。」

「くそお、人事だと思って。」

「だって人事だもん。」

綾乃・・・いつか貴様に天罰が下ることを望むぞ。

「じゃあ、皆さん、力を合わせて頑張りましょー！！」

「おー！！」

先のことを全く考えてなさそうな雪華の言葉に脳天気な桜しか反応しなかった。

はあ、どうなる事やら。

.....

運命のボランティア当日。

俺達は双葉保育園という名の保育園に来ていた。

「まずは事務室に行きましょう。」

先頭を歩く雪華についていき保育園の様子をしてみる。

子供達が元気に走り回ったり、砂場で遊んでいたり、ままごとなんかをしていた。

「ふーん、結構多いんだな。」

「そうだね、お世話なんて出来るかな。」

春奈はどことなく心配そうに言った。

「あ！パパ！ボクもあの滑り台で遊びたい！」

「お前は遊びに来たわけじゃないだろ！！」

ズビシツと桜の脳天にチョップをかます。

「あう、いたい・・・。」

桜が涙ぐんで睨んできたがスルーする。

「はい、ここです。中入ってみましょう。」

どうやら事務室についたらしい。雪華が中に入り園長らしき人を連れてきた。

「初めまして、ここの園長をしている小池和子こいけかずこといいます。」

小池和子と名乗った人は見た目四十代半ばといったところだろう。どこにでもいる普通のおばちゃんのようなが園長の風格が優しい印象を受けた。

「初めまして、森神潤です。それでこっちが・・・」

「久代春奈です。よろしくお願いします。」

「八重桜です！よろしくです！」

「篠原信一、十七歳、趣味は情報公開、特技は情報収集、近所のおばさんの井戸端会議の内容から国家レベルの機密事項までなんでもござれ、最近のマイブームは・・・」

「前フリが長い！！いい加減にしねえか！！」

こいつのこれは何とかなんねえのかといつも思うぞ・・・。

「うふふ、頼もしいわ。じゃあお願いするわね。」

「はい！任せて下さい！」

「アイ、アイ、ママ！」

雪華にそう言い残し、園長は事務室の奥に消えていった。何故か信が敬礼している。

「で、俺達は何をすればいいんだ？」

「基本的には今日一日、子供達の親が帰ってくるまで面倒をみるだけですから、とりあえず最初は皆集めて自己紹介しましょ。」

外に出た雪華は手慣れた様子で子供達を教室に入れ始める。

「はいはい！皆集まって下さいーい！ー！」

その号令に何人かの子供が集まり、中に入っていく。

だが、何人かは雪華の周りから離れようとしない。

何事かと思い、近づいてみると仲良く談笑していた。

「雪姉え、また来てくれたのー！？」

「雪華お姉ちゃん！また一緒に遊んでー！」

「うん、遊びますよー、とりあえず今は中入って下さいね。」

「はいー！ー！」

たたたと元気よく走って中に入っていく。

「随分人気者なんだな。」

「あはは、ここには結構頻繁に来てますから。」

だが、子供達のあの喜びようからそれだけじゃないことが分かる。

俺は雪華と知り合ったばかりだが、雪華の良いところをたくさん知っている。

あの子供達は雪華のそういうところを俺以上に知っているのだろう。



「本当にいい子達ばかりなんですよ。」

雪華はまるで弟や妹を見るような優しい目で子供達をみていた。

「……………」

「先輩？どうかしたんですか？」

「あ？あーいや何でもない。」

むう、不覚にも少しみとれてしまった。

「潤君、みんな集まったよ。」

子供達が全員集まった事を確認した春奈が俺を呼びに来た。

「おお、今行く。んじゃ行くか、雪華。」

「はい！張り切っちゃいましょう！」

さて、一仕事しに行くでしょう。

……………。

「皆さん、こんにちはー！」

「「「こんにちはー！！！」」「」」

いつもより少し大きくした雪華の声に子供達はその三倍くらいの大  
きさの声で答えた。

「今から今日一日皆さんと遊んでくれる人達を紹介します。まずは  
春奈お姉ちゃんを紹介します。」

「ええ！？わ、私から！？えーっと、は、初めまして、久代春奈で  
す。今日一日ですが、早く皆さんとお友達になりたいので遠慮

なく話しかけて下さい。」

「「「はい！！」」」

流石春奈、早速子供達のハートをがっちりキャッチしたようだ。

「では、次は桜お姉ちゃんを紹介します。」

「はい！」

桜が、つかこいつの脳年齢子供達と同じくらいじゃねえか？

「みんなー！こんにちはー！」

「「「こんにちはー！！」」」

あーうるせー。耳痛くなりそー。

「八重桜です！今日は一緒に楽しくあそびましょー！」

「「「はい！！」」」

やっぱ同レベルだよな、こいつら・・・。

「では、次は信ーお兄ちゃんを紹介します。」

「ふっ、任せろ。」

おいおい、俺最後だよ。つか信はまた変な事言い出すんじゃないのか？

「全員起立！」

バツと若干ズレはあったが全員起立した。

「いいか！今から貴様等はこの篠原信一大佐の部下だ！反論は許さん！何か質問はあるか？」

「「「ありません！サー！！！！」」」

「まてまてまてまて！！！！」

「つか園児だからってノリよすぎだろ！？」

「冗談だ、本気にするな。」

「紛らわしい真似すんな！！」

こいつは毎度毎度毎度変な真似しやがって！！

「・・・で、では最後に潤お兄ちゃんを紹介します。」

「・・・はいよ。」

といっても、何を喋ったらいいのか分からん。

「えー森神潤です。今日一日よろしくどうぞー。」

「「「「「「「「「「」」」」」」」

ええ！？無反応！？

「潤君・・・そんな自己紹介ないと思うよ。」

「パパあ、もう少しちゃんとしてようお。」

「はあ、情けない。」

な、何故だ！？無難な自己紹介だったと思うぞ！！

「つか信にだけは言われたくねえ！！」

「じゃあ、皆さん、外に行きましょうー。」

「「「はい！！」」」

「ち、ちよつと待て、雪華！？え？スルー！？スルーすんなよ！！  
雪華！おいー！」

雪華は全員つれて（俺だけ置いて）外に出て行ってしまった。

ひ、酷すぎる……。

「はあ、前途多難……。」

何とか持ち直して俺はみんなを追いかけた。

（第三十話へ続く）

## 主要人物途中プロフィール（前書き）

ちよいと暇つぶし程度に書いてみました。身長とか髪の設定がある  
とイメージしやすいかと・・・。

## 主要人物途中プロフィール

もりがみじゅん  
森神潤

只今、春奈と同棲中。美咲の死から完全には立ち直ってはいない模様。

春奈、雪華、美姫、（潤は気付いていないが綾乃）、からアプローチを受けながらも未だに答えを出せずにいる優柔不断野郎。

くしろはるな  
久代春奈

身長：157cm

体重：？

髪：色は薄い茶髪。肩にかかるぐらいのセミロング。

潤の家に居候中。最初の頃は天然ボケボケだったが最近は嫉妬深く潤が他の女の子と仲良くしていると凶暴化。

遺産目当ての叔母に引き取られていたが、本人曰く、捨てられたの事。

美咲の事をしってから潤に露骨にベタベタするのを控えている。

きりおかあやの  
霧丘綾乃

身長：162cm

体重：？

髪：色は薄い赤、ショートカットにしている。

潤の中等部からの友人。照れ隠しでよく潤を殴ったり物を投げたりしている。春奈の身の上話を聞いて応援したいと思いつつも自分を見て欲しいとも思ったりしてやきもきしている様子。

天神美姫 てんじんみひめ

身長：152cm

体重：？

髪：色は黒髪。腰まである長い髪をポニーテールにしている。

綾乃と同じく中等部時代からの潤の友人。

天神学園の学園長の孫という事が原因で誘拐されるという経験を持つ。その事で一緒にに捕まった潤以外の人間不信に陥ったが本人の努力と潤達の協力によって立ち直った。

水無瀬雪華 みなせゆきか

身長：155cm

体重：？

髪：色は水色、長い髪をツインテールにしている。

不良から助けてもらった事をきっかけに潤に脇目も振らずにまっしぐらの猪突猛進娘。

町のボランティアなどに参加しているお陰でジジババ達のアイドル的存在になっている。

八重桜 やえのさくら

身長：159cm

体重：？

髪：色は桜色、肩まである髪は少しくせがかかっている。

潤の元恋人、美咲にうりふたつだが中身は180違う。

元は美咲が飼っていた犬。突然、犬から人間になり、どうしてそうなったのかは未だに不明。

潤をパパと呼ぶ。





## 主要人物途中プロフィール（後書き）

ところで今新しく小説執筆中です。その前に連載終らせろよ！とか言われそうだけど、春の訪れに関係あるんでご容赦下さい。

『桜の木の贈り物』というタイトルで世界は春の訪れと同じでその中の登場人物、八重桜に関係がある物語です。

投稿したらは非に読んでやって下さい。

### 第三十話（前書き）

同時に『桜の木の贈り物』という小説を出しました。『春の訪れ』とのコラボ小説です。どうぞ読んでやって下さい。

### 第三十話

雪華の頼みで俺達は保育園のボランティアに来ていた。

が、

「くっ、何故だ？」

俺は一人孤独に鉄棒にぶら下がっていた。

他の奴らは、信でさえも子供達と遊んでいるというのに……。

「いかん、このままでは俺の威厳が失われてしまう。」

もともと威厳があるかどうか分からんが……。

「ん？あれは……。」

ブランコの所に俺と同じように孤独な女の子がいた。

「そっぴや、さっき雪華が言ってたっけな。」

『先輩、ここには親がいない孤児も数人います。その中でも人に全く関わろうとしない女の子がいるので、見かけたら話しかけてあげてください。』

俺はさっきの雪華の言葉を思い出していた。

「あの女の子がそうなのか・・・、よし！」

俺は鉄棒から降りてその女の子の所へ向かった。

俺は女の子の所まで来ると隣のブランコに腰掛けた。

「こんにちは。」

「・・・・・・。」

無表情＆無反応。

くっ、負けてたまるか！

「俺は森神潤って言うんだ、君は？」

「・・・・・・。」

ノーリアクション再び。

何も返してくれないと結構凹むわ・・・。

「なあ、一緒に遊ばないか？な？」

そう言っただけ女の子の手をとった時、

バシッと手を弾かれた。

「・・・・触らないで下さい。」

初めて聞いた言葉は静かな拒絶だった。

俺が保けている間に女の子は何処かへ行ってしまった。

「……………」

「逃げられたな。」

「のうわ!!?」

いつの間にやら隣に信がいた。

「いきなり出てくんない!」

「ふつ、これが性分なんでね。」

相変わらずそのすかした態度がきにくわん。

「しかし、たらしのお前でも今回はお手上げか?」

「誰がたらしだ!?!」

「違うのか!?!?」

「大袈裟に驚くな!!当たり前だ!!」

前もって言うておくが俺はたらしなどではない!

「でもま、今日の目標は決まったかな。」

「ほう、そうか。」

そこに突然信が持っている無線のような物から声が聞こえてきた。

「ザッ、大佐!敵が本部に接近中であります!」

「分かった、軍曹はそのまま応戦を続けろ!」

「アイアイサー!」

そのやりとりが終わってすぐに信は何処かに行ってしまった。

いったいお前らは誰と戦ってた？

「さて、こっちはこっちで戦争しますかね。」

今日の目標、あの女の子の笑顔を見ること。

。。。。。

さて、まずはどうするか。。。。。

あれ？そついえばあの子の名前って何ていうんだっけ？ちょっと雪華にでも聞いてきてみるか。

えーっと雪華はっと・・・あ、いた。

「おーい、雪華！」

「どうかしましたか？先輩」

雪華も少し疲れたみたいで木の木陰で休んでいる。

「さっき雪華が言ってたあの女の子の名前って何ていうんだ。」

「はっ、先輩もしかして私達だけじゃなくあんな小さな子までたぶらかそうなんて・・・」

「思っていないわ、アホ。」

バシッと雪華の頭にチョップを下す。

「むー、先輩！女の子にはもっと優しくしなきゃ駄目ですよー！」

「あーはいはい、であの子の名前は？」

「えつとですね・・・伊藤鈴ちゃんいとうりんです。」

「鈴・・・ね。分かった、トライしてくる。」

頑張って下さ〜いという言葉を背中に受けて俺はもう一度アタックを仕掛ける事にした。

鈴ちゃんは意外と簡単に見つかった。

見たところ保育園の裏側の木の下で雪華と同じように休んでいる。

さて、気付かれないようにそーっと、そーっと。

「・・・・・・・・。」

うわ！？目があつた！？

でも今回は逃げたりしないようだ。

内心ほっとして鈴ちゃんに近づいていった。

「・・・何か御用ですか？」

鈴ちゃんの側に立つとまたもや拒絶が含まれた冷たい声。

「はっ、先輩もしかして私達だけじゃなくあんな小さな子までたぶらかそうなんて・・・」

「思っ  
てないわ、アホ。」

バシッと雪華の頭にチョップを下す。

「むー、先輩！女の子にはもつと優しくしなきゃ駄目ですよ！」

「あーはいはい、であの子の名前は？」

「えつとですね・・・伊藤鈴ちゃんいとうりんです。」

「鈴・・・ね。分かった、トライしてくる。」

頑張つて下さーいという言葉を背中に受けて俺はもう一度アタックを仕掛ける事にした。

鈴ちゃんは意外と簡単に見つかった。

見たところ保育園の裏側の木の下で雪華と同じように休んでいる。

さて、気付かれないようにそーっと、そーっと。

「・・・・・・・・。」

うわ！？目があった！？

でも今回は逃げたりしないようだ。

内心ほっとして鈴ちゃんに近づいていった。

「・・・何か御用ですか？」

鈴ちゃんの側に立つとまたもや拒絶が含まれた冷たい声を出された。

「いや、別に用ってほどの事でもないけど・・・。」

「なら来ないで下さい。鬱陶しいです。」



ここまで露骨に言われると結構凹むなあ・・・。

だが、俺はそんな言葉にも負けずに鈴ちゃんの隣に座った。

「聞こえなかったんですか？」

「なあ、何でいつも一人でいるんだ？」

俺は鈴ちゃんの言葉を無視して質問をする。

「・・・一人が好きだからです。」

ふむ、どうやら質問に答える気はあるようだ。

「友達とかいないのか？」

「そんなのいません。」

友達がいらないなんて随分寂しい気がするが。

「寂しくないか？」

俺は思ったことをそのまま口にした。

「・・・貴方には関係のない事です。」

「関係ないなんて事はない。俺は今鈴ちゃんと友達になろうと奮闘中だ。だから鈴ちゃんに寂しい思いさせたくないな。」

「・・・・・・・・。」

鈴ちゃんは呆気にとられた顔で俺を見ていた。

「そんなの・・・知らない!!！」

「あ・・・」

悲痛な表情をして鈴ちゃんは俺から離れていってしまった。

ガサツ

「追わなくていいのか？」

「うわぁ!!?」

突然また信が、今度は木の中から顔だけ出していた。

「忍者か!?!お前は!!?」

「今は単独行動中だ。それよりあの少女、園から出ていってしまうぞ。」

「うわ、本当だ。」

信に言われて見てみると鈴ちゃんが園から出ていこうとしていた。

「信、俺ちよつと追いかけるからみんなに伝えといてくれ。」

「ふむ、了解した。では、俺は任務に戻る。」

そう言つて信は木の中に戻つていった。

・・・いつたい何の任務だよ。

「それより早く追いかけないと。」

うお!?!もうあんな所まで行つてる!?

俺は急いで鈴ちゃんを追いかけた。

.....

「やべえ、見失っちゃった・・・。」

いったい何処まで行っちゃったんだ？

キョロキョロと周りを見渡してみると、

「あ、いた！」

「っ！？」

鈴ちゃんも俺に気づいて驚いている。

「おい、鈴ちゃんっておい！？何で逃げんだよ！？」

俺と目があつた瞬間鈴ちゃんは踵を返して逃げ出した。

「ち、ちよつと！！鈴ちゃ・・・鈴！！どうして逃げんだよ！？」

「っ、ついてこないで！！」

いちいちちゃん付けするのが煩わしくなったのでそのまま呼ぶと、  
鈴も敬語を使わないで人目も憚らず叫ぶ。

「っ！！」

鈴は中々すばしっこく、狭い路地裏に入っっていつてしまった。

俺も続いて路地裏に入る。

全力で走っているのにあまり差が埋まらない。

「はぁ、はぁ。」

しばらくしてようやく鈴の体力が切れてきたようだ。

よし、このまま行けば・・・

そう思った矢先、少し行つた所の建物の看板がグラグラ揺れているのが見えた。

おいおい、このまま行つたら危ないんじゃないのか・・・

「はぁ・・・おい・・・はぁ、はぁ・・・り・・・ん・・・」

駄目だ、気付いてないうえに疲れて声も上手く出ない。

バキッ

そんな音が聞こえてきて丁度タイミング良くさつき見えた看板が鈴の上から落ちてきた。

「はぁ・・・え?」

「くっ!!」

やっと鈴が看板に気付いたようだ。  
遅いつちゅーに・・・

「キヤアアアア!!」

「っ!!!!」

間に合ったと同時に俺は鈴をドンツと突き飛ばした。

ああ、良かった・・・・・・・・今度は・・・・・・・・間に合った・・・・・・・・

次の瞬間、俺の目の前は真っ暗になった・・・・・・・・

（第三十一話へ続く）

### 第三十一話（前書き）

結構もう少しでクライマックスが見えてくるかもしれませんが、でも頑張って良い作品と思わせながら終わらせたいと思う、今日この頃でした。

### 第三十一話

ここは・・・どこだ・・・？

俺は確か鈴をかばって看板の下敷きになって・・・

それから覚えていない。

俺って怪我する事多いな。

なんてのほほんと思っていたらまた眠たくなってきた。

「お・・・い・・・ん・・・」

さて、もう一眠りするかな、と思っていたら何処からか声が聞こえてきた。

「・・・にい・・・ん!!」

「誰だ？」

そつえばさつきから左手が誰かに握られている気がする。

春奈かな？そつえば前も同じような事があったなあ。

「お兄ちゃん!!」

はて？俺には妹などいないはずだが・・・

俺をお兄ちゃんと呼ぶこの声はいったい誰？

「お兄ちゃん！！起きてよ！！」

誰だろうと思つて目を少しずつ開けていくと・・・

「り・・・ん・・・？」

「お兄ちゃん！？大丈夫！？」

ええええ！！！？あーた本当に鈴ですか！？

全然キヤラ違いますがな・・・

「う、うわあああん！！」

「な、何だ？どうしたというのだ！？」

鈴はいきなり俺に抱きついて泣きだしてしまった。

ガチャ

「潤君！！？良かったあ・・・う・・・」

そう言う春奈も既に涙ぐんでいる。

「ああああ！？お前まで泣き出すなよ！！」

「だって・・・だって・・・安心したら・・・ひぐっ・・・うわあああ  
あん！！」

「ふええええん！！！！」

「ああ！？何なんだよお前はあ！？」  
「？」



こ、こんな状況誰かに見られたら・・・

ガチャ

「あ！？」

「あ・・・」

「ん・・・？」

「え・・・」

「お・・・？」

そこにいたのは桜、雪華、綾乃、美姫がそれぞれポカーンとした顔で突っ立っていた。

・・・終わった・・・

「あーーーー！！！！パパが女の子二人泣かせてるーーーー！！！！」

「潤！？あんたまた何やってんのよー！！」

「うわー、森神君女泣かせだねー、何か許せない。」

「潤先輩、春奈先輩だけじゃなく、鈴ちゃんまで・・・てゆーか本当に鈴ちゃん？」

その先は言わずもがな、いつものごとくボコボコにされる俺だった。

・・・。

一通り、一悶着が終わった後、雪華と春奈はまだ泣き止まない鈴を慰めていた。

「ひつく・・・ひつく・・・ぐす・・・ふええ・・・」

「ほらあ、鈴ちゃん、二人とも無事だったんだから泣き止も、ね？」  
「そうですよあ、先輩頑丈なんですからあ。」

酷いな、雪華・・・。

「でも、あんたよく怪我するわよねえ。」

「そうだよ、私も心配ばかりしてるんだよ？」

「うう・・・すみません・・・」

確かに美姫の時といい今といい病院にでも好かれてるんだろうか？

流石にそれは勘弁してもらいたい。

「それにしても・・・。」

俺はそつと、まだぐすぐすいつてる鈴を見た。

「・・・ぐすつ・・・」

「りーん！そろそろ泣き止めよ。」

鈴がまた俺の方に寄って来て、無言で抱きつく。

「おっ？」

「・・・ぐす・・・ごめんなさい・・・」

「何が？」

いや、本気で鈴の言ってる意味が分からん。

「・・・ひつく・・・私が・・・逃げたりしたから・・・お兄ち

やんに・・・怪我させちゃって・・・」  
「それはもう気にすんな、無事だったんだから。」  
「・・・うん・・・」

抱きついたまま、鈴は動かなくなった。どうやら眠ってしまったようだ。

「よっぽど疲れてたみたいだな。」

優しく鈴の頭を撫でていると、何だか視線を感じる。

「潤君・・・ロリコンだったんだ・・・」

「あんたのストライクゾーンどんだけ広いのよ。」

「え？え？森神君・・・変態さんだったの・・・？」

「そんな・・・先輩・・・私が言った通りに・・・毒牙一発・・・」

「

「パパ、鬼畜ー。」

「ふっ、この節操無しが。」

「待て待て待て待て！！お前ら言いたい放題言い過ぎだ！！特に信！お前いつの間に来た！？」

何故かいつの間にもやら気付かないうちに信が病室にいた。

そっぴいえばもう学園が終わる時間帯だ。そんなに眠っていたのか。

「ふっ、ついさっきだ。それよりも、明日、また転校生が来る。」

「またあ？いくらなんでも多くないか？」

春奈と桜に続いてこれで三人目だ。流石に不自然に思えてくる。

「また先輩関係なんですか？」

「え？潤君、まだそんな人いるの？」

ジト目で雪華が睨み、春奈がそれを間に受けている。

俺そんなに節操無しに見えるのか？

「いや、それは無い。どうやら牧野まきのの従姉妹らしいな。」

「あ、牧野君の従姉妹さんなんだ・・・（ほっ）」

牧野というのは同じクラスの牧野煉まきのれんの事で、三年になってから何かとつるむようになった。

ただ、煉は自分の事はあまり話しながらないんだよなあ。もっと俺達を信用してくれてもいいと思うんだが・・・。

「それで、明日牧野がその従姉妹をここに連れてきてくれるそうだ。」

「ほっ、明日がなかなか楽しみなってきたな。」

何にしても、仲間が増えるのは良いことだ。

「あ、そろそろ面会時間が終わりそうだね・・・。」

時計を見た春奈が残念そうに言う。

そうか、もう面会が終わる時間なのか。

「じゃ、あたし達はそろそろ帰るわ。」

「じゃあね、森神君、早く良くなつてね。」

「おう、またな。」

別れの句を告げると綾乃と美姫は先に帰っていった。

「潤君、私着替とか明日持つてくるね。」

「パパ、お大事にー、明日も来るね!」

春奈と桜も帰り、雪華は鈴を起こそうとした。

「鈴ちゃん、起きてください!もう帰りますよ。」

「・・・んにゅ・・・やあ・・・」

寝ぼけながらも鈴は雪華の手を払い除ける。

「鈴、我が俤言わないで、明日も来ていいから今日は大人しく帰るな。」

「・・・うにゅ・・・お兄ちゃんがそう言うなら・・・」

目を擦りながら鈴は雪華と一緒に帰っていった。

「で、信、お前もさつさと・・・って、もういねえし!!?」

相変わらず毎度の如く、いつの間にか現れ、いつの間にか消える、奇想天外野郎だな。

「・・・まあいいか。さて、俺も何だか眠くなってきたな・・・」

そして、俺も喋り疲れたのかだんだん眠くなって、意識を手放した。

・・・。

そして、次の日、朝起きた時にはもう十時。だが、何故か病室には春奈と桜がいた。

「何故お前らがいる・・・」

「だって妻だもん」

「あー！ずるい！ボクもパパの妻やりたい！」

理由にはなつてねえし、妻じゃねえし、論点ずれてるし。

俺は半ば呆れたがどうやらもう梃子でも動きそうにないのでそこはもういい。

「そういえば、俺っていつ退院出来るんだろ？」

「あ、それは昨日私が聞いた。あと二、三日様子見るんだって。」

「

あと二、三日か・・・。それまでここで何してつかない。

その時コンコンという音が聞こえてきた。

「あ、はい。」

俺の代わりに春奈が返事をする。鈴が入ってきた。

「お兄ちゃん、また来たよ」

「鈴！？お前、学校とかあんじゃねえのか？」

鈴は春奈と桜に目もくれないでニコニコ顔でベッドの脇まで来る。

「・・・エヘッ」

「エヘッ、じゃねー！サボったのか!？」

ブリッコの如くエヘッ　なんて言う鈴にツッコミを入れる。

なんてやったら目に涙を溜めて今にも泣き出しそうになる。

「・・・お兄ちゃんが・・・怪我したの・・・私のせいだから・・・  
ひつく・・・それとも・・・迷惑だった・・・?」

うつ、そんな目で見られると強くは言えない・・・

「い、いや、そんな事はないが・・・」

「嬉しい！だからお兄ちゃん大好き!」

そう言つて、鈴が抱きついてくる。

うつ、二人の視線が痛いツス・・・

「ねえ、鈴ちゃん。園長さんにはちゃんと説つたの?」

春奈が微妙にお姉さんぶつて鈴に優しく言つ。

だが・・・

「・・・言いましたけど・・・てゆーかあなた誰ですか?お兄ち  
やんの何なんですか?」

「なっ!？」

「げっ!？」

俺の時とは百八十度違う態度に春奈はかなり面食らっている。

こわっ！？春奈こわっ・・・子供相手にどす黒いオーラ出して重圧かけてるし。

鈴はそしらぬ顔でそっぱを向いてるし。

「春ちゃん、こわい・・・パパあ、何とかして」

すまん、桜。無理。

だが、そんな桜の発言にも敏感に鈴が反応した。

「パパ？どう見ても私と同年か下にしか見えないんですけど・・・」

「

桜を見てふん、と鼻で笑う。

うわ、爆弾投下・・・

「かつちーん。それってボクが子供っぽいて事ー！！？」

桜にしては珍しく激怒。おー犬みたいに唸ってるよ。元は犬だけど・・・

「とりあえず落ち着け、お前ら。鈴、ちゃんと紹介してやるからそこ座れ。」

俺は予め病室にあった椅子を指差す。



「・・・お兄ちゃんがそう言うなら。」

しぶしぶながら鈴は椅子に座る。

春奈と桜も大分落ち着いてきたみたいだ。

「まず、こっちが久代春奈。俺のばあちゃんの田舎からこっちに越してきたんだけど・・・」

「去年ね、色々あつて潤君に助けてもらったの。その時から私は潤君のフィアンセになったの」

「ふ、フィアンセー!!!?」

省きすぎだし、フィアンセじゃねえ、見ろ鈴が真に受けて驚愕してんじゃねえか。

「むー、ママ（美咲）かボク以外を選ぶなんて納得いかない。」

また桜は妙な事を言い出しやがるし。

「・・・去年色々あったのは確かだがフィアンセじゃない。」

「もお、同棲までしてるんだから照れなくていいのに。」

「ど、同棲ー!!!?」

またしても鈴の顔が驚愕に染まる。

もうめんどいのでこれ以上何も言わない事にした。

「で、こっちが八重桜。こいつも転校生だ。」

「・・・・・・・・。」

桜は外を見たまま何も言わない。さっきの事、まだ引きずってるのか？

俺はため息をついて、三人にまとめて言う。

「お前ら、頼むからもっと仲良くしてくれ。」

「……。」「」

誰も何も言わずにただ時だけが過ぎていく。

そんな時、ぐうー、とどこからともなく腹がなる音がした。

「……。」「」

誰も何も言わない。

「すみません、俺です。」

こんな空気に耐えられない俺は正直に白状した。

「……ぶっ」

そんな風に言う俺がおかしかったのか春奈が吹き出した。

「あはは、もうやだ潤君。」

「お兄ちゃん、空気読んでない。」

「あははは。」

災い転じて福となすって感じてようやく三人共笑ってくれた。

「もうそろそろお昼だね。鈴ちゃんはどうする？」

「購買で何か買ってここで食べます。」

春奈の問いに屈託の無い笑顔で答える鈴。

「じゃあ一緒に行こ、桜ちゃんは何がいい。」

「んー春ちゃんに任せる。」

「ん、分かった。」

そう言つて春奈と鈴は病室から出ていった。

うーん、端から見ると仲良し姉妹のようだ。

「嬉しそうだね、パパ。」

「ああ、一時はどうなるかと思つたけどな。」

桜も妹が出来た気分なのか随分嬉しそうだ。

「これで、鈴も寂しくなくなるだろう。」

大切な人がいなくなるのはすごく寂しい事だ。

美咲がいなくなった時は自暴自棄になったりもしたが、信や綾乃達  
がいたから今の俺がある。

鈴にはそういった人がいなかったのだろう。園長先生は鈴につきっ  
きりつてわけにはいかなかったんだろーし……

これからは俺達があいつの支えになってやろー。

そう俺は固く決意した。

.....。

すっかり仲良くなった鈴と春奈と桜がいろんな話をしたり、ゲームをしたりしているとあっという間に時間は過ぎていった。

時刻が四時くらいになると突然病室のドアが開かれた。

「先輩ー！寂しかったですかー！？」

雪華がノックも無しに飛び込んできた。

「おー来たのか雪華。」

飛び込んでくる勢いでタツクル、もとい抱きついてくる。

「ち、ちよつと雪華ちゃん！？潤君、病人なんだから抱きついちゃ駄目ー！！」

いつものごとく、抱きついた雪華を春奈が強引にひっぺかず。

「来てあげたわよー。」

「こんにちは。」

雪華に続いて綾乃と美姫も病室に入ってくる。

「ふつ、今日は特別ゲストを連れてきた。」

次に入ってきた信が何故か得意気に前口上を述べている。

そして最後に昨日話した牧野煉が入ってきた。

「意外と元気そうだな、潤。」

「おお！煉も来てくれたのか！」

一気に知らない人が増えたからか鈴は俺にしがみついていた。

「あれ？その女の子は？」

「ああ、こいつは……」

かくかくしかじか。

俺は煉に事のいきさつをかいつまんで話した。

「……というわけなんだ。」

「なるほど。ところで何でその子は潤にくっついたまま俺を睨んでるんだ？」

「……（じー）」

煉に言われて、鈴を見ると何ともかわいらしい顔で煉を睨んでいる。

まあ最初会ったときの見るもの全て敵、な態度よりはマシだけど。

「鈴は人見知りが激しいんだ。勘弁してやってくれ。ところで、さつきからお前の後ろに隠れているその子は？」

おそらくこの子が新しい転校生で煉の従姉妹なんだろう。

「ん？」

この子も結構人見知りが激しいのだろうか。

ずっと煉の服の裾を握っていた。

「ああ、こいつは俺の従姉妹で春日桜華かすがおづかって言うんだ。」

うーむ、かなりの美人だ。煉もなかなかやるではないか。

「ご主人様とその使用人な関係なんだって。」

なぬ！？煉に従姉妹をそんな風にする趣味があつたなんて……。新しい発見だ。

「んなわけない。桜華、お前も挨拶、挨拶。」

なんだ違うのか……。面白くない。

「あ、は、はい。あの初めまして、春日桜華といいま……。！？」  
「！？」

なんだ？桜華さんが桜を見てなんだか驚いている。

桜も同じように驚いているみたいだ。

「どした桜。知り合いか？」

「え？あ、ううん、そうじゃないけど……。」

桜からはよくわからん返事しか返ってこなかった。

「桜華もどうしたんだ？」

「い、いえ、何でもありません。煉様、後ほど少しお話がありますので・・・」

煉も桜華さんに尋ねるがこちらもよくわからん返事しか返ってこない。

「まあ、別に構わんが・・・」

桜華さんはそれきりあまり会話の中に入ってこなかった。

桜もいつもより歯切れが悪い。

俺達はそんな二人を不審に思いながらも、病院の鬼婦長に怒られるまで騒いだ。

・・・。

信や煉達が帰った後、春奈と桜だけ病室に残った。

鈴は私も残る！ってただこねてたけど雪華が信と共謀して眠らせ、無事に連れて帰った。

つか信はどこで眠らせる薬なんて手に入れてきたんだか。

「いやー、何でも頼んでみるものだね。」

「さすが春ちゃん、やるねえ！」

「・・・・・・・・。」

今、病室には女の子二人くらいなら軽く寝られるくらいの簡易ベッドが一つ置かれていた。

何故こうなったかというと、春奈は一人で家にいるのは寂しいらしくダメ元で婦長に泊まらせてくれないかと頼んだところ、二つ返事で承諾した。

あの婦長、何故か春奈には妙に甘い。

「パパとお泊まり会ー!!」

桜はというと実は無許可、春奈の話を聞いた桜がだだをこね始めて春奈はしぶしぶ桜と一緒に寝る事になった。

もちろん綾乃達はこの事は知らない。知られたら俺が被害を被る。

「さてと、もう寝るか。」

しばらく二人と話し込んでいたら睡魔が襲ってきた。

「うん、そうだね、ふあああ、私も眠い・・・」

「・・・・・・（カクン）」

桜も既に船をこいでいる。

「それじゃあ寝るか、春奈、桜、お休み。」

「・・・うん・・・おやすみなさい・・・」

春奈は布団を被るとすぐ寝息が聞こえてきた。

桜に至っては既に寝ているようだ。



俺もベッドに横になり、目を瞑った。

が……

「……眠れん……」

何故か眠気はあるのに眠れない。

ごろごろて寝返りを何度もうつ。

何分そうしていただろうか、突然俺に声かけられた。

「……パパ……寝ちゃった……」

桜が小声で俺に囁いてくる。

「……どうした……」

てつきり眠ったもんだと思っていた。

「……あのね……変なこと聞かかもしれないけど……今でもママの事……好き？」

ママ、つまりは美咲の事。

美咲と同じ顔をした桜がそう尋ねてくる。

唐突な質問だったが俺は真面目に答える。

「……ああ、好きだよ。」

「・・・・・・・・そつか・・・・・・・・」

この事にどんな意味があつたのか俺は知らない。

だが、桜は桜なりに思うところがあつたのだろう。

それきり桜は黙りこくつてしまう。

今度こそ寝たか、と思つたがまた桜が小声で囁く。

「・・・・・・・・ねえ、パパ・・・・・・・・」

「・・・・・・・・なんだ・・・・・・・・？」

桜のその声はすごく真剣でどこか不安そうで・・・・悲しい感じがした。

「・・・・・・・・ずっと・・・・・・・・ボクの事・・・・・・・・覚えていてね・・・・・・・・」

「・・・・・・・・桜？それってどういう・・・・・・・・」  
「すうー、すうー。」

どうやら今度こそ桜は眠ってしまったようだ。

今の言葉の意味をいくら考えても全くわからない。

そんな事を考えていると瞼が重くなっていき、俺は自然に意識を手放した。

（第三十二話へ続く）

### 第三十二話（前書き）

個別ルートでも作ろうかなと思う今日この頃。

どうでしょう、評価でも感想でもいいんで意見を聞かせてもらえる  
と嬉しいツス。（出来れば評価で・・・）

意見がない場合はメインヒロインな春奈で春の訪れは終わる事になります。

長くなりそうなのであとがきに続きます。

## 第三十二話

「森神潤！ふつかーっ！！」

病院生活から数日、俺は無事に退院した。

何だか久しぶりな感じがする教室で俺は歡喜の雄叫びを挙げた。

「チツ・・・」

「うおい！？誰だ今舌打ちした奴は！！？」

教室にいるクラスメート（男子群）は全く歡迎ムードじゃない。

寧ろ帰って来ないで死ねばいいのにこのハーレム野郎な空氣がひしひしと伝わってくる。

「潤うるさい。恥ずかしいから机の上に立つのやめて。」

綾乃が呆れた顔で俺を見上げてくる。

「森神君、今日はやけにテンション高いね。」

「昨日からずっとこうなんだよー。」

美姫と話している春奈も呆れて、ため息をついた。

「なんだよー、いいじゃねえか。久しぶりの学校なんだから、なあ桜！」

「・・・・・・・・。」

こういう時はノリがいい桜に話を振ってみるが反応が無い。

「桜？」

「え？あつ・・・と、何だっけ？」

おかしい。桜のいつもの無駄な元気が今は無い。

「どうした？桜。どうか調子悪いのか？」

「う、ううん！大丈夫だよ、パパ！」

そう言っただけはいつもの笑顔を俺に向ける。

だが、俺にはその笑顔がどことなく無理してるような気がする。

「そっか、調子悪いなら無理はするなよ。」

「うん、ありがと。」

桜はそう言い、また窓の外を向いて黙りこんでしまった。

「・・・桜ちゃん、どうかしたのかな？」

桜に聞こえないくらいの声量で春奈が話しかけてきた。

「分からん、とりあえず今は様子を見よう。」

本当に調子が悪そうに感じたら無理矢理にでも保険室に連れていく。

そう思っていると、教室に先生が入ってきて、俺は急いで授業の準備をした。

・・・。

授業が終わった放課後、俺は桜の様子が気になったので桜に話しかけた。

「桜。」

「・・・。」

駄目だ、また考え込みモードに入ってるよ・・・。

「桜！」

「うにゃは!!?」

いやまた随分なりアクションの仕方だな。少し強めに言っただけなのに。

桜はしばらく驚いて拳動不信になっていたが俺の顔を見るといつもの桜に戻っていた。

「はあ、なんだあパパかあ。耳元でいきなり叫ばないですよ。」

「お前を呼んでも返事しないからだろうが。」

「むう・・・。」

膨れっ顔で俺を睨む桜。とりあえず俺はそれを黙殺する。

・・・こいつが何を悩んでいるのか正直知りたい。力になってやりたい。

だが、無理矢理聞き出す事は流石に出来ない。桜が本当に俺の事を信用してくれたるならいずれ話してくれるだろう。

「よし、桜！今から二人で遊びに行くぞ。」

「え？」

桜はよく分かってないような顔をして俺を見上げてくる。

何とかして桜を元気付けてやりたい一心だった。

幸い春奈は夕飯の買い物で先に帰ったから妙なアクションを起こされる心配はない。

「ほら！早く行くぞ！」

「あ！？パパ、ちよつと、まっ・・・」

俺は有無を言わず強引に桜を引っ張って行つた。

・・・。

「さて、まずはどこから行くか・・・」

「もー、パパ強引過ぎるよぉ・・・しょうがないんだから・・・」

「

桜はいきなり連れ出された事に最初は少々不満だったが、しばらく経つと随分とご機嫌になっていた。

「うん・・・やっぱ桜は笑顔じゃないと・・・」

「ん？パパ、何か言つた？」

「いんや何も。よし、最初はゲーセン行くか。」  
「うん！」

とりあえず手頃なところでゲーセンに入った。

ここにはしばらく来ていなかったため随分と内装が変わっていた。

「桜。何かやりたいのあるか？」

「うーんと・・・うーんと・・・あれ！」

桜が指差したのは一台のクレーンゲームだった。

その中に入っていた景品は犬のぬいぐるみだった。

心なしか犬だった頃の桜に毛の色や見た目がよく似ていた。

「お前にこんなの取れるのか？」

「む。今ボクを馬鹿にしたね？絶対見返してやるんだから！」

桜は意気揚々と百円玉を入れてゲームスタート。

ウィーンと狙いを定めてぬいぐるみが取れそうな位置へ移動させる。

「よし、ここ！いっけえ！！」

位置を決めてクレーンがだんだん下がってぬいぐるみを掴んだ。

だが・・・



「ああ!!?」

掴み所が悪かったのか少し位置をずらすだけで終わった。

「あうう・・・しょつく・・・」

「ふっふっふっ、駄目だなあ桜は。ちよつと貸してみ。」

今度は俺が挑戦することになった。

「こついつのはぬいぐるみ自体じゃなくて頭の輪っかを狙うんだ。」

俺はぬいぐるみの頭の輪っかを狙ってクレーンを下げていく。

上手く吸い込まれるように輪っかにクレーンを引っかけて、そのまま危なげなくぬいぐるみを穴に落とした。

「ほいゲット。」

「わーーーー!!! パパすごい!!!」

桜は尊敬の眼差しで俺を見ている。

ふっふっ、たまにはこついうのも悪くない。

「はいこれ、やるよ。」

「え?」

俺は取ったぬいぐるみを桜に手渡した。もともと桜に渡すつもりだったし。

もらった桜はキョトンとした顔をしている。

「・・・いいの？」

「ああ、最初からそういうつもりだったから。」

桜はぬいぐるみを本当に嬉しそうに包み込むように抱きしめる。

「・・・ありがとう・・・パパ・・・」

やはりいつもとは反応が違う。いつもは体で喜びを表現するのに、今はどこかその笑顔が憂いを帯びている気がする。

「・・・一応気にはなるが触れないでおこう。俺の取り越し苦労かもしれないし。」

「じゃ、とりあえずどっかで休憩するか。」

「うん。」

俺達は休憩場所を探すために一旦ゲーセンを出た。

・・・。

それからは、休憩場所を探して歩いていると雰囲気の良い喫茶店を見つけた。

「ふー、やっと腰を降ろせる。」

俺は席に案内されると直ぐ様座って一息ついた。

桜は俺があげたぬいぐるみを大事そうに抱えている。

「そんなに気に入ったか？そのぬいぐるみ。」

「うん！パパからの初めてのプレゼントだもん。」

桜は本当に嬉しそうに笑う。

まあ、そんなに喜んでくれるとあげたかいがあるもんだ。

「パパ、一休みしたら最後に行きたいところがあるんだけど・・・」

「

「・・・ああ、いいぞ。」

その時、桜の表情は笑っていたが目だけは真剣だった。

「じゃあ、ちゅうもん！！デラックスジャンボーチゴパフェ！！」

「はい、デラックスジャンボーチゴパフェがお一つ。」

「おい！？何かそれ異様に高くないか！？」

「一つで二千円するとか高すぎだろ！！？学生には厳し過ぎる！！つかウエイターいつからそこにいた！？」

そんなささやかな俺の抗議は受け流され、デザートごときに二千円も取られた。

・・・酷すぎる・・・悲しすぎる・・・

俺は随分減った財布の中身を見てため息をつきながら喫茶店を出た。

・・・。

喫茶店を出てからは上機嫌な桜だったが、歩いていくうちに口数も減っていった。

俺はそんな桜の後ろを黙ってついていくだけ。

やがて、一本の桜の木がある場所で桜は止まった。桜の木の横には穏やかに川が流れていく。ここは……

「懐かしいよね……ここでボクはパパに助けられたんだ……」

この川に犬だった頃の桜が流されていて、それを俺が助けたんだ。

しかし、何故今になってここへ……

「思えば、ボクがこの川に流された事とこの桜の木がここにある事、そしてボクとパパが会うのは必然だったんじゃないかって思うよ。」

振り向いた桜は穏やかな微笑を浮かべていたが、俺の目にはその姿が酷く儚げに見えた。

「桜、お前いつたいどうしたんだよ……」

そのままでしたら桜が消えてしまいそうな気がして俺は呼びかけた。

だが桜は桜は微笑を浮かべたまま視線を俺から桜の木に移す。

「パパ、ボクね、ちょっと大切な用事ができて少しの間いなくなるけど心配しないでね。」

「えっ!？」

桜の突然の発言に俺は困惑した。

色々聞きたい事があるがまず大切な事を一つ質問する。

「・・・少しの間ってどのくらいなんだ？」

桜は振り返らず抑揚のない声で言う。

「わかんない。長いかもしれないし、短いかもしれない。」

明確な日数ではなく、最後まで桜は曖昧だった。

何を聞いても詳しい事は教えてくれない。そんなんで心配するなと  
いうのは無理な話だ。

「・・・分かった、もう何も言わない。でも二つほど俺と約束して  
くれ。」

「・・・何？」

桜は相変わらず背を向けたままだ。

二人の上から桜の花びらが舞い落ちる。

「まず一つ目、帰ってきたらちゃんと理由を言う事。」  
「・・・うん、分かった。」

「そして、二つ目・・・」

俺はゆっくり桜に近づいて行って、その頭を優しく撫でる。

「絶対、帰ってこい。そのまま帰って来なかった許さない。」  
「っ・・・」

桜の体がフルフルと震え始める。

「お前はもう俺の家族なんだからな。」  
「・・・つく・・・ひつく・・・う・・・ん・・・約束・・・する・・・」

嗚咽混じりに桜は振り向き、ギュッと俺の服を掴みしがみついてくる。

俺は桜が落ち着くまで頭を撫で続けていた。

・・・。

嗚咽も収まり、桜も大分落ち着いてきたようだ。

いつの間にか桜はしがみつから手を俺の背中にまわし抱きつきに変わっていた。

「なあ、桜。」

「んー、なーに？」

さつきとは百八十度違う桜の態度に内心ほっとする。

そして前々から思っていた事を桜に尋ねてみる。

「・・・あんまり胸ないな。」

「そうかなあ、それはきつとママのせいだよ。」

そう言われて、俺は昔のある朝の記憶を呼び起こす。

・・・ああ、確かにそんな大きくはなかったな。

「なあ、桜。」

「なーにー？」

時刻は夕方、あと少し経てばもう夜になろうとしていた。

だが、それ以上に厄介な問題が・・・

「いい加減離れないか、道行く人の視線が痛すぎる。」

「ボクはもつとこうしていたいんだけどねー、まあいいか。じゃあパパ、最後にちょっと下向いて。」

桜の言う通りに少し下を向いてみる。すると、桜の顔が近づいてきた。

「んふふー、充電完了」

一瞬だけ唇が重なり、夕日をバックに桜が離れる。

「はあ、何で俺の周りの女はいきなりの奴が多いのだろうか・・・」

「  
「パパが何もしてくれないから女の子が積極的になっちゃうんだよさ、帰る。」

「ああ。」

差し出された手を掴み、俺達はゆっくりと歩いていく。

明日からはしばらく一緒にいられない、そんな寂しさを埋めるかの



ように。

そして、次の日、家にも学園にも桜の姿はどこにもなかった・・・

(第三十三話へ続く)

### 第三十二話（後書き）

個人的には美姫と雪華エンドを作りたいのですが、これ以上小説が多くなると大変なので手持ちの小説がなくなったら書こうかなと思います。

もし、意見があつたら一番好きなヒロインを書いて出して下さい。  
多い順に書いていきます。

では、よろしくッス。

### 第三十三話（前書き）

後少ししたら物語分岐の為、一時完結します。その後に各ヒロインルートになります。

一応全員のルートは書きますが、各ヒロインの人気順に執筆していきます。

今のところ、最初に書くのは春奈か美姫のルートになりそうです。

### 第三十三話

桜がいなくなって早一週間。

一緒にいたのは短い時間だったが、俺の心の中はポツカリと穴が空いたようだった。

あの日、桜と別れた後家にいた春奈にこの事を告げると、何で、どうしてを連発。

そしてすぐに春奈は隣の家に突撃しようとしたが、まあ落ち着けとなだめた。

だが、春奈は聞く耳持たず俺の腕を取って特攻。

桜の家に行くと、出てきたのは美幸さんだった。

美幸さんはこうなる事が分かっていたようで、ただ黙って寂しそうに笑っただけで、桜には会わせてくれなかった。

俺と美幸さんに諭されて、春奈はしぶしぶ引き下がり、絶対帰って来てねと美幸さんに伝言を頼んだ。

そして、次の日、俺と春奈は桜が気になり学園へ行く前に桜の家に寄っていった。

ピンポン パンポン

八重家特有のチャイムが鳴り響く。この音は美咲がいた頃から変わらないな。

そんな事を思っていると、中から美幸さんが出てきた。

「あ・・・潤君、春奈ちゃん、おはよう。」

「おはようございます。あの・・・桜はまだいますか？」

俺がそう尋ねると、美幸さんは黙って首を横に振った。

「もう・・・行っちゃった・・・」

「そんな・・・」

それを聞いた春奈が悲しそうに呟く。

桜・・・もうどこかに行ってしまったのか・・・

それから俺達は美幸さんと一言、三言話して学園へ向かった。

・・・。

学園に着くと、俺はまず信と綾乃と美姫を集めた。

そして、春奈に話したように三人にも同じ事を話した。

「何よ、それ！？全然納得いかない！！あんだ、何で止めなかったのよ！！？」

「俺だつて止めたかった。でも、あんな思いつめた顔をされたら行くなとは言えなかったんだよ。」

綾乃は力なく椅子に座り、ガックリとうなだれる。

「・・・何よ・・・せめてあたし達に相談くらいして欲しかったのに・・・」

「・・・私達、そんなに頼りにならないのかなあ・・・」

美姫も目に涙を溜めて悲しそうに呟く。

「・・・でも・・・桜ちゃん、必ず帰ってくるって約束したんでしょ？」

それまで沈黙を保っていた春奈が力強く言う。

「ああ。」

「だったら、信じて待つしかないよ。桜ちゃんが帰ってきた時、誰も待ってなかったらきつと悲しむよ。」

「そうだな、その通りだ。俺達は信じて待つしかない。」

俺と春奈の言葉に二人も顔を上げる。

「うん、そうだよね。」

「全く、分かったわよ。でも、帰ってきたらお仕置きしてやるんだから。」

怒りながら言う綾乃の言葉に春奈は苦笑している。

「そういえば、煉と桜華さんも今日はいないのか？」

辺りを見回してみるが二人の姿は見受けられない。サボりか？

「さあ、風邪でもひいたのかな？」

・ 煉が風邪をひいて桜華さんがつきつきりで看病する。ありえるな・

「ま、しばらくすれば出てくるだろう。」

俺はあまり気にしない事にした。

それが、一週間前の出来事。

まだ少し違和感を感じるが皆極力普段通りにしている。

もう一つ気になるのが煉と桜華さんの事。

あれから、一度も学園で見ない。そんなにたちの悪い風邪だったのか？

もう少し長引いたららお見舞いにでも行こうという話になった。

そして、その日の放課後……

「綾乃の誕生日！？」

「うん、明後日だったでしょ？」



美姫の言葉に、そうだったあ・・・と俺は呟く。

綾乃の誕生日は四月中にある事をすっかり忘れていた。

ちなみに綾乃は部活に行つてて今はいない。

「綾ちゃん、明後日が誕生日なの？」

色々と詳細を知らない春奈が聞いてくる。

「ああ、そうだよ。毎回、毎回律儀にも美姫ん家で誕生会を開くんだ。」

へえー、と目を見開いて感心する春奈。その視線に美姫は照れ笑いしている。

「ふつ、今回も俺のすんばらしいプレゼントを用意している。」

毎度の事ながらこいつは分けの分からん物を贈り付けてくる。

確か俺の時はどっかの国の特産品の魔避け人形、美咲の時は両目きつちり揃っているダルマ、美姫の時はどこで使えばいいのかホワイトボードだった。

ちなみにホワイトボードは無駄に場所とるだけだったので学園に進呈したそうだ。

「お前、また妙なもんを持ってくんじゃねえだろうな？」

「あはは・・・」

美姫も思い出したのか苦笑いしている。

「妙なもんとは失礼な！？ちゃんと役に立つ物だったろう。しかし、今回ののはだな・・・」

「あーもついい、で美姫、今回も同じようにか？」

信のやけに長くくだらん話しに付き合うのはまっぴらだっつーの。

俺は美姫に明後日も美姫ん家で誕生会をするのかを尋ねた。

「うん、もう準備はほとんど出来てるから。後はプレゼントだけ。」

相変わらず美姫は手際がいい。きっと良い嫁さんになるな。

「や、やだ・・・森神君・・・」

おっとつい口に出してしまったようだ。美姫が赤くなって照れている。

しかし、問題なのが・・・

「プレゼント買ってねえ・・・」

まあ明日買いに行けば万事オッケーだな。

「あ、そういえば、雪華も誘っていいのか？」

「うん、それはもちろん。」

うん、美姫だったらそう言うと思ったぞ。

では、早速雪華に電話を掛ける。

トゥルル、ガチャ

『はいもしもし！潤先輩ですね！愛しの雪華ちゃんです！！』

「出るの早！？っーか愛しのは付けなくてよし。」

そう言つと、電話口から不満そうな声が聞こえてくる。

「えー、いいじゃないですかあ、もういい加減ラブラブウォンチュ  
ーくらい言ってくれてもいいじゃないですかー。」

「言わんつつうに！！」

っーか話しがどんどん脱線していつてるし……

「で、本題なんだけど、明後日綾乃の誕生会を美姫ん家でやるんだ  
けど……」

「行きます!!!」

「お前も、って返事はええよ!？」

電話でも雪華のテンションはやけに高い。いつでもどこでもハイテンションな雪華は素直に尊敬するわ……

「じゃあとりあえず詳しい事はまた後で連絡するわ。」  
「はい!わかりましたー!」

その言葉を最後に俺は電話を切る。

「行くってさ。」

「今年は賑やかになりそうだね。」

本当だよな。これで桜がいればもっと楽しく……いや、やめとこ。

それからしばらく俺達は明後日の事について話し合った。

そして、次の日……

「うーんー」

誤解するなよ？俺は今トイレにはいない。

俺は今、駅前のデパートで綾乃のプレゼントを模索していた。

春奈と美姫は女の子同士で買いに行き、俺は連れてってもらえなかった。

「何がいいのか、全く分からん。」

歩きながら唸っている姿は端から見れば変人に見られそうだった。

「っ！かあいつが欲しい物ってなんなんだろうか……」

服？いやサイズ知らん。本？あいつ読まなさそうだな。食い物？何か怒られそうな気がする。

俺は唸りながらデパート内を徘徊していると、服やブレスレットなんか売っている店の前に来ていた。

「……あ、これがいいか。」

ようやく思いついた。早速これ買って家でやんなきゃ。

俺はそこでいくつか物を買って、急いで家に帰った。

いよいよ誕生会当日。

今日は土曜日という事もあり、学園は休みだ。

俺と信は美姫邸の前まで来ていた。

「久しぶりだな、美姫ん家も。」

「ふっ、お嬢の家は相変わらずでかいな。」

そういえば、信が美姫をお嬢と言い出したのはこの家を見てからだ  
ったっけな。

昔、美姫の家に招待されてこの家を見た信が、

「ふむ、今から天神の事はお嬢と呼ぶ事にしよう。」と、突然言い  
出した。

それを聞いた美姫は普通に呼んでよ、と言っていたが結局変わる  
ことはなかった。

ピンポン

家のチャイムを鳴らすとインターホンから声が聞こえてきた。

「はい。どちら様でしょうか？」

「あ、森神と言いますが・・・」

「少々お待ちください。」

そう言われて少し待つと、入り口のでかい門が開いた。

「どうぞ、お入りください。」

俺と信は門から五分程歩いて、ようやく家の前に着いた。

門から家までに五分かかる事がもうすげえよ。

家の中に入ると相変わらず迷いそうな程広い道を俺と信は歩いていた。

はあ、長い……

そう思っていると、ようやく広間にたどり着いた。

「あ、先輩！」

中に入ると既に雪華が椅子に座ってクッキーを摘んでいた。

「お前よく美姫ん家が分かったな。」

てつきり綾乃を連れてくる春奈や美姫と来るかと思ってた。

「姫先輩から地図もらってたので、一人で来ました。」

でも、と雪華は付け加える。

「お家はすぐ分かったんですけど中に入ったら迷っちゃって、メイドさんにここまで連れてきてもらったんです。」

あはは、と苦笑する雪華。その気持は痛いほどよく分かる。俺も何度迷いそうになった事か……

「水無瀬よ、プレゼントは買ってきたか？」

「もちろんですよ！もう感謝感激雨あられです！」

信の確認に雪華は絶対の自信を持って答えた。

つか、あいつはそこまで狂喜乱舞はしないと思うが……

「そうだ、雪華。鈴は元気にしてるか？」

退院してからは全く会ってなかったからちよつと心配だ。



「元気ですよ。ちゃんとお姉さんやってます。ただ先輩に会えなくて不満漏らしてましたけど。」

そっか・・・もう一人じゃないんだ・・・

そう思っていると、ようやく主賓が到着したようだ。

「ただいまー！」

「お邪魔します。」

三人の声が聞こえてきて少し経った後、広間に春奈と美姫と綾乃が入ってきた。

「あ、もう全員揃った？」

「ああ、さっさと始めようか。」

美姫は春奈と綾乃を座らせ、コホンと咳払いをした。

「えーでは今から、彩ちゃんのお誕生会を始めます。」  
「いえーい！」

ドンドンドン、パフパフパフ

信と雪華はどこから取り出したのか太鼓と名前は分かんがよく昔の豆腐屋が使ってたやつを持って騒いでいた。

「それでは最初に、彩ちゃんお誕生日おめでとう!」

「おめでとう!」

「おめでとうございまーす!」

「あ、ありがと。」

綾乃は去年よりも人が増えたからか少し照れていた。

「いやはや、まさにこれだな。」

そう言つて信はどんつと目が異様に出た鯛をテーブルの上に出した。

つーかどっから持って来た!?

「・・・何だ、それは?」

なんとなくもうオチは分かっているが一応聞いてやる。

「目が出た鯛、略してめでたい。ハーハツハ、ナイスギャグ!」

ヒュー、と俺達の間寒い風が吹いた気がした。

久しぶりの誕生会でぶっ壊れてんだな、うん。

俺はそう思うことにして美姫に話しかけた。

「で、今から何やるんだ？」

「ちよっと待って。もう多分出来ると思うから。」

何が？と、聞こうとしたら美姫のお母さんの姫乃さんが入ってきた。

「お待たせ。」

姫乃さんは両手に料理の載った皿を次々に持ってきた。

瞬間に長テーブルの上には豪華な料理が並べられた。

「「「おおー。」」」

「さあ、どんどん食べてね。まだまだ急ピッチで作ってるから。」

作ってる？メイドさんとかかな。

その頃、厨房では……

「ひいー、母上様人使い荒すぎ!!」

「兄さん！文句言ってないで早く手を動かして！」

厨房では達也と姫菜が料理を作っていた。

その二人以外には姿は見えない。

「はあ、コツクくらい雇えばいいのに……」

「仕方ないよ、お母さんがもったいないの一言で使用人も数人しか雇ってないんだから。」

「くそー！無駄に広い我が家が憎らしいー！僕も麗しい美少女達とお食事したい!!」

最早半泣きの達也の叫び声が厨房に響いた。

……。

姫乃さんとは初対面の春奈と雪華を簡単に紹介して、料理を食べながらしばらく経った後お待ちかねのプレゼントタイムになった。

「毎年の事だけど何だかドキドキするわね。」

「物欲の塊だな。（ぼそっ）」

「む、潤。何か言った？」

「イイエナニモ」

恐るべし地獄耳……ついつかりで命を落としそうだ……

「じゃあ、まずは私から、はい。」

最初は美姫がプレゼントを差し出した。その手には大きめの紙袋が握られていた。

「これは？」

「部活で役立つ用品一式。たくさんあって困る物じゃないと思うから。」

紙袋の中には、コールドスプレーやテーピング、その他もろもろスポーツで役立つ品がいくつも入っていた。

「ありがとう、大事に使わせてもらっね。」

美姫のプレゼントに綾乃の受けは上々。伊達に一緒にいるわけじゃないようだ。

「それじゃ、次は私。」

今度は春奈が一つの本を取り出した。

「彩ちゃん、前お料理したって言ってたでしょ？比較的わかりやすい物買ってきたから。」

なに！？綾乃が料理！！？

俺の頭の上に驚愕の二文字が浮かび上がる。

俺がそんなリアクションをとっていると、綾乃から殺気だった視線を感じた。

「……すみません。」

俺は思わず反射的に謝ってしまった。

「……全く、あたしだって料理くらいするのよ。」

っーかそんなの初耳だ。寝耳に水だ。馬の耳に念仏だ。

いや最後のは意味違うが……

「よし！私の番ですね！じゃーん！」

「「「ぶっ！！！」」」」

「ぶっ。」

雪華のそれを見た瞬間、信以外全員吹き出してしまった。

雪華が手に持ってるのは……いや、なんつーか、フリフリの下着だった。

「ふっふっふっ、水無瀬雪華独自のルートで綾乃先輩のサイズもばっちり！私オススメのブラ＆パンティーです！」

「……………」

いや、俺個人としては結構可愛いかと思うよ、うん。

だが、それを見た綾乃はこめかみがピクピク動いている。

明らかに怒ってますね、はい……

「どうですか、潤先輩！てゆうか私の見たいですか！恥ずかしいですよ・・・でも潤先輩がどうしても言うなら後で二人きりの時にこっそりと。でもって、そのまま雰囲気の流れされてそれ以上も・・・ってきやあ 私何言っでんでしよう！」

「・・・雪華・・・」

ゆらりと綾乃は立ち上がり、一人で盛り上がっている雪華の首ねっこを掴んで部屋の外に連れ出す。

「あ、綾乃先輩。早速着てくれるんですか？って何ですかその手は！？や、やめて！やめてー！！！！」

少し経った後、綾乃と半泣きの雪華が戻ってきた。

雪華が何されたか微妙に気になるところだが・・・触らぬ神に祟りなしといったところだろう。

「ふっ、お次は俺だな。」

不適な笑みを浮かべて、紙袋を取り出した。

「それは？」

「ミニチュアなカー　ル・サンダース」



ケン ツキー？

またしょうもない物を買ってきて・・・っ！かどこでそんなの売ってんだか。

もう皆だいたい予想できたみたいで苦笑しかしていない。

綾乃は一応雪華のも信のももらっておくみたいだ。

「んじゃ、最後は俺だな。」

「あ・・・うん。」

俺がそう言った途端、場の空気が一変する。

「・・・私も欲しい。」

「・・・」

「先輩！私も明日誕生日なのでプレゼント買ってください！」

「嘘つけ！！」

春奈と美姫もそんな物欲しそうな顔しても駄目だ。

俺はかばんから小さな紙袋を出す。

「俺からはこれだ。」

俺は紙袋から青い銀の指輪と白い銀の指輪を皮紐で編み込んだネックレスを取り出した。

「どうだ！俺の手作りだ！」

俺はネックレスを綾乃に手渡す。

「……わあ。」

綾乃はネックレスを掲げてじーっと見つめている。

「いいなー、私も欲しーなー。」

「……私も。」

「ずるいですー！綾乃先輩ばかりー！！」

外野からギヤーギヤーとブーイングが聞こえる。

しつこいなお前等……。

「……ありがと……。」

ぼそぼそつと言っから何を言っただかよく分からなかった。

「何か言っただか？」

「べ、別に何も言ってないわよ！」

綾乃は真っ赤になって俺に蹴りをいれてくる。

「いてっ！何すんだよ。」

「うるさい！」

はあ、まあ照れ隠してのは分かってるんだが……理不尽だな。

「ハッハッハ、綾乃ちゃん！誕生日おめでとうー！！」

「おめでとうー。」

今までいっただいどこにいたのか、達也さんと姫菜さんがどこからともなくやって来た。

「いやー、やっと洗い物終わったよー。」

「疲れたー。」

「あらあら、お疲れさま。」

姫乃さんの言葉を聞いた達也さんと姫菜さんはむっとした顔で姫乃さんを睨む。

「全部僕達に任せないで母さんも手伝って欲しかった。」  
「そうだよー。」

そう言われた姫乃さんはどこ吹く風でそっぽを向いた。

相変わらず子供っぽいなこの人は……

突然現れた二人に春奈と雪華はポカンとしている。

とりあえず春奈と雪華に簡単に説明する。

「えー！！スタイリストさんなんですかー！？」

「うん、そうだよ。」

「すごい！」

春奈と雪華がスタイリストという言葉に物凄い食い付いている。

「あ、あの、す、好きな人を振り向かせるオシャレの仕方って分かりますか！？」

「あ、それ私も知りたいです！」

いや、お前等こつちをチラチラ見んなよ。

・・・気付かないふりしとこ。

「あらあら、モテモテなのね潤ちゃん。みいちゃんも頑張んなきゃ。」

「え！？何で私が出てくるの！！？」

いきなり話を振られた美姫がうつろたえている。

「え？だつて前言つてたじゃない。ちゃんとこく・・・」

「わあー！！わあー！！」

美姫はいつもの美姫らしからぬいじられっぷりを見せる。

「ハーハッハ！いやーこんな美少女達に囲まれて潤君は幸せ者だな  
ー！！」

達也さんは大笑いしながら俺の背中をバンバンと叩いてくる。

叩いてくる方の別の手には酒瓶が・・・って酒瓶！？

「ち、ちよつと達也さん！何で酒瓶なんて持ってますか！？」  
「ん？いやー、気にしない気にしない。」

俺は更に強く叩いてくる達也さんを避けて逃げ出す。

が・・・

「ちよつと潤！どこ行くのよ。」

赤い顔した綾乃が俺に絡んでくる。

「な、何だ綾乃・・・って酒臭！？」

こいついつの間にか酒飲んでやがる！？

そう思っていると綾乃が妙に熱っぽい視線で俺を見上げてくる。

「さっきのプレゼント、もうすごく嬉しかったわよ。」

「そ、そうか。」

素直な綾乃はなんだか破壊力ありすぎる気がするんだが・・・

「潤く〜ん。」

「森神く〜ん。」

「潤せんぱい。」

うわ！？こいつらまで酒飲みやがったな！！

ふと、視線を感じてそつちを見てみると、

「「ニヤリ。」」

「あんたらの仕業かー！！！」

酒瓶を持った信と姫乃さんが悪質な笑みを浮かべてピースしている。

「潤君……」

何だ？春奈から何だか悩ましげな視線が……

「私……体が熱いの……どうにかして……」

「いや、どうにかしてって言われても……」

俺が困り果てていると、春奈は自らの服に手をかけた。

「ち、ちよつと、春奈！？何やってんだよ！！？」

「えゝ？だって熱いから。」

いらん！そんな十八禁要素なんていらん！！

おう、今舌打ちした奴誰だ！？そんなら官能小説読め！！

「やめろ！てゆうかまじでやめて！！」

「えゝ、じゃあ潤君が脱がせてゝ。」

ゴクツと生唾を飲む音が聞こえた。いや、もちろん俺だが……

俺は以外とふくよかな春奈の体に目が行く。

改めて見ると結構でかいな……って！？

「何考えてんだ！！俺は――！！！」

このままでは自分で自分が許せない！

と、そう思っていた時横からつつんとつつかれた。

「えへゝ、潤先輩 私も体が熱いんです。脱がせてください」

「あ！雪華ちゃんずるい！！森神君、私もゝ。」

「潤！あんた何考えてんのよ！？この変態！！」



うわー！ー！ー！もう誰か助けてくれー！ー！ー！

（第三十四話へ続く）

### 第三十三話（後書き）

物語完結まで投票受け付けてるッス。JUNでした。

### 第三十四話（前書き）

えー、只今の順位、一位春奈、二位美姫、三位綾乃、四位雪華、五位桜です。同点の場合は作者の気分で決めます。

### 第三十四話

飲んだくれ共の力オスと化した広間も一時騒然としていたが、やがて俺以外全員酔いつぶれていた。

信はやはりいつの間にか消えていた。

「はぁー、誰が片付けたよこの惨状。」

俺はひとまず、片付けは後回しにして外に出ることにした。

「はぁ、疲れたなぁ……。」

いや、まあそれ以上に楽しかったんだけどさ……

……桜がいればもっと楽しかったのに。

「はぁー、俺結構ダメージでかいのかなぁ。」

「何が？」

「ん？」

独り言に返事が返ってきて、振り向いたら綾乃が立っていた。

「綾乃か・・・起きて大丈夫なのか？」

「う・・・まだ頭痛いけどね・・・」

綾乃はこめかみを押さえて顔をしかめる。

綾乃は手を頭から腰に添えて真面目な顔をする。

「桜の事？」

「ん、ああ・・・あいつがいたらもつと楽しかっただろうなーって。」

そう・・・と綾乃は相槌を打って黙り込む。

俺は視線を綾乃から星が輝く空へと移した。

「でもさ・・・」

「ん？」

綾乃は俺の言葉に顔を上げる。

「なんとなく、分かるんだよな。桜はちゃんと元気でやってるって。」

だからあんまり不安とかはないな。」

俺は何故かそう確信していた。

根拠は全くと言っていいほど皆無だが、なんとなくそう感じた。

「ふーん、あんたの予想ってあてになるのかしら？」

「ひでえな、おい。」

俺と綾乃は顔を見合わせて笑いあう。

いつもの会話のやりとりだが、不思議な心地良さがそこにはあった。

「あんたさ、いい加減誰かに決めたら？」

「ぶつ、いきなり何を・・・」

唐突に綾乃からそんな事を言われた。

「別にいきなりでもないでしょ。春奈か雪華か、後姫ちゃんか早く決めないみんな離れていつっちゃうわよ。」

何故美姫から告られた事を知っている！？と言おうとしたが、綾乃と美姫はもう何年も友達やってるんだから相談されたとかで知って当然か。

俺は一つため息をついた。

「分かってる、分かってるんだがなあ……」

一応考えてはいる。だが、俺の中では未だに美咲が一番なんだよな・  
・・・。

綾乃は俺の背中を思いつきり叩いた。

「いつ!!?」

「ま、いいわ。まだ時間はあると思うし、じっくり考えなさい。」

「ああ……ありがとう……」

痛みで顔をしかめながら礼を言うと綾乃はくるっと背を向けた。

「全く世話が焼けるわね。」

呆れているのか綾乃はため息混じりに言った。

「さて、そろそろ戻るか。」

「あ、先行つて。まだ少し頭痛いからここで休んでる。」

「そうか、じゃ先行つてるわ。」

俺は綾乃を置いてひとまず先に広間に戻っていった。

・・・。

「はぁー。」

綾乃は一人で空を見上げたため息をついた。

「なーにやってるんだろ、あたし・・・。」

独り言を言っただけのため息を一つ。

「敵に塩を送るような事して・・・。」

綾乃は最初に潤と会ってから気になっていて、今ではもうはつきりと好きだと言える。

だけど、自分には自信がないし、潤を好いている人が自分以外にもいる。

その三人は自分よりも魅力的で、潤への思いも強くてとても敵わない。

「はぁー・・・。」



綾乃は三たびため息をついた。

自分には自信がない。

春奈のように優しくもない。

美姫のように包容力もない。

雪華のように素直にもなれない。

考えれば考えるだけどんどん自己嫌悪に陥ってしまう。

「えーい！くよくよしててもしょうがない！！」

だが、綾乃は頬をパンツと叩き立ち上がる。

すぐに気持を切り替えられるのは綾乃の長所である。

「あたしはあたし！これからも頑張るしかない！！」

綾乃は気合いを入れて広間に戻っていった。

・・・。

「うー頭痛いー。」

「自業自得だ。」

俺は春奈の言葉をバツサリと言い捨てる。

結局あの後綾乃と片付け終えた時には既に夜中と呼べる時間だった。

一番早く起きた姫乃さんが妙に嬉しそうに

「じゃ、しょうがないから泊まってってね」

と言うもんだから仕方なく厄介になった。

その時、部屋の鍵と何故かもう一つ鍵を渡された。

これは何かと聞いたところ

「美姬ちゃんの部屋の鍵 母としては、娘に幸せなってもらいたいしー、孫の顔も見たいしね。」

とか、おっしやりやがりましたよ。

俺は無言で鍵を突き返して自分の部屋に入り、朝になってから春奈を起こしに来ていた。

ちなみに美姫と雪華はもう起きたが、テーブルの上でそれぞれ苦しんでいる。

「ほれ、早く起きて飯食って薬飲め。」

「うん・・・ねえ、潤君。」

俺が部屋から出ようとしたところで春奈に呼び止められた。

「昨日私、酔って変な事しなかったよね？」

「あ、あー、うー。」

煮えきらない態度に不安になったのか、ベッドから出て俺に詰め寄ってきた。

「なに？私何かしたの！？」

「ぶっ！！？」

春奈の着ていた寝間着は下着がスケスケネのグリジェだった。

いや、昨日も思ったけど春奈意外とグラマー？

ってそうじゃないし！！

「は、春奈！？なんちゅう格好してんだ！！？」

「え？」

春奈は自分の格好をまじまじと見る。

そして、どんどん顔が赤くなっていく。

「き・・・」

「わああああ！！！！待て！！叫ぶのなし！！」

俺は慌てて春奈の口を手で塞ぐ。

「むー！むうー！！」

いや、ちょっと待て俺。今のこの状態は酷くまずくないか？

一つ、春奈がほぼ半裸な事。

一つ、俺が後ろから春奈の口を塞ぎ、身動きをとれないようにしている事。

やばい、こんな状態誰かに見られたら・・・

ガチャ

とか思っていると本当に来るんだよねー、呪われてんのかなー、俺。

「潤ちゃん、春奈ちゃん、もうみんな揃ってる……よ?」

「姫菜さん……」

「むぐ。」

姫菜さんは少し沈黙した後、何を思ったか手を俺向け親指を立てた。いわゆるグッドサイン。

「ぐっじよぶ。」

ボタン

扉を閉められた。

「あああああ!!!!」

見られた……よりによってあの、

「面白ければ全て良し」

「他人の不幸は蜜の味」を信条にしている姫菜さんに……

終わった……何もかも……

「えーっと、大丈夫？」

未だネグリジエ姿の春奈に心配されてしまった。

「いや、大丈夫じゃな・・・うお！？春奈！！その格好で前屈みはまずい！！非常にまずい！！！」

「えっ・・・きゃあ！！？」

春奈は慌てて布団で前を隠すが、なんかもう目に焼き付いてしまいました。

ああ・・・なんだかそれ見たら全てがどうでもよくなってきた。

だが、そんなわけにもいかず広間に戻ってみると、

「「「じ」」」  
「うっ・・・」

俺に突き刺さる三つの視線。毎度の事だけど・・・

視界の隅に凄くいい笑顔で姫菜さんがニコニコしている。

「潤・・・あんた春奈になにしたの？」

「・・・」

「い、いや、べ、別に。」

やばい、どもった。三人がジト目で睨んでくる。

「森神君・・・さつき姉さんから色々聞いたんだけど・・・」  
「な、なんて？」

あの姫菜さんが面白おかしくあることないこと言いふらしたのか？  
緊張で俺は冷や汗をかいてしまう。

「・・・先輩が春奈先輩を・・・その・・・す、すっ裸にしてもあ  
そんでたつて・・・」  
「ふっ、鬼畜だったのだなお前は。」

いや、雪華よ・・・恥ずかしいなら一語一句きちんと伝えなくて  
いい。

信はいつも通りだから突っ込まない。

つか・・・

「あほかー！！！！んな事してねー！！！！」

あの人はどうして事を大袈裟にするんだー！！！！

当の本人はどつから出したのか扇子で口を隠して笑っている。

開かれた扇子には弱肉強食と書かれている。

肉は俺なのか？そして食うのはあなたなのか？

この人は普段はほんわかのほんとしてるのにこつという事があると別人のようになる。

その辺は遺伝なのか？美姫も黒いところがあるからな。元（姫乃さん）があんなのだし。

「ハッハッハ、潤君もつてもてゝ。」

「今この状況を見てんな事言いますか！？」

駄目だ、達也さんも妙な事言い出した。

「春奈！ちゃんと説明してくれ！」

俺は春奈に誤解だという事を証明して欲しかった。

だが……



「……ぽっ」

「顔を赤らめるなー!!!」

この春奈の行動でいつも以上に攻撃が凄まじかった。

誤解が解けたのはそれから一時間たった後だったが、もうその時には既に俺は虫の息だった。

余談だが、あのネグリジエを用意したのは姫乃さんだったらしい。

そして、春奈を起こしに俺を行かせたのも姫乃さん。

恐らく姫菜さんとグルで最初から仕組まれていた事だろう。

もう俺…… 美姫には悪いが この家に来たくない……

### 第三十五話

桜のいない生活が続いて早二週間。

五月が近づき桜の木もかなり花を散らせてしまった。

そんなある日、いつもは滅多に鳴らない電話が鳴り響いた。

「はい、森神です。」

何だか春奈が普通に森神とか言っていると違和感あるな。

俺はソファで横になりながら耳を傾けていた。

「あ、お父様。はい・・・はい・・・あ、そうなんですか？」

はて？お父様とはいったい誰？

とか思っている内に電話を終えたようだ。

「春奈、お父様って誰？」

「お父様はお父様だよ。」

いや、それだけじゃ分かん。何だかさっきからちらちら嫌な予感がするのだが・・・まあ気のせいにしておこう。

「だから、潤君のお父様。」

「・・・。。。」

やっぱりか・・・嫌な予感的中。

「で、何て言ってたんだ？」

特に興味もないのでテレビを見ながら適当に聞いてみた。

「仕事が一段落したから明日、お母様と一緒に一旦帰るって。」  
「ナンデスト？」

ギギギッと音が鳴りそうなくらいぎこちなく春奈の方を向く。

あの妙に絡んでくる糞親父が帰ってくるだど！？

「はぁ・・・鬱だ・・・家出してー。」

「だ、駄目だよ！私お父様達とは初めて会ったから不安なの！一緒にいて！」

涙目で腕にすがりついてくる春奈。

いや、まあ、あの親どもを前にしたら不安や緊張する暇もねえと思うが・・・

「はあ、分かったよ。でも春奈、親父達と会った事ないのか？」

てつきり親父達が里親になった時に会ったもんだと思ってたんだが・・・

「うん、電話で何回かお話しした事はあったけど直接会った事はないよ。」

「ふん。」

春奈を親父と母さんに会わせるのか・・・果てしなく不安だ・・・

「じゃあ晩御飯の準備しちゃうね。」

時計を見ながらエプロンを付けて台所へ向かった。

はあ、明日になって欲しくねー。

。。。。。

そして次の日、それは唐突にやって来た。

「ただいまだー！！我が息子よー！！！」

「ただいま。」

いよいよ来てしまったか・・・

春奈は楽しみにしていたみたいだが俺は憂鬱だったぞ。

「ただいまだ、我が息子。」

一目見れば子供がいるとはとても思えない容姿だろうが、いかなせん性格に問題がある。

「。。。。。」

俺は親父の言葉を見送る。

だが、親父はわざとなのか素なのかしつこく絡んでくる。

「おいおい、偉大なる親父様を無視するなよ。」

「ああああ！！！！うぜえ！！！！」

しつこい親父に俺はいよいよ堪忍袋の緒が切れた。

だが、俺の服がちよいちよいつと引つ張られた。

「あの・・・潤君・・・」

「やあ！君が春奈君だね！どーもどーも、潤の父の森神雅人です！」  
もりがみまさと

ガバツと腕を開いて春奈に抱きつこうとする。

だが、寸前で親父の襟首が掴まれ離れさせる。

「もーパパったらあんまりオイタはするものじゃないよ。」

母さんが優しく、だが物凄い威圧感たつぷりに諭す。

「はい・・・すみません・・・」

相変わらず親父は母さんに尻に敷かれているな。

夫が妻に尻に敷かれるのは既に定番だよな。

「はじめまして春奈ちゃん、潤の母の森神沙弥もりがみさやです。」

「は、はい、はじめまして！お母様・・・お綺麗ですね・・・」  
「ふふっ、ありがとう。」

母さんが柔らかく微笑むと春奈はほんのりと頬を赤らめる。

「で、何で急に帰って来たんだ？」

「何を言う、家に帰って来るのに理由が要るのか？」

いや別に要らんけど、ほとんど家に帰って来なかったくせに急に帰って来ると何かあったのかと思うから。

「いやまあ、ただ単に新しく出来た家族に会いに来たっていうものあるんだけど。」

ふふん、と鼻を鳴らす糞親父。この態度が妙にむかつく。

「家族・・・私が・・・」

「そうだよ、あなたはもう私達の家族。」

母さんが春奈の手を取って優しく語りかける。

「とっても・・・嬉しいです・・・ここに初めて来たときも潤君に言われて、凄く嬉しかったです。」

その言葉を聞いて親父と母さんがニヤリと悪質な笑みを浮かべる。

「ところで、我が愚息とはどこまでいけたのかな？」

「あらやだもう、パパったら。それよりも式はいつにした方がいいのかしら。」

「え？えっ？」

「えーい！！やめんか！？春奈とは何もないわー！！！」

えーっ、と不満げな声を上げる父&母。

はぁー、厄介過ぎる・・・

「さてと、私美幸ちゃんのところに行ってくる。」

母さんは俺をいじって大分満足したようだ。



「ああ、帰って来てるんだっけ。」

「そう、久しぶりにお話ししようかなって。」

「つか美幸さんが帰って来てるのは知ってたんだな。」

まあ、今の美幸さんは少しばかり元気がないからいい気分転換になるだろう。

「そつえば、さつき美咲ちゃんに似ていた子がいたなあ。あの子が桜ちゃんなのかな。」

「え！？」

俺と春奈は同時に驚きの声を上げる。

帰って来たのか・・・？桜が・・・

「親父！？桜を見たのか！！？」

「あ、ああ、いや、でも遠目からだったからよく分かん。」

なんだ・・・と、あからさまに肩を落とした。

「なんだ？桜ちゃんがどうかしたのか？」

「いや、つか何で親父が桜を知ってたんだ？」

俺がそう言つと、春奈がおずおずと手を上げた。

「あの・・・電話で私が・・・いけなかつた？」  
「いや別にいけないことはないけど・・・」

何か親父が絡むと癪だなあ。  
そういう年頃なのか？

とりあえず俺は親父と母さんに事のあらまし（元犬だったのは伏せて）を教えた。

「へえ、そんな事になつてたのか。」  
「桜ちゃん、心配ねえ・・・」

辺りを重い空気が包んでいく。

だが、そんな空気も親父の前では意味がなかった。

「ま、大丈夫だろう。へーき、へーき。」  
「その根拠は？」  
「特になし！」

殴りてえ……その無意味で自信満々な面を殴りてえ……

「はあ、なんかもう疲れた……部屋戻る。」

もうなんか親父の相手するのが馬鹿らしくなってきたので俺は席を立った。

「あつ、晩御飯の時間になったら降りてきてよ。」  
「へーい。」

俺は春奈の言葉を背に受けながら部屋を出た。

……。

「さて、春奈ちゃん。ちょっと話があるんだけど、いいかな？」  
「あ、はい、なんでしよう？」

雅人は潤が二階に上がったのを確認してから春奈に切り出した。

沙耶も真剣な表情をして雅人の隣に座っている。

「君は、今、幸せかい？」

「はい、とっても幸せですよ。」

春奈は一瞬その質問の意図が分からなかったが、直ぐ様そう答えた。

「実は……」

「えっ!？」

春奈はその話を聞いた時、目の前が真っ暗になった気がした。

……。

親父達が帰ってきた次の日、俺と春奈は学園に向かって歩いていた。

「うーむ。」

「どうしたの？」

俺は春奈を一蔑してまた唸り出した。

「うーむ。」

「だから、どうしたの？」

俺は春奈を見つめる。

何を思ったか春奈は照れ笑いしている。

「春奈、お前、何かあったか？」

「・・・え？何も無いよ。」

「そっかな・・・？」

何だかいつもより春奈が妙に明るくなってる気がする。

上手く言えないんだが、なんかこう、無理に明るく振る舞ってると  
いうか・・・

「春奈の性格上、周りに心配かけないように無理するからなあ。」  
「え・・・」

俺は春奈の頭の上にポンと手を置く。

春奈はくすぐったそうに目を細める。

「まあ、気のせいかもしれんが、辛いことがあったら無理するな。  
俺に頼れ。」

「っ・・・、うん、その時は頼ることにするよ。」

一瞬、春奈が泣きそうなくらい顔が歪んだが、すぐにいつもの表情に戻った。

俺はしばらくの間、春奈の頭を撫で続け、春奈は気持良さそうに目を閉じていた。

・・・。

「明日から春奈ちゃん連れて母さんところ行ってくるから留守番ヨロシク。」

「は？」

いつものように学園から帰ってきた俺はいきなり親父からそんな事を聞かされた。

「何で？」

「春奈ちゃんの両親の墓参りといいでに母さんに顔見せ。」

何だって！？明日は自炊だと！！？

今まで春奈に頼りっぱなしだったから料理の腕落ちてねえといけど。

「ごめんね、潤君。言おうと思ってたんだけど、タイミングが掴めなくて……」

「いや、まあ一日くらい大丈夫だろう。」

そのくらいなら何とかなる。

だが、そんな様子を見て親父がまたニヤリと笑う。

「我が息子よ、春奈ちゃんには随分甘いじゃないか。」

「うるせー！！行くならさっさと行け！！！」

このままここにいたらさらにいじられる。

俺は親父の言動にうんざりして自分の部屋に駆け込んだ。

……。

「やれやれ、短気だねえ。春奈ちゃんはあれで良かったの？もしかしたら最後の別れになるかもよ。」

「大丈夫です。それに私は絶対にこの場所に戻ってきますから。」

春奈は潤の部屋がある方を見つめて、強く決心した。

(第三十六話へ続く)



## 第三十六話（前書き）

次回、いよいよ春の訪れ最終話！最終話が終わった後、それぞれのルートに新しい小説として掲載します！

### 第三十六話

次の日、目を覚まして一階に降りると既に誰もいなかった。

「ああ、そっか。もう行ったのか。」

見るとテーブルの上にメモが残されている。

『潤君へ。朝ごはんを用意しておきます。ちゃんと食べてね。あなたの愛しの春奈より』

「何が愛しの春奈よりだ。全く・・・」

俺は春奈が用意してくれた朝飯を平らげると学園へ行く準備をした。

「行くぞー！春奈ー！！」

いざ、玄関から出ようとすると思わずそう言ってしまった。

「あ・・・そっぴいになかったんだっけな・・・」

もう春奈がいることが普通になっちまったんだな。

「何か、違和感あるなー。」

毎日隣に春奈がいたからか妙に落ち着かない。

「ま、今日だけだし。」

自分にそう言い聞かせて学園へ急いだ。

・・・。

「おはよーさん。」

「おはよ。」

「おはよー、森神君。」

教室に挨拶しながら入ると綾乃と美姫が寄ってきた。

「あれ？春奈ちゃんは？」

まあ、当然そこに行き着くわな。

俺は昨日の出来事を二人に聞かせた。

「へー、おじさん達帰って来てたんだ。」

「ああ、いきなりだったからな。こっちも焦った。」

電話してきていきなり帰る、だもんな。

迷惑極まりない話だ全く……

「でも、昨日春奈ちゃん、今日がお墓参りだなんて一言も言っていなかったよね。」

「タイミングがなかったって言うてたけど、多分言いづらかったんだろう。あんまり良い話題じゃないしな。」

思えば昨日の春奈が少し変だったのもそのせいだったのかもしれないな。

春奈、変なところで気使うからなあ。

そんな時、始業のチャイムが鳴り響いた。

「あつと……戻るとしようか。」

「そうね。」

俺達はそれぞれの席に戻っていった。

・・・。

「あっ」

という間に放課後になった。

さっさと帰って飯の準備をしなければ。

「えーっと、春奈が帰って来るのって明日の朝なんだっけな。」

帰って早々飯作らせるのも大変だし、明日までは俺が飯作ろっかな。

今日の晩飯だけじゃなく明日の朝飯も考えなければ。

そんな事を考えながら公園に差し掛かった。

「ん？あっ！！」

ブランコに乗っている人に見覚えがあると思ったら煉だった。

「おーい！！煉！！！」

煉も俺に気づき一瞬驚いた顔をして立ち上がった。

俺は煉の所に急いで駆け寄った。

「久しぶりだな、煉。お前どこ行ってたんだ。」

「んー、あー、いやちよつと野暮用で。」

煉は何だか妙に言いづらそうにしている。

そんなに言いづらい事してたのか？

「ま、元気そうで何よりだ。明日から学園来んのか？」  
「ん、いや、まだ分からない。」

何だろう、いつもの煉じゃねえみたいだ。

歯切れも悪いし、何だか落ち込んでいるような雰囲気だし。

「なあ、潤。」

突然、煉が何か決心したように俺に向き直った。

「明日の放課後、学園終わったら真っ直ぐここに来てくれ。会わせたい人がいる。」

「会わせたい人？誰だそれ？」

真剣になったと思ったら急にこんな事言い出しやがった。

今日の煉は何だか変だな。

「明日になれば分かるから。」

とりあえず、不審に思いながらも俺は頷いた。

・・・。

そしてその日の夜。

晩飯を作っていた時に突然家の電話が鳴り始めた。

「はい、森神です。」

『へろー、我が息子よ。』

やべ、むちゃくちゃ切りたくなってきた。

この声聞くだけで妙にむかむかしてくるのは何故だ？

「で、何の用だ？」

『いやー、実は母さんが春奈ちゃんを帰したくないーって、だだこねちゃってさ。あと、もう二、三日こっちにいる事になったから。一人で大丈夫だよな？』

あのクソババアは……

っ！かここで却下したら一人で大丈夫じゃねえみたいじゃねえか。

「……まあいいけどさ。なるべく早く春奈を帰らせろよ。」  
『なんだー、意外と春奈ちゃんにぞっこん……』

ガチャ！っ！と勢いよく俺は受話器を叩きつけた。

さてと、晩飯の続きでも作るとするか。

その日の晩飯はいつもより味気ない物だった。

……。

「むう……」



コツコツと教師がチョークで黒板に文字を書いていく。

そんな静かな雰囲気の中で俺はどこか落ち着かなかった。

「むー・・・」

「何唸ってんのよ。」

俺の後ろの席の綾乃がひそひそ声で話しかけてきた。

「いや、何かさ、落ち着かなくて・・・」

「春奈と桜がいないから？」

「うーん、多分・・・」

いつも隣にいる春奈と席は離れているが目が合うと手を振ってくる桜。

いるべき人がいないとこんなにも違和感があるとは・・・

「あんたも案外寂しがりやなのね。」

にやけ面で俺をつっついてくる綾乃。

寂しがりや、か……

「そうなのかもな……」  
「む……」

予想外の俺の返答に綾乃はつつくのを止めた。

そのかわりに俺の背中に優しく手を置いた。

「大丈夫。二人ともすぐ帰って来るわよ。」

綾乃なりに俺を励ましてくれたのだろう。

その心遣いがありがたかった。

「ああ、そうだな。」

そんな二人の会話に関係なく授業は進んでいった。

……。

そして、午前中の授業が終わり、昼休み。

「森神君、一緒にお昼食べよう。」

「ほら、さつさと学食行くわよ。」

「うわっ！？おい、分かったから引っ張るな！！」

美姫と綾乃が俺の両手を取って有無を言わず連れてかれた。

「あんたと姬ちゃんは席取つといて、あたしが注文取りに行くから。」

俺の注文も聞かずに綾乃は走り出してしまった。

「何だ、あいつは？」

「ふふっ、綾ちゃんはあれでも気を使ってるんだよ。」

いや、それはまあ分かるんだが。

何とも不器用な気の使い方だな、おい。

「私も、森神君には元気出して欲しいよ。」

適当な席に座ると、美姫までそんな事を言ってきた。

俺、そんなにいつもと違うのかなあ。

「大丈夫だって、あんまり遅かったら二人とも探し出して無理矢理連れ戻すから。捕われの姫みたく。」

「あ、お姫様の役は私がやりたいなあ。」

いつもの俺ならでもるところだが、スマートに切り返すぜ。

「美姫だけにか？」

「そうだよ。それで王子様役は森神君じゃなきゃ・・・」

「う・・・」

スマートじゃないうえに、逆に切り返されてしまった。

その上目使いは反則だと思うのですか、どうでしょう？

「ほほう、らぶらぶうおんちゅーなのだな、お嬢は。」

またどこから現れたのか信がいつの間にか俺の隣に座っていた。

「そ、そんな事ないよ。」

「ふっ、これを見てもまだ言えるのか？」

そう言つて信は自分の携帯を取り出し、一つの動画を俺達に見せた。その中には以前、俺と美姫がいて、買い物に出掛けた帰りに寄った公園が写っていた。

「え、それってまさか……」  
「動画スタート。」

その動画には美姫が丁度美姫が俺に向き直ったところから始まった。

『森神潤君、私、天神美姫は貴方が心から……』  
「いやー……やめてー……!!」

途中で耐えられなくなった美姫が恥ずかしさのあまり絶叫する。

「ふはははは!!お嬢よ、返して欲しくば……」

ひょいっと俺は信の携帯をひったくった。

「ほい、デリート。」  
「む。何をする貴様。」

俺がその動画を消去すると信はさして驚いてもいないような態度で詰め寄ってきた。

「何をするはこっちのセリフだバカ！！こんなもん撮ってんじゃねえ！！っかこの時どこにいやがった！？」

「ふっ、トップシークレット。」

妙にネイティブな発音をすると普段の信に戻った。

何だ、こいつは。結局何がしたかったんだ？

「ふっ、まあいい。当初の目的は達した。おっと俺も飯を取ってこなければ。」

そう言って信は食券販売機の所まで向かって行った。

その後ろ姿を見送る俺と美姫。

「もしかして篠原君、森神君を元気づけに来たのかな。」

「・・・だとしても分かりづら過ぎる。」

俺が一つ溜め息をつくとき、信とすれ違い様に綾乃が器用にも三人分の皿を手に戻って来た。

レストランでバイト出来るな、こいつは。

「今信君が満足そうな顔してたんだけど何かあったの？」

「いや、大した事じゃない。」

思いつきり大した事あったけど……

「綾乃、美姫。」

「何よ？」

「何？」

俺は改まって二人に向き直った。

綾乃と美姫は何事かと思って俺を見る。

「……ありがとう……」

途中で気恥ずかしくなって語尾の方はほとんど聞こえなかったかもしれない。

でも、一応伝わったみたいで言われた二人は目をパチクリしている。

「……別に。」

「どういたしまして。」

綾乃は目をそらしながら、美姫は満面の笑顔で答えた。

ついでに信にも感謝はしておこう。

・・・。

放課後、俺は煉の言われた通りに真っ直ぐ公園に向かっていた。

「煉の奴は急にどういっつもりなんだか・・・」

ぶつぶつと呟きながら公園に着くとそこには煉と隣には桜華さんがいた。

「おう、来たぞ、煉。桜華さんも久しぶり。」

「お久しぶりです、森神さん。」

桜華さんはぺこりと礼儀正しく頭を下げた。

見ると、二人とも真剣な表情をしていて、雰囲気も以前と比べて変わっていた。



「で、昨日言ってた俺に会わせたい人ってのは？」

その時、一陣の風が吹いた。

舞い落ちる桜の花びらを巻き込みながら桜吹雪を巻き起こす。

俺は思わず目を閉じた。

次に目を開けた時、そこには俺のとても大事だった人に似た人物がいた。

「・・・桜・・・」

桜は随分懐かしく感じるその笑顔を俺に向けた。

（第三十七話へ続く）

## 最終話（前書き）

長かった春の訪れもようやく完結！次作品は春奈ルートからスタート！題名は『夏に吹く春の風』それぞれのヒロインによって題名も小説も新しくなります。

## 最終話

「久しぶりだね．．．．パパ．．．．」

「．．．．っ、そんな久しぶりって分けじゃないけどな。」

何だか嬉しくて涙腺が緩んでしまった。

理由も言わずに突然いなくなっと思ったたらまた突然現れやがって。それほど長い間じゃなかったが、会えなかったら会えなかったでやっぱ寂しかったわけ。

「わふっ!？」

久しぶりに桜の犬耳を触ってしまった。

うゝん、この感触．．．懐かしい。

「いきなりだね．．．．」

桜は少し困っていたがしばらくそのままできてくれた。

満足して俺は手を放した。

「何で煉達と桜が一緒にいたんだ？」

「それは……」

「協力してくれたからだよ。」

煉に理由を聞こうとしたら桜が代わりに話し出した。

む、俺はてつきり煉が犬耳好きな変態野郎で、桜を拉致ったのかと思っただぞ。

「んなわけねえだろ！！？」「む、なぜ分かった？」

「パパ……普通に声出してたよ。」

桜が苦笑しながら指摘してくる。

桜の苦笑なんて初めて見たな。何だか帰ってきて雰囲気変わったか？

「では煉様、そろそろ帰りましょう。」

「おう。じゃあ帰るわ。」

「ああ。」

煉と桜華さんは俺と桜に挨拶すると、帰っていった。

「俺達も帰るか。」

「・・・うん・・・」

心なしか桜の表情が暗い気がする。まだ何かあるのか？

「ねえ・・・パパ・・・」

「ん？」

歩いている間、黙ったままだった桜が口を開いた。

「聞かないの？・・・ボクが何をしてたか。」

「・・・」

本音を言えば聞きたい。どうして突然いなくなったのかを。

でも・・・

「約束したからな。帰って来たら話すつて。だから桜が話してくれるまで待つよ。」

「・・・」

桜は悲しそうに微笑んだ。

だが、そんな表情は一瞬で吹っ飛んだ。

「パパ、今日はパパの家に泊まりたい!」

「いつ!?!いや、それはちょっとまずいかなー・・・」

何せ今家には春奈がいない。

二人きりつてのもあれだし、バレた時の事の方が怖い。

「駄目なの・・・?」

「う・・・」

目に涙を溜めて上目使いで不安そうな顔をする桜。

こんな顔させて断る事が出来るだろうか? いや、出来ない!!

「・・・今日だけだぞ。」

「ホント!? ありがとう、潤ちゃ・・・じゃなかった、パパ!」

・・・言い間違えるなよ。

・ 桜に潤ちゃんなんて呼ばれたらあいつと重ねちまうじゃねえか・・・

俺は頭を振ってそんな考えを振り払って、先に行く桜を追いかけた。

・・・。

「むふふふ」

「・・・・・・・・」

桜はソファに座っている俺の腕に絡みついて気持悪い笑みを浮かべていた。

「むふふふふふ」

「えーい！！さっきから妙な笑みを浮かべるんじゃない！！！」

いよいよ我慢出来なくなった俺は隣の桜に怒鳴った。

桜はニヤケ面を止める事なくさらにひつついてくる。

「えー、だってー、今日は春ちゃんがいらないからパパを独り占め出来るんだもん。」

既に腕だけじゃなく体全体でのしかかってくる。  
でもやっぱり胸の大きさだけは変わらなかった。

おかしいなー、昔の美咲は成長著しかったはずなんだが、あん時のままの姿だから成長してねえのかなあ。

「なあ、桜。」

「何？」

「お前の胸の小ささは美咲のせいって言うてたよな。」  
「・・・・・・・・」

あれ？なんか怒ってる？

お前がこの前言った事なんだけど・・・・・・・・まあいい、続けよう。

「美咲の家に泊まりに行ったときな、その時朝起きたら美咲が半裸で隣にいて、俺が寝ぼけて胸を触った時は年のわりに結構あるなと思っただが・・・・・・・・」  
「・・・・・・・・」

あれ？まだ怒ってる？

美咲の話ばっかだから焼いてんのか？

「春奈や美姫に比べたら美咲ってまだまだだったんだなー、って思っただが・・・・・・・・っててててて！！！！？」



ハッハッハ、と遠い目をしながら笑っていると何故か桜は頬をこれでもかというくらい膨らませて俺の腕をつねってきた。

ちなみに春奈と美姫は意外とグラマーだ。信曰く（奴が勝手に調べた）春奈はF、美姫がDらしい。

「な、なぜ怒る!？」

「……別に。」

不思議すぎるぞ、女心。

こんなに態度がコロコロ変わるもんなのか？

「ねえ……パパ……」

「な、なんでしょう?」

つねられた腕をさすっていると神妙な面持ちで桜は言った。

俺は思わずまたなにかやられるのかと思って身構えてしまった。

「明日……一緒に行って欲しいところがあるの。」

「学園は?」

「休んで。」

それはちょっと問題な気がするんだが……

俺が渋い表情をしていると、桜は懇願するような顔で見上げてくる。

う……そんな顔に俺は弱い。

「はあ、わかった、わかった。もうとことん付き合ってやるよ。」  
「うん……ありがとう……」

そう言う桜はどこか哀愁を帯びた笑顔だった。

そして、そろそろ寝ようとした時一緒に桜もついてきた。

「何故にお前は俺と同じベッドにいる……」  
「だって、せっかくだし……」

せっかくも糞もないな。桜は良くても俺が良くない。

男には野獣な面があるのですよ。

「お前、そんな事ばっか言っつと襲っぞ？」  
「え？ホント？うん、襲って、襲って」

いや、そんな嬉しそうに言うことじゃないでしょあんだ。

っ！か意味分かって言ってるのか？

「ああ！もついい！俺は寝るー！」

もう面倒くさくなってきたので俺は桜に背を向けて寝る事にする。

「むう……」

何か後ろでもぞもぞ動く気配がして、俺の背中にピタッと桜がくっついてきた。

「……おい。」

「えへへ、パパあつたかい」

本当に嬉しそうな声色に俺は怒る気をなくしてしまった。

頑張れ俺。我慢だ俺。二つの意味で……

「……さつさと寝ろよ。」

「すうー、すうー」

もう寝てるし!?

起きてても仕方ないので俺もさっさと寝ようとした。だがしかし!!

「・・・眠れん。」

桜の犬しつぱがぺしぺし足を叩いてくるのもあるが、それ以上に背中に感じる二つの小さな膨らみが眠気を遮る。

静まれ、静まれ、俺の心臓と男の象徴。

そんな事を考えながら俺が寝つけたのはそれから二時間後の事だった。

・・・。

そして朝。小鳥のさえずりが聞こえてくる。

「うーん・・・」

俺が寝返りをうつとふにょん、と顔に柔らかい物があたる。

この時点でもう既に分かんと思うが、まあ続けるとしよう。

「ん〜？」

「ん・・・はあ・・・ん・・・あん・・・」

顔をもぞもぞと動かしてみると何だか艶っぽい声が聞こえてきた。

その時の俺は何をどう思ったのか、口を開けてその柔らかい物体に歯を立てずに噛みついた。

「ひうつ！？・・・んん・・・はあん・・・」

十八禁に片足突っ込んだような声だが、それ以上の事をしなかった俺に敬意を評したい。

いい加減不審に思った俺はうつすらと目を開いていく。

最初に目に入っただのは誰かの首もと。

そして、次はどアップの・・・っ！か既に零距离の胸。

今俺は何をしているのか？

なぜ桜の胸にかぶりついているのか？

そついやさつき夢でプリン食おうとした気がする。

「つかそついう自己分析をしている場合でもなく……」

「……さあどうする俺？」

とりあえず桜が起きないように頭を……

「……離せない……」

なんと俺の頭は桜の両手でがっちりホールドされていた。

まずい……非常にまずいでありんす。

何がまずいかって、主に俺の×××（ピー）が。

こんな状態流石のお気楽、極楽の桜でもぶっ叩かれるに違いない。

「はう……うーん……んん……」

「むぐっ!？」

突然桜が俺を、というか俺の顔を胸に押し付けてきた。

なんだかさっかから下ネタばっかだけどご容赦下さい。

ああ、女の胸に抱かれて死ぬのか俺は……

ある意味男にとつちや最高の死に方だと俺は思うよ。

「ん……」

「むぐ。」

そんな事を思っていると桜の目がパチツと開かれた。

何故そこで突然目が覚めるのかこの娘は。

目えあっちまつたよ、おい……

「……」

「……」

只今ロード中……

首からだんだん顔が赤に染まっていく。

どうやらロードは無事に完了したようだ。

この後俺に贈呈されるのは天国への片道切符か。それとも地獄への片道切符か。

どっちにしても同じ意味合いなのよね・・・

その日、森神家では朝っぱらから景気がいい音が響いた。

・・・。

「俺は無実だ・・・」

「・・・えっち。」

頬にできた見事な紅葉の跡をさすりながら俺は呟いた。

だが、桜は横目で俺を睨むばかり。

くう・・・以前の桜ならもっとオープンでカモンカモンな性格だった気がするのに、今や春奈みたいになってるよ・・・

俺ってまさか女に尻に敷かれる運命！？

やだよ！あたしゃやだよ！親父みたいな人生なんて！！

「・・・はあ、パパ、もうあんなことしちゃ駄目だよ？」

「いや、ありや不可抗力・・・」

「わかった？」

「はい・・・」



駄目です・・・俺は最早尻に敷かれる運命のようです・・・

そんな俺の心中も知らずにもう既に桜は出掛ける準備万端で、ソワソワしている。

「じゃあ行くか？」  
「うん！」

桜は元気良く頷くと俺の手を取って玄関を飛び出した。

知り合いに見付かりませんように・・・

・・・。

「で？いったいどこに連れていかうとしてるんだ？」  
「えーっと、まずは・・・」

おいおい、まずはから入りましたよこの犬耳少女。

学校サボってデートかよ、けっ、いいご身分だな全く、なんていう  
呟きが聞こえてきそうだ。

「まずは、ゲーセン!!」

「はいはい、もう好きにしてくれ……」

桜に引きずられてゲーセンに入ると桜は一目散にクレーンゲームに向かった。

この前ので大分気に入ったようだ。

「よしっ！リベンジ！」

さっそく百円いれてクレーンを動かす桜。

どうやら狙うのはこの前と同じ種類で色違いの犬のぬいぐるみらしい。

クレーンは上手くぬいぐるみの頭を掴んで持ち上げる。

「いい……そこっ……そのまま……ああっ!!」

第三者が聞いたなら勘違いしそうな言葉だったが決して違っぞ。

ちなみに最後のああっ!!は、クレーンが持ち上げて止まった時のガクンという衝撃でぬいぐるみが落ちた時の声だ。

「ううー、もう一回。」

桜は懲りずに再度トライ。

前よりは幾分ましになったがまだまだ甘い。

それから桜は何度か試してみるが結局取れなかった。

「うー……」

「はいはい、俺の出番ね。」

唸りながらガラスにへばりついている桜をどかすと俺は百円を入れる。

ここからの状況は俺の言葉のみでお楽しみ下さい。

「うーん（移動してる音）、ガチャーン（ぬいぐるみを掴んだ音）、ウーーン、ぽと（移動してぬいぐるみを落とす音）、はいゲッチュー。」

見事一発でぬいぐるみを取って桜の目の前に掲げる。

桜は涙目でぬいぐるみごと俺を睨んでくる。

「ううー・・・ぐやじい・・・」

「わわ！？こんなところで泣き出すなよ！..」

悔しさの余りとうとうポロポロと桜は泣き出してしまつ。

世間の目が痛い、痛すぎる。

慌てて俺は近くの喫茶店に入り込み、桜を落ち着かせる事にした。

店に入った時の店員の視線も妙に痛かった。

「とりあえずこれやるから泣きやめ。」

「・・・ぐすつ・・・いいの？」

桜はぐずつきながら俺を見上げてくる。

最初からあげるつもりで取ったんだし、男の俺がこんなファンシーな物もってたら人格疑われるし。

桜は素直に犬のぬいぐるみを受け取った。

「・・・すんつ・・・えへっ、ありがとう。」

「現金なやつだな、おい。」

泣いたからすがもう笑うっていうやつだな。

ところで、からすが笑うって結構不気味だと思うぞ、俺は。

「えへへ、兄弟がふえたね。」

桜は前俺が取ってやったぬいぐるみをハンドバッグから取り出し、テーブルの上に並べた。

「いつも持ち歩いてんのか？それ。」

「うん！もちろんだよ。ボクの宝物だもん！」

桜は二つのぬいぐるみを胸に抱き締めて嬉しそうに笑う。

なんとも微笑ましい光景だな。

俺と桜はしばらくの間、昼食を取ったり、話をしたりしていた。

「うん・・・もう十分かな・・・。」

それから数時間経った後、桜は唐突に呟いた。

俺が不審に思い、顔をしかめっていると、桜は立ち上がった。

「じゃあパパ、行こう。」

「って、どこに？」

「本日の最終目的地。」

桜は俺の手を取って店から飛び出した。

ちなみに既に金は払っている。

・・・。

「着いたよ。」

「はあ、はあ、思いつきり連れ回しやがって・・・・・・・・？」

俺が顔を上げるとそこには桜の木があった。

辺りを見回してみると、どうやらここは犬の桜と初めて会った川の近くのようなのだ。

「おい、桜。こんなとこ連れてきて何を・・・・・・・・」

桜は木によりかかり、目を閉じている。

その雰囲気神秘的で俺は声をかけるのを躊躇った。

「……じゃあ、ボクが今までどこで何をしていたか話すね。」

少しそうしていた後、微笑みながら言った。

「……いいのか？」

「……うん。」

俺は桜の目を真っ直ぐ見据えて、聞く体勢に入った。

そして桜は語り出す。

「この町にはね、ある言い伝えがあるんだ。パパ、知ってる？」

「あ、ああ、少しなら……。」

昔、子供の頃に親父に聞かされた事がある。

その時の親父が妙に威張りながら語っていたから不本意ながら覚えている。

昔、昔

あるところに一人の若い男と一人の若い女がおりました

二人はとても仲が良く、周りの者が呆れるほどでした

二人は夫婦になる約束を果たし、とても幸せでした

ところがある日、女が流行り病にかかってしまいました

男の必死な看病にも関わらず、女は息を引き取りました

男は深く嘆き悲しみ、何もしない毎日が続きました

そんな男を哀れに思い、生前女が大切にしていた桜の木が女を創り出しました

その女は男が愛しく思っていた女にそっくりでした

女は自分を『桜の使い』と名乗りました

男はその女と暮らし始め、だんだんと男も立ち直り始めました。

ですが、女は男がもう一人でも大丈夫だという事が分かると、桜の木としてずっと男を見守り続けました

・・・確かそういう話だった気がする。

桜の木から生まれた桜の使い・・・・か。



ん？

「まさか、桜がその桜の使いだつて言い出すんじゃないかねえだろうな？」  
「・・・・そのまさかだよ。」

んな非科学的な、と言いそうになったが、桜の耳や尻尾、美咲とうりふたつな点でもう非科学的だという事に気付いた。

「それが本当だとしても、それとこれとどう関係があるんだ？」  
「桜華ちゃんもね、桜の使いなんだよ。」

桜華さんが？いや、でも耳や尻尾ついてねえし。

と、そんな疑問を投げつけると

「この町で死んだ人の魂はその死を乗り越えられない人がいると桜の木に取り込まれるの。」

魂には体の記憶と心の記憶に分かれるんだけど、ボクの場合どこかで体の記憶を使っちゃったらしくて心の記憶しかなかったの。

「

一拍置いてさらに桜は続ける。

「だから代わりに犬のボクの体を使って今ここにいるの。桜華ちゃんちゃんと体の記憶と心の記憶があったから。」

「そういえば……」

俺は以前、美咲の死が受け入れられなくて、ばあちゃんの田舎で美咲の幻に会った時の事を思い出していた。

あの時は夢だと思っていたが、本当に美咲だったのか……

「でね、そのせいなのか、ボクの桜の使いとしての力がなくなってたの。それで、れっちん達に手伝ってもらってたの。」

なるほど、同じ桜の使いである桜華さんに手伝ってもらってたのか。とりあえず桜が何をしてたのかはわかった。

「でも、何で最初に自分が桜の使いだって言わなかったんだ？」

「ボクが桜の使いだって自覚したのは初めて桜華ちゃんに会った時なんだ。」

「……ああ、あの時か。」

あの時桜の様子がおかしかったのはそのせいなのか。

で、結局本題に戻るわけだが……

「で、結局、何で俺をここに連れてきたんだ？それを言ったため？」

そう言うとき桜は左右に首を振る。

まだ何かあるという事だろう。

「桜の使いは主の悲しみを埋める為の存在。だから今からその使命を全うします。」

「え？」

そう言うとき桜の体が光り輝いていく。

俺は思わず目を瞑っていた。

だんだんと目を開いていくとそこには桜と・・・

「・・・み・・・さき・・・？」

桜にうつりふたつの俺が大切にしていた女の子、美咲が立っていた。

「久しぶりだね、潤ちゃん。」

「美咲！！！！」

気が付いたら俺は美咲を抱き締めていた。

「苦しいよ、潤ちゃん。」

「・・・ごめん・・・ごめんな・・・俺、お前を助けられなくて・・・どうしてももう一度お前に謝りたかった・・・」

「だからあ、潤ちゃんのせいじゃないって言ったでしょ、もう。」

美咲はしょうがないなあ、もうといった感じで俺の背中をポンポンと叩く。

「潤ちゃん、このままよく聞いて。」

「・・・なんだ？」

美咲はその状態のまま話し出す。

俺は直感的にこの現象は一時的なものだとわかっていた。

「ボクを忘れて、って言っても多分無理だろうから、潤ちゃん。ボクに・・・縛られないで・・・」

「でも、俺は・・・」

「お願い・・・お願いだから・・・自分の幸せだけを考えて・・・」

俺はそのまま口ごもってしまふ。

俺の思いが、逆に美咲を苦しめてしまふ。

「俺は．．．お前をさし置いて、俺だけ幸せになるなんて．．．」

「ダメだよ．．．ボクは潤ちゃんが大好きだから．．．大好きな人だからこそ、幸せになって欲しいの．．．」

俺は．．．幸せになる資格なんてあるのか？

幸せに．．．なってもいいんだろうか？

美咲の幸せは、俺の幸せ

俺の幸せは、美咲の幸せ

だから．．．

「美咲．．．俺．．．お前が好きだ。」

「うん．．．」

「美咲が好きだから．．．絶対に忘れない。」

「うん．．．」

だんだんと、美咲の体から光が漏れていく。

「絶対……絶対に忘れないからな!!!!」  
「うん!」

だから、俺は……幸せにならなくてはならない。

「ボク……潤ちゃんに出会えて……幸せだったよ……」  
「ああ……俺もだ……」

俺の腕から

美咲が光となって

消えていった。

「今度こそ、さよならだ……美咲。」

俺は空に昇る美咲の光の雫を涙を堪えながら見送った。

「じゃあ……帰ろう、桜。」

力の行使に集中していた為、ずっと寡黙だった桜に呼び掛けた。

だが、桜は悲しく首を横に振るだけで答えようとしない。

「桜？」

「桜の使いはね、使命を果たさなきゃならないの。」

桜は何を言っている？

桜は桜の木に手を当てて目を閉じる。

「桜、何を言つて……」

振り向いた桜は笑っていた、今まで見たことがないような悲しい笑顔だった。

「桜……どうしてそんな悲しそうなんだ……？」

桜は華やかに花を散らせる木を見上げる。

「楽しかったなあ・・・今まで・・・春ちゃんがいて、綾ちゃんがいて、姫ちゃんがいて、雪ちゃんがいて、そして・・・パパがいて。」  
「桜・・・？」

俺はゆっくりと桜に向かって歩き出す。

今の桜を見ると悪い予感しかない。

「なっ！？何だよこれ！！！」

歩いていくと、見えない壁に阻まれた。

その壁は俺と桜を完全に遮り、通る事を許さない。

「使命を全うした桜の使いは消え去る運命。」

「なっ！？何だよそれ！！ふざけんな！！！」

どんなに壁を叩こうとも、それが壊れる事はなかった。

「ボクだって、パパに女の子として見て欲しかったんだよ？ずっと、ずっと、大好きだったんだよ？」



「桜！さくら！！」

血がにじもうとも皮が裂けようとも諦めずに俺は殴り続ける。

その間にも桜の体から美咲と同じように光が溢れていく。

「……ごめんね……パパ……ずっと、大好きだから……」

「駄目だ……駄目だ！！桜！！！！」

桜は俺に背を向けて桜の木を見る。

声がかれても拳の骨が折れても壁にを殴る。

「……最後まで……笑顔でいようと思ったのに……」

桜は振り向いて、俺に駆け寄るが壁に阻まれる。

「もっと……もっとずっと、一緒にいたかった！！！！」  
「さくらあ……」

桜は見えない壁越しに自分の手と俺の手を合わせる。

こんなにも近くにゐるのに…… 凄く…… 遠い……

「春ちゃんや姫ちゃん達とパパを取り合って・・・ケンカして・・・一緒に笑って・・・一緒に泣いて・・・」

「あゝ！あゝ！あゝ！」

俺と桜は泣きながら頭を壁越しにコツンと合わせる。

「やだあ……いやだよお……」

桜の姿が消えてなくなっていく……

「……離れたくないよぉ……!!!!!!」

桜が、俺の目の前から消え去った。

桜が消えるのと同時に、見えない壁もなくなる。

「あ……ああ……うぐっ……えっぐ……」

目の前が涙でにじんでいく。

「みくらあ————！！！！！！」

その日、俺の前から桜がいなくなった。

例え何が起ころうとも、時は止まらない。

そして、季節は春から夏へ・・・

（春の訪れ、完）

## 最終話（後書き）

いやはや、ようやく終わりました。よく頑張った、自分に拍手！  
そして、一位発表！

一位は春奈だったので、春奈が最初です。  
次作品、『夏に吹く春の風』をお楽しみに。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7934a/>

---

春の訪れ

2010年10月9日19時53分発行